

---

# **大聖堂騎士団員～イリア・キサラギの軌跡～**

楽しんでます

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大聖堂騎士団員～イリア・キサラギの軌跡～

### 【Zコード】

Z6777U

### 【作者名】 楽しんでます

### 【あらすじ】

平凡な生活を夢見ていたイリア・キサラギ少尉しかし突然怪物達の襲撃を受け重傷を負うその時、一人の半獣人の少年と出会い彼女の運命は大きく動き出す。

(この作品は昔見た、映画・ゲーム・アニメ・参考にしてます。

紹介表示を一部修正しました。

なお、作品に登場する種族・小道具は既に、他の作者様のご許可を頂いています。

## 第1話～プロローグ～（前書き）

初めて小説を書きました。

これからもよろしくお願いいたします。

一部誤字を修正しました。

## 第1話「プロローグ」

「プロローグ脱出」

私はイリア・キサラギ少尉この辺境のアルティア第22補給基地所属の情報オペレーターだ。

今この基地は混乱と怒号悲鳴と銃声……そして、化け物の雄叫びに包まれていた……

事の始まりは30分前になる私は仕事を同僚に交代して2時間の休息を取る為に自室のベッドに入った。

ウトウトと眠気が入つて来たとき突然警報が鳴り響いた?。

『当基地に所属不明の敵出現！基地職員並びに全兵士は戦闘配置に付け、これは演習に非ず繰り返す……』

スピーカーから非常アラームとオペレーターの声で、眠気が吹き飛ぶ。

私は直ぐさまベッドから跳ね起き、指令室に向かった。

(所属不明の敵？こんな辺境の小さな基地に……でも出現とはどうい言つ事何だろ……)

今は考えても仕方が無い、早く自分の仕事をしなくては私はこの基地の情報オペレーターだ、情報を分析して各部隊に正確に伝えなけ

れば成らない、不正確な情報は部隊又はこの基地や自分を危険に晒すのだ。

通路は混乱していた同僚や顔見知りの兵士達が、慌ただしく走り抜ける。

その時悲鳴と断末魔そして化け物の叫び声が聞こえて来た。

「ば、化け物…… もやああああつ」

「撃てーつーぐああああつ」

人が血激しく吹き出して倒れていく。

「ガアアアアツ！」

「グオオオオツ！」

「グルルルルツ！」

そこに現れたのは……

通称：アルマジロタイプと呼ばれる甲殻型のモンスターと人狼タイプのモンスターだった。

(よりによって、アルマジロタイプ……私のオートマチック拳銃じや豆鉄砲レベルだ)

「う、うあああつ、に、逃げろーっ」

「あやああーっ」

咄嗟に私は他の職員達と一緒に逃げ出した。

その後の事は覚えていない途中まで方同僚達と一緒に逃げていたけど逸れてしまったからだ……

今、私は生存者を探しながら、通路を移動していた……

壁に有る非常用の電話を使い、思いつく全ての部署の回線を回したが、誰も出ない……

恐らくエリアを放棄したか全滅のどちらかかだ……

連絡を諦め通路を歩いて行くと顔見知りの兵士が横たわっていた……

「うう……」

彼は死んでいた……

私は彼に祈りを捧げ彼の装備品を拝借した……正直死人から武器を取るのは気が引ける……だが贅沢は言つてられない……

武器はアサルトライフル一丁・予備のマガジン無し、手りゅう弾一つ・多分彼が一つ使つた、そしてアーミーナイフ一本、無線機は壊れていた……

私はアサルトライフルの銃口を下にさげる用に構え慎重に通路を歩いて行く……

よつやく空き部屋を見つけ、今後の対策を検討する。

案は三つ

1化け物と戦う

2生存者を見つけ救助待つ

3基地から脱出する

私は考えた末に③を選択した理由は一番は愚策だ！化け物の数が多すぎる此処に来るまでに、やり過ごした数を考えれば十五・二十匹じゃない恐らく少なくとも三百か五百は居る……

私はゲームや映画の主人公じゃない……ただの情報オペレーターだ。

次に一番これも無理だろ？私は前に、強盗を始めて威嚇射撃で撃退した事があるが一人で化け物だけの基地から仲間を捜すのは無謀過ぎる。

第一救助が来るかどうかも解らない早くても、もし来ても、一・二・三日はかかる……到底間に合わない。

私は空き部屋の平凡を慎重に開け通路を警戒しながら慎重に歩いてエレベーター フロアを田指した達を片付けてから、非常用階段で地上（外）に出よう……

そつまるで昔見たホラー 映画の世界に迷い込んだ気分だ……

そつ結論付けると私は空き部屋のドアを慎重に開けて通路を警戒しながら非常用エレベーターと、非常用階段の有る通路を田指した。

考えてても仕方が無い、私は空き部屋のドアを慎重に開け通路を警戒しながら、エレベーターと非常用階段に向かつた。

エレベーターフロア付近で、気配を感じ、身を隠しながら、様子を伺つとやつぱり見張り（？）の人狼が一匹居た。

（まるで彼は軍隊だわ……）

動きに無駄な所が無いそれに襲撃から3時間が立つ。

この様子だとやつぱり、他のエニアは駄目だろウ……

まずは地上（外）へ出よつその前にひの見張り達を片付けずける。

私はしゃがんで手投げ弾を転がす用に投げる、激しい爆音と爆風をして辺りに煙りが巻き起つる、一匹の内一匹は虫の息のもつ一匹は辛うじて立つてるのがやつとだった。

「うあああああっ！」

私は一匹に止めをさし非常用階段のドアを脚で蹴破る。

階段の踊り場にもつ一匹が隠れていたが、素早く頭部を撃ち抜く、奴は仰向けに倒れ動かなくなつた…。

突然背後に気配を感じ振り向き様にもつ一匹を倒した。

「ふう……もう居ないわよね?……」

誰に言つことなく私は一人つぶやいた、私は急いで階段を駆け登る。

「はあ……はあ……。」

こんなに走ったのは久しぶりだ……

もう少し訓練を真面目に受けとけばと少し後悔する……階段を駆け登り続けると出口が見えてきた。

「はあっ……はあっ……ケホ……ケホ……」

激しい運動に息が上がる私は咳込み呼吸を整える……

身体を落ち着かせ階段を登るつとした時突然ドアが吹き飛ぶ。

「! !

私は反射的に階段に伏せた。

ドアをブチ破つて来たのはまた人狼だった。  
いい加減にしてよ……

人狼は腰辺りで両手を広げ雄叫びを上げる。

私は素早く頭部を撃ち抜く。

「ガアアアアツ、じゃないわよつ。」

ライフルは今まで弾切れになってしまったので、その場に捨て変わりにオートマチック拳銃のセーフティーを解除して外の様子を伺う。外は地獄絵図だつた赤々と夜空を炎が照らし、軍用機や軍用車両がまるで玩具みたいにひっくり返つて炎上していた。

私はトラックの残骸に隠れて様子を伺う……

やつぱり此処にも居る。

魔物の数は全部で8体出まるで偵察をしている  
兵士達みたいな動きだ……。

私は気が付かれ無い用に残骸やコンテナ等に隠れながら倉庫区画を目指す、倉庫区画なら多少の薬や食料品がある筈だ出来れば壊れない車両も、残ってる筈だ……

\* \* \*

＼蒼き獸王／

うつそうとした樹海の中を一匹の蒼い魔獸が駆け抜けた。

その姿は巨大な狼と狐を合体させた容姿だ毛色は蒼い色体格は馬ぐらいは有るだろ。

今彼が向かつて居るのはアルティア地方に有る  
人間が造つた施設だ。

僕は、蒼い獸王と呼ばれる魔獸だそれも普通の魔獸とは規格違いだ。

彼の後ろに魔物の大群が後を追つて来る……しつこい、お前達等に構つて要られか。

彼は後ろの連中を、無視しようと、全力で振り切ろうとした彼のスピードに着いて行けるのはこの世界で条件付きで二・三人位だ。

更に加速しようとした時前の地面が突然盛り上がり中から蟹とサソリを合体させた様な魔物が現れた。

甲殻類の……まあ、ザコの名前なんて覚える必要なんかないか……

元々彼に自分を害する者の名前等を覚える気が無かつた、ただ有るとすれば自分が認めた相手か、自分以上の存在か又は自分が認めた相手位だ。

彼はカニモドキを思いつ切り踏み付け跳躍した。グジャリ……。

一撃で奴は潰れたそして何事も無かつたかのようにひたすら走る。

「アレは……人間達には無用長物だ……」

彼の真上に人狼達が樹の上から降つて来る用に飛び掛かつて来た。

「チツ……」

舌打ちすると右前脚のガントレッドの様な脚飾りが光り輝く、そして青白く輝く爪<sup>クロ</sup>が出現したつ、そして身体のバネを使い跳躍する。

「ハアツ！」

人狼達は瞬時に輪切りにされる。

着地すると今度は樹の怪物オークが現れた。

「！？」

いきなりオークは丸太ほどのこん棒を、振り回し襲いかかって来た大量の土砂と土煙が巻き起こせる。

咄嗟に僕は素早く飛びのく……叩き付けたこん棒を持ち上げ、二度目の攻撃僕はジャンプして奴に向かつた、しかしそれが災いした左腕に身体を締め付けられる。

「ぐあああつ……」

だが奴の顔面に口から魔弾を放つ。

銃弾を撃ち込まれた、カボチャ見たいに頭が弾け飛ぶ魔弾によって粉々に吹き飛ぶオークが仰向けに倒れる。

僕は幸にも前脚が自由だ、ありたつけの魔力を、ガントレッドに送り込む勢いよく刃先だけを腕の付けに飛ばす、そして鈍い感触と共に腕が見事に切断される。

ガントレッドの特長は刃を飛ばす事が可能なのと状況に応じて刃先を変えられる利点がある。

ガントレッドに送り込むこれは小型紋章機關を取り込んだ古代兵器の一つだ使い方はただ念じるだけ僕は斧刃をイメージする……

ガントレッドの先に魔力でできた鋭い斧の刃が出現する。

「斬れ」

勢よく刃先だけを腕の付けに飛ばす。

このガントレッドの特長は刃を飛ばす事が可能なのと状況に応じて刃先を変えられる利点がある。

関節ごと切断する、僕は腕ごと地面に落下する……幸い高さが低かつたのでダメージは少ない。

バチバチ……ジッと言つ異常音が聞こえる。

あちゃーっガントレッドに無理させ過ぎたか……

ガントレッドから少し煙りが出たが何処の町で、修理を頼むか……大分骨董品だが、闇で頼めば大丈夫だろう……

首に巻き付けてあるスカーフと一緒に付けて有る袋にある程度路銀が入っているがるそろ心もとないこの件が片付いたら野宿だ……

## 第1話～プロローグ～（後書き）

少し編集しました。

## 第2話～蒼毛獣王～（前書き）

文書表示を変更しました。

描[写]を一部修正しました。

## 第2話～蒼き獣王～

油断大敵だな……まあ今に始まつた事じやない、僕は魔物達の気配を感じとり素早く向きを魔物達が来る方向に向きを変える、そして狼が獲物に襲い掛かるかの用に姿勢を低くし四本の脚の爪を、地面に食い込ませる。

奴らはよほど死にたい用だ……並ば望みビツリ遠慮はしない。

「ブلاスト・ノヴァ」

そう叫ぶと口を大きく開け魔力を収束させる、そして一・二三百メートル先にいる魔物達の群れに魔弾を放ついや、レーザーとでも言つべきか彼から放たれた魔力の閃光は容赦なく魔物達を襲う。

雷鳴の様な爆音と凄まじい閃光が辺りを包む、爆風と光が収まつた後には全長五百メートルのクレーターと魔物達の骸があつた……

かなり威力を抑え放つたんだが……やはり対魔族用に造られただけは有るな……

「もう少し低めに撃つべきだったかな？」

何も知らない第三者がいたら多分……言い訳にしか聞こえ無かつたはずだ……

彼は目的地に向かつて走り出した、もつ邪魔な魔物は居ない後は目的地まで一直線だ。

見晴らしの良い丘の上から人間の施設を見下ろす……

「カニモドキ10、人狼20、アルジロタイプ10、そして……樹の怪物オークが10か……」

オーク一匹はフェンスの近く早い目に潰すか……

僕はそう決めると丘から一気に駆け降りる、坂を弾丸の用に疾走する、目の前に対魔物用のフェンスが見えて来るこのフェンスは普通の巨大な熊位なら簡単に黒焦げだたが僕には役に立たない。

僕を黒焦げにしたいなら戦艦クラスの紋章機関三つはもって来い。

派手な音供に電流がsparkするが僕にはどつては精々静電気レベルだ。振り返つて来たオークの頭をかみ砕く。

騒ぎを喚ぎ付け残りのモンスター達もやつて来る……

さて、人間達に新手と思われ無いように獣人の姿に変身しよう。

僕は体内の魔力を集めると自分の周りに放つた。

たちまち白い光と電流が走り僕は片膝を折る用に地面にうづくまでいた。

「まとめて相手をするよ。」

そう言うと拳を前に突き出す用に構えるつ、そしてマシンガンの用にありたつけ叩き込む。

今まで約半分のモンスター25匹は片づけた残りは警戒をしていて向かつて来ない。

素早く左手を巨大なガキ爪に変化させると僕は死の舞を舞う次々と魔物達がなす術も無く命を散らす……

(向かつて来なければ死なずに済むのに何故来るんだお前達は!)

そう僕は今彼等に苛立つていた、心が泣いてるもう……いい加減逃げてくれ……

多分僕の顔から……涙が出てるのだろう……視界が滲む彼等を操る存在に対して表現しきれない殺意が沸いて来た。

余りの理不尽さに虚しくなるが此処で闘うのを止めるとは自分だ！気が付けば僕一人が立つて周りは魔物達の骸だらけだった……

余りやるせなさに遠吠えの様な叫び声を上げていた……

そして僕は倉庫と呼ばれる建物が沢山建つて居る所へ向かう何故なら耳に女の人の悲鳴が聞こえて来たからだ、もう誰も死んで欲しくない人間も魔物達も。

そう思うと倉庫に向かつて走り出した。

多分これが此処の闘いの最後だろ？……さつき嫌な気配は消えた。

アレは持つて行かれたが少なくともまだ生きてる人間に話を聞けるだろう……

姿はこのままの方が都合が良い本来の姿は、特に女人には不向きだ恐ろしい怪物にしか見えない。

倉庫区画と呼ばれるエリアに付くこの辺りからだつたな悲鳴が聞こえて居たのは人の気配がする、此処だな僕は倉庫の入り口へ向かうそこには一匹の人狼が女性の軍人を片足で踏みつけて居た。

僕は奴を睨みつけると走り出した……このままだと彼女は死ぬ死んでしまう……

不意に頭に忘れかけていた、思い出が浮かぶ……

過去むかしこんな事が有つたな……あの時と同じ経験等一度と御免だ。

奴もこちらに氣づき、脚を彼女から退けるそしてこちらに向かって来る。

恐らくこの場の戦いは これで終わりだろ並ば遠慮は無しだ……彼女が叫ぶ。

「だ、駄目……は、早く逃げなさい……」

無理に声を出して咳込む……

彼女が心配だが今は人狼を片付けるのが先だ。

僕と奴の姿が重なる恐らく彼女には一人の剣士が居合で切り合つた様に見えたはすだ。

奴のガキ爪は僕の左頬を掠めて地面に突き刺さる！僕の左腕は奴の

脇腹を貫いていた……

左頬を血が伝づ……

人狼の方は腹から血を吹き出し倒れる。

彼女は無事か確認する事にした彼女は気を失っていた僕は彼女の片腕を拾うと傷口に魔力を注ぎ込む……そして次に、自分の半身（端末）を彼女に与える。

人間等の生き物を傀儡にする大禁術……しかし僕のやり方は少し違う僕のは大半の負担を自分自身にかける本来僕は傀儡等必要しない必要無い。

それから次は彼女の深層領域に意識を沈ませる……

彼女は半分人間では無くなる多分罵倒される……いや怨まれるだろう……当然だ僕にはそれらの責めを負なければ為らない怨まれるのは良いただ……泣かれるのは嫌だ……

そう想いながら僕の意識は闇に沈んで行く……

## 第2話～蒼き獣王～（後書き）

描写の修正をしました。

### 第3話～契約と邂逅～（前書き）

文字表示を変更しました。

描[引]を修正しました。

### 第3話～契約と邂逅～

イリア・キララギ sibe

私は倉庫区画に無事に着いたとりあえずは13番倉庫に入る。周りを見渡す……

酷い荒れようだ……まるで何かが暴れ回ったようだ……

不意に後ろに気配を感じ振り返るとそこには人狼が居た！

私は銃の引き金を引く。

狙いは、正確にそして奴を仕留めるはずだった……しかし奴は臆する事無く、私に向かつて来る時には、フェイントをかけ床を蹴りながら……奴は壁や天井の鉄柱等を踏み台にして襲い掛かつて来た。

「……」

咄嗟に飛びのいてかわす。

「ガアアアアツ！」

両腕を振り回し襲い掛かつて来る、まるでチャンピオンのボクサーの様だ、とてもじゃ無いが避けきれない突然腕を床に叩き付ける床のコンクリートが破片を撒き散らす

「キヤ……つ」

破片で目尻が切れた、少し血が出ている……

（こいつ……新手だつ、油断出来ない……！）

銃を構え様としその時、奴が……私目掛け飛び掛かつて來た。

ドッサ

私は押し倒された！怯まず撃ち返そうとした時奴が、その大きな口を開け噛み付こうとする。

「い、嫌ーっ」

咄嗟に右手で顔を庇う……ガブリと鈍い音が、して凄まじい激痛が私を襲う。

「 つ！」

私は声に鳴らない、悲鳴を上げる良く見ると私の腕が、く・い・ち・ぎ・ら・れ・た！

血が溢れ出す痛みで気がおかしく成りそりだ……

（な、ナイフを使って戦わないと……）

次の瞬間脇腹に激痛が走る。

「ガハツ……っ」

もうダメ……意識がボンヤリして来た……

そこに少年が現れた、私は声を振り絞り彼に逃げる様に叫ぶ。

「だ、駄目……に、逃げて！！」

しかし彼は逃げる所があらう」とか魔物に向かつて行く。

(ダメ早く逃げて。)

私祈つた少年が逃げる事を助かる事を……

(う、嘘……)

そこには動かない二人はまるで居合を決めた剣士の様だ……

やがて人狼が倒れる……

そこで私は氣を失つた

……

(私死ぬのかな……お父さん……お母さん……ゴメンなさい……お一人の分まで長く生きてお一人に会いたかった……それからカール叔父さん……わがまま言つて

ゴメンなさい……もう少し早く軍を辞めて……叔父さんの心配の種に成らない様にしたかった……です少し悔いがあるならお父さんとお母さんの事故死の事もつと調べたかった……穏やかなあの日あの時が懐かしい……あの日に戻りたかったなあ……)

そう想いながら私の意識は闇に墜ちる……そつまるで深い海の様だ

……不意に景色が変わる全く記憶に無い風景だ。

あれはさつきの男の子？それに、あの女のは？

私は彼に近付こうとした……その時だ、いきなり沢山の人達に囲まれる、そして何かを話してると解らなかつた……

よく見ると周りの人は皆歴史の本でしか見たことの無い服を着ている……

「…………！」

「…………！」

大人達が何かを叫ぶが、聞き取れない……

そしていきなり目の前が白い光りに包まる。

「眩しいっ。」

目が光りで眩んだが辺りは誰も居ない……

いや先ほどの少年だ泣いている……

「ねえ君どうしたの？」

私は思い切つて彼に声を欠ける彼に触れた瞬間誰かの記憶が流れ来る。

これは少年の記憶？

その光景は酷いものだつた……彼は何処に行つてもまるで疫病神扱いだ……

あまりの酷さに心が痛む……

何故彼がこんな目に遇つたのだろう……どうして誰も……助け無いのだろう……

心が痛い……胸が苦しいそう思つたら、自然に涙が流れて來た……同情ではなく余りの理不尽さから来る哀しみだつた……何かの気配を感じ、周りを見ると前方に巨大な獣がいた。

- - 巨大な狼の胴体と狐の頭、私彼を知つてゐる子供の頃、読んだ童話に出て來る魔物だ……

でもそこに立つて居る、彼は怖くなかった……どちらかと言えば、勇ましい聖獸の様にも見える……そして田舎としても優しかった……童話では子供達をさらつて食べるとかお姫様を惑わして勇者に倒されたとかそんな話しばかりだ……

彼が近づいて來る……私は彼に近づく……

私は聞くべきでは言ひべきでは無い事を言つた……

「貴方は地獄の門番? それとも案内者?」

少し心が痛むがそれでも聞きたかつた何故ならさつきから私と彼のいや……全てが漆黒（真つ暗）だ……

そんな私に彼は姿をあの少年に変える……

「もし此処が冥界の入口なら僕では無くケルベロスの管です此処は貴女の深層世界です。」

深層世界？私は混乱して首を傾げた……

少年は話しを続ける。

「貴女はまだ死んでいません、現実の貴方の傷を治して僕の方からこちらに出向きました。」

私はキヨトンとした私はまだ混乱して居るのが面白いのか彼は少し苦笑する。

何がそんなに可笑しいのだろうか？私は少し苛立つすると彼は少し心申し訳なさそうに私に謝りだした。

「済みません貴女がつい訳が解らない顔をして居たので。」

「別に構わないわ……逸れよりも何故こう成ったのか教えて、蒼き獸王……で良いんだよね？」

少年は驚いた顔で私を見る……正直にカワイイと思つた。

「すみません、貴女と契約をしたいのですが……」

契約？何で……私何かと？

「実は……貴女の怪我が……」

( もう言えれば……現実の私の状態忘れてた――― )

「す、ストップ、お願ひだから……それ以上言わないで……」

「これ以上聞いたら卒倒する……」こんな少年の前で倒れたくない……

「！」、「メンなさい。」

彼は少しひくりして私に謝つてくれた。

「私の方こそ」「めんね突然大声なんか出して。」

少し慌てた私の方が恥ずかしい。

「では良いですか？」

彼が私に問うでもその前に聞かなければ。

「何故私なの？」

一言もつ告げる。

彼も一言。

「貴女の心は常に平穏を安息をして大切な人々を想い続けていました。」

彼も私の心に触れたんだ……

なら、おあいこだ……迷う必要なんか無い……

「我が名はフェリオ！汝の中の心に問づ！」

私も応える

「我が名はイリア！我も汝に問づ！」

「「我が一人、想いは同じ共に永久の安息を共に求めん！」

「これで契約は終わりです……マスター。」

（貴女は戦い向かない人だ……僕が護りますマスター。）

「マスターて何だか、／＼／＼少し恥ずかしいな。」

（フェリオ君は戦つては、ダメ……私が変わりに戦づ！）

二人のそれぞれの想いに二人は気付かない。

「何だかとつても眠くなつて……来たよフェリオ……」

急な眠気にその場に倒れる……

「それは僕も、同じですマスター魔力をお互に、使いすぎましたから……お休みなさいマスター。」

（フェリオ君……お休みなさい……。）

そして今度こそ私は深い眠りつく  
.....

### 第3話～契約と邂逅～（後書き）

・からり…に変更しました。

## 第4話～救出～フヨリオの過去～（前書き）

読みにくい表示を修正しました。

描[引]を修正しました。

## 第4話～救出～フヨリオの過去～

エイの様な空中強襲揚陸艦が一隻アルティア第22補給基地に向かつて飛行を続けていた……

既に壊滅の報を聞いて、一日がつっていた……

強襲揚陸艦「ブリッジ」

ブリッジ内ー

「こちら強襲揚陸艦ブリッジ、大聖堂騎士団第1騎士団聞こえますか?」

オペレーターの声に無線が応える……

『こちら、第1騎士団基地内部は我等が制圧した!繰り返す……我等が制圧した!』

「了解……指定の着地ポイントの状況はどうですか?」

『第一滑走路に向かわれたし……』

「第1滑走路では?」

『駄目だ、第一は損害が酷くて使え無い……第一に回してくれ……』

「了解、第一滑走路に向かう以上。」

艦長を見るオペレーターそして若き艦長は指示を出す艦内が慌ただしく成る。

金髪の髪と整つた顔立ちそして目付きが鋭い彼はヴァルゼラート公国軍特殊作戦実行部隊「ブリジット・フェリル」の指揮官レナード・ウォード少佐だ彼は冷徹で合理主義者だ。

「魔物マニアは騎士団（化け物）にでも任せると……化け物同士、気が合うだろ……」

彼はそう呟くと煙草を吹かす……

やつてられん、今は化け物にこだわる理由が無いのだが……、多種族と共に存50年歐州大戦の性で軍縮？

結局……国王（上）は分かつてい無い……所詮は力が有るもののが国を世界を制すのだ。

取り敢えずは急ぐ、事は無い慎重に確實に目的をこなせば良い……

- - ブリジット格納庫 - -

\* \* \* \*

ハンガーデッキに騎士団員の少年がいたくせつ毛の緑の髪と青瞳の少年だ、騎士団員候補生の貴族の礼装を軍服にした様な水色の制服を着ている。

誰かが近づいて来る。

規則正しい足音が近づいて来るポーテールの白衣の少女が近付いて来る。

レナード・ウォード少佐の妹で大聖堂騎士団モンスター被害調査部のリフィア・ウォード准尉だ、彼女は少し咎める口調でルースを呼ぶ。

「ルース小尉！」

全く……好きな戦車と来れば、仕事そっちのけ何だから……もう……

「ハア～っ、ルース・し・ょ・お・いつ……」

私は思いつきり彼を怒鳴り付ける……

全く……戦車マニア何だから……もういくら最新式の零式が騎士団に配備されたからって。

ルース・ファルク side

ん、フィリアが何か怒鳴ってるがそんなの零式の前では聽こえな振

りだ！

零式は現在最新式の可変式機動戦車だ、H型変形フレームを採用し  
凸タイプの上部ボディそして両側に腕型のビーム・ガンを装備「ち  
なみにオレのは30ミリバルカン砲」を装備している、「クピット  
は戦闘機の様な流線型だ。

タンクタイプの全高は6・5メートル、

デストロイタイプは7・9メートルだ、

全長は18メートルで変形時間は4・5秒だ

主武装は177ミリレール・キャノン又は大口径ビーム・カノン「  
作戦に応じて換装可能」そして180度の旋回をが可能だ。

「クピットは最新式の戦闘機のを採用しハッチはモーターになる個  
々まで来ると、ロボット兵器の部類だがカテゴリーは機動戦車な  
が残念だ。機動性を忘れていたな？」デストロイモードは時速18  
0キロでタンクタイプは時速350キロだ。

ん~それにしてもカラーリングも良いホワイトカラーでハッチはラ  
イトブルーだ。

大聖堂騎士団に去年正式採用されたばかりだしなうん、うん、良い  
戦車だ。

（これは戦車のカミサマの導きだな）

「もう、ルースки・い・て・い・る・の・・・」

うおっ！耳元で怒鳴るキーンと彼女声が頭に響く片手で耳を抑え振り返るとソニーは……魔王化したリフィアが立っていた……（怒）のオーラが見える……周りの視線がイタイ……此処は素直に謝りつつ……

「わりい、零式に見とれてた」

彼女は少し機嫌を治した。

オレは彼女に用件を聞く事にした。

「それで、ただ怒鳴りにだけじゃ無いんだろ？」

「ええ……降下地点第一滑走路に変更だつて……」

第一滑走路に変更？目的地点から、かなり遠くなつたぞ騎士団の先発隊の援護どうすんだよ？

多分オレの考へてる思いが顔に出たのだろう。

彼女はオレの疑問を一気に吹き飛ばす事を口にした。

「うん、何でも……先発隊が来たときほとんど居なかつたんだってそれで、すぐ片づいたんだって。」

何だそりやそーだ！折角零式で無双してやるつと思つてたのに……

アームがけたましく鳴る。

二人「？」

突然アラームがなる…………どうやら無駄話は此処までだな。

《零式パイロット及び調査員は各車に搭乗せよ！繰り返す……》

「それじゃ、リフィアあとでな。」

「ええ、また後でね。」

そう言つてオレ達は配置に着くと行ぐぜ相棒。

そう言つてオレは零式の機体に掛けて有る梯を登りハッチを開け、コックピットシートに座りハーネスで身体を固定する……

素早くコンピュータを起動させキーボード叩きプログラムを始動させる。

「火器管制……チェック……バランサー……チェック……全システム・オールグリーン。」

マニコアル通りにシステムを起動させる……

「オペレーターこちら、ウルフーどうぞ。」

通信回線を開きオペレーターと交信を開始する。

《これより零式及び調査班は予定通り、担当ブロックの調査を開始して下さい。》

「了解、残存戦力はどうですか？」

『周囲に残存戦力は認められず、また地下施設にも少數確認されたが、騎士団によって殲滅を確認。』

「いひらの任務は？」

『調査員達の安全を優先して下さい。』

「了解。」

しばらくして鈍い衝撃が伝わるどひやう無事着いたらしく。

「いひら、ウルフ1ハツチ解放願う！」

『これよりハツチが開かれる強襲揚陸艦から次々と零式と装甲車が吐き出される。』

「これより、倉庫区画の調査隊の護衛に就く。」

オレの零式を初め計3台が調査隊の乗る装甲車の護衛に就く……外部モニターに注意しながら第13倉庫に着く……

『いひらフーリックス4、ウルフ1聞こえますか？』

「どうした？ フーリックス4？」

索敵モニターを見ながらオペレーターの報告に耳を傾ける、索敵モニターを見ながらオペレーターの報告に耳を傾ける……

『生命反応が、二人分確認されました。』

生存者が居た！オレ達はその報告に正直驚いた。

「直ちに救助を、それと臨時司令部に連絡を。」

『了解、』

調査班と護衛隊が装甲車から出でくる、リフィアもそれに着いて行く。

「リフィア気を付けろよ。」

『うん、気を付けるね』

『ルース、お前のお姫様はちゃんとHスコートしてやるよ。』

「ば、バカヤローーーー！」

『うふふ……じゃあ行つてくるね』

たつく……あいつら、幾ら周りが知ってるからって軽口にも程があるぞ……プライベート回避だつたから周りに聞かれ無かつたかもな。

\*\*\*\*\*

私を含む調査班は倉庫に入る。まるで中は嵐が来た跡みたいだつたライトを当てながら奥に進むと何か人影が倒れていた。よく見様と近付く……

「ヒツ……つ。」

誰が倒れている。慎重に近付く。私は思わず声を漏らす、そこには人狼が倒れていた、しかも鋭い刃物で脇腹を斬られている……

お、落ち着け私。でも怖いし少し気持ちがわるい。

資料等で散々見てきたが実物はやはり気持ちの良いものでは無い……

奥に人影?! しかも一人慎重に近付く。そこには、半獣人の少年が女性士官と一緒に倒れていた意識が有るか調べ用としたら、その女性は私がよく知っているひとだった……

「い、イリアさん!-?」

「う、うん。」

半獣人の少年が声を出す……

私は駆け寄り一人の意識を確認する。良かつた。一人共生きてたそして。

イリアさんの怪我の具合を、確認しようとすると彼女の右腕の変化に気付く右腕は、黒紫のよく解らない物で腕の間接間で埋まっていた。…… 破けた服の右肩には蒼い宝石見たいな者が埋まっていた。

「至急救護班を、要救助者は一人、一人は蒼い髪の半獣人の少年年齢は10才位もう一人は20才位の赤毛の女性、なお女性は変異体の可能性が有り、急いで下さい。」

変異体……稀に報告される異常事例だ……たまに怪物に襲われ身体が変化する普通のモンスターならこんな事は起きない……だが、危険レベルSかAクラスは確実にこの変異体に成るそう成つたら、もう……助からない例え助かつても自我は失われる……稀に10年位自我を保つた者いたが治療法は見つかっていない精々変異を抑える抑制剤位だ、私はイリアさん事を姉の様に慕つていた……兄と別れた時はショックだった……あの出来事は兄の自業自得だ……今はそんな事を思い出したくない……嫌時に嫌事を思い出す……自己嫌悪で気が滅入る。

イリアさんが助かった事を今は喜ぼう……

やがて救護班が来てイリアと少年を治療センターに運んで行つた、私は今は自分の仕事をする……将来は医者に成りたいのだ変異体の治療法を見つけるそれが私の今の目標だ。

\* \* \*

イリア・キサラギ side

『 - - - ア』

『 - - リア』

誰かが私を呼んで居る……。

「「イリアーー。」」

「うへんひ

田を覚ますとそこは草原だった……わ、私やつぱり死んだの？

田の前に女の子が、立つて居る私より4・5才年下だ、栗色の髪に緑の瞳の可愛い女の子がいた彼女は……確か……。

フュリオ君と一緒に居た女の子だ！

「ふう、田覚めないから駄目かと思つた

え、駄目かと思つた？どうしてだひう……

「貴女が、倒れてからもう一ヶ月経つてるの」

えーと、一ヶ月……一ヶ月……いつかげつ一つ？何て事だ……

私はこの一ヶ月深層世界で眠つていたんだ……

一つ、彼女が私の前に居る事。

一つ、風景が田茶苦茶だ、空に家が浮いていたり足元が地面に着いていない。

そして最後の三つ田は。

空が無いこれだけ揃えれば嫌でも現実出はないと知らされる。

「おはよ、イリア。」

少女が話し掛けで来るが私には誰だか分からないますは自己紹介がさきだ。

「初めまして私は……イリア・キサラギ少尉です貴女は？」

「私はアイリスと呼んで。」

「分かったわ、アイリス。」

「余りお喋りをしてる、時間が無いから単刀直入に言つわ。」

彼女の雰囲気から余り良くない、状況だと直ぐに分かる。

「そう言つ悲觀的な物じや無いわ。」

違つたの？てつきり契約に失敗したと思つたんだけど……

「貴女とフェリオの契約は成功よ、ただしフェリオの魔王としての力が貴女に流れてるから……」

フェリオ君が魔王……せめて獣王とかじやないの  
あんなに可愛かった少年の顔が浮かぶ……

(シユールだ……)

「そこ」いきなり落ち込まない！

「は、はー！」

咄嗟に飛び起き姿勢を正して敬礼する……軍に居たから反射的に身体が反応した……

「うん、宜しい」

まるで教官だしかも（鬼）がつく……

「それは、置いといてフェリオは貴女に負担が、掛からない様にしてる……つまり貴女の右腕が自分と同化しないように。」

「！？」

成る程道理で納得した、フェリオ君が私と契約した時フェリオ君も眠ってしまった……

「それで、貴女はどうするの？ フェリオの力＜魔王の片腕＞を使つ？」

「……はい、使います。」

「その力をえれば、貴女が貴女で失くなる……」

彼女は私に真剣な眼差しで見つめて来る、まるで命を棄てる覚悟があるのかと……私も真剣な眼差しで見つめ返す……

「分かったわ、貴女が……貴女の事がフェリオと同じ……まるでフ

エリオのお姉見たい…………」

私がフェリオ君のお姉さん……

「貴女の考えが外に出てる。」

「…………」

「言い忘れてたけど貴女の体質は変異体への適正が有るから。」

「適正…………じゃ私が化け物に成らないと?」

「YEUでも有るしZOOでも有るわ

「…………」

「ただ…………フェリオが怒るかな?だって貴女を護りたいて、言つて  
たから…………」

「どうこう事だらう。」

彼女は彼のもう一つのフェリオ（そんざい）だらうか？

「そんな、大袈裟な物じや無いわただ昔彼に食べられただけ…………」

彼女は凄く哀しそうに顔の表情をする……私は、勇気を出して理由  
聞いた。

「そ、それって、どう言ひ事?」

「そのままの意味よ、イリア彼は私は彼を護ろうとした……でも私は、大怪我をして死にかけていた……フェリオは必死になつて貴女と同じ様に助け用としたけど……魔王の力が暴走して私を飲み込んだの……私が私いっしょを保つてられるのは、フェリオがそれを拒絶してゐるから……」

私は黙つて彼女の話を聞いていた……そして自分には無い選択肢を聞いた化け物に成るのが恐くないと言えば嘘だ、現に話を聞いて震えてる自分が情けない……

「も、もし彼が、私が鬪わないと決めたら……？」

「そうね……一人揃つて彼に殺されるわ。」

「殺される……誰に?」

「空を制する者……」

「?」

体誰の事なのだろ……私はますます訳が解らなくなつた……

「いざれ、解るわ……。」

アレ何だか……視界がぼやけて……來た……

「そろそろお目覚めの様ねまた、合いましょ……イリア……」

体誰の事なのだろ……私はますます訳が解らなくなつた……

「いざれ、解るわ……」

アレ何だか……視界がぼやけて……來た……

「そろそろお目覚めの様ねまた、合いましょ……イリア……」

そして私の意識は暗闇に隠さる……

第4話～救出～フーリオの過去～（後書き）

描画を修正しました。

## 作品のネタ・シーン紹介（前書き）

表示ミス直しました。

## 作品のネタ・シーン紹介

セリフ描写及び脱字を修正しました。作品の説明が不足していました。

大変申し訳ありませんでした。

この作品には数多くのネタを入れて有ります。

普通に書くと暗く成りますので。

遅れましたがいくつかのシーンの元になつた。

ネタだけ紹介します

1：第一話・バイオ・ハザード・パラサイト・イヴ  
(ゲーム第一作) ストーリー序盤

2：第2話・ターミネーター・フェリオ変身シーン  
ガンダム・台詞：ノリスト

3：零式・ガンヘッド

説明がおくれ申し訳ありませんでした。作品の説明が不足していました。

大変申し訳ありませんでした。

## 第5話～日常との別れ～（前書き）

表示変更しました。

誤字等を修正しました。

描画を修正しました。

## 第5話～日常との別れ～

フェリオ side

今僕は病院にマスターと一緒に病室に居る……

マスターは、この一ヶ月眠つたままだそれは良いんだけど……僕は散々検査を、させられた挙げ句……僕を病院の託児所に預ける何て言つ始末だ。

だから暴れてやつた（手加減して）大体僕は獸王なんだぞ！それなのに……注射器された……痛くは無かつた……でも注射は嫌いだ……でも騒ぎを聞き付けた、リフィアで女の子に宥めて貰つたしかもアイスまで、おごつて貰つたしばらく10才の子供で通をそつかな

「失礼……する。」

ドアの叩く音がする誰か来た様だ……

「はーい、今開けまーす。」

僕は、子供らしく振る舞う事にしている、この方が何かと都合が良いのだ、ドアに近づくと白衣の女の人が入つて來た……

（先生かな？……）

彼女は、マスターの変異した腕を見て、何かの書類にボールペンで文字や数を書いていく……

人仕切に、マスターの様子を見た後僕のガントレッドに目を向ける  
……

(病院の先生なのに武器にでも興味あるのだろうか?)

僕が、そつ思つてると先生はガントレッドを手にとつてアレコレと調べる……

(あのーっ、それ僕の何ですけど……)

「フム……外装は形状記憶で……素材は……」

物凄い……年代物なのに、初見で解っちゃった!?

「小型紋章兵器機関……逸れも初期型だと……?」

本当に病院の先生かな?でも声かけるの恐いし……目が……獲物を仕留める前の僕……並何だけど……

「かなり、無理をさせているな……フレームや動力部がショートしている……相当手荒く使つたな……」

失礼にも程があるよ、この人は……(怒)僕は思い切つて声をかけ  
る。

「あの何か、ご用があるですか?」

恐る恐る聞くてみる……

「なるほど……」れば、【ギガ・ガレット】だな？」

す、凄い10分で僕のガントレッテの前方あたりをやった……

「これで……清音に見せたりフフフッ……」

何か勝手に、話進めてるーーーーーになつたら無理にでも止めてしまう。

「ソレ……僕のです……オバサン……」

僕はボソボソと呟いた……

「誰が……お・ば・れ・んだって、し・ょ・づ・ね・ん?」

(やばつ、女人に言つてはいけない言葉が有るつて森の長老様、  
言つてたっけ……)

僕は直ぐに先生に謝った。

「お姉さん御免なさい。」

すると先生は急に、笑い出した何が可笑しいんだろう。

「フッ……せははつーうふ、うふ、素直だな少年。」

へつ……怒つてない。

「フ……少しからかっただけだ……」

そうですか……

「フ……私は、カレン・ノアだ。」

「フェリオです。」

自己紹介を済ませる。

そして、彼女は本題を切り出した……

「所でこのギガ・ガレットだが……何処で手に入れた?」

彼女の目付きが更に鋭くなつた。

「……拾いました。」

(自分の物なんて、絶対に言えない……直ぐに僕の正体見破りそうだし。)

「ほう……君は嘘をつく悪い子か?少年。」

見抜かれてる……本当の事を言おう、それに彼女も先生じゃ無いみたいだ……

「ソレ……僕のです……」

「やはり……な、君は正直に話した次ぎは私の番だ私は、騎士団の

変異体及び、紋章兵器機関の研究主任をしていく。「

騎士団関係者……………？

「そう、驚く事も有るまい少年?」

彼女は話しを続ける。

「君が、蒼き獸王と呼ばれる魔王だとしてもな……」

「?！」

無意識に殺氣が溢れる……

「そう、いきり立つな第一私は丸腰だぞ誇り高い君と話しが出来るだけ有り難いと私は思つてゐるが?」

彼女は僕の目を見つめて話しかけて来る。

「君のギガ・ガレットだが私に預けてくれないか?」

「あれ以上の紋章兵器なら世界にかなり有りますけど…………。」

僕もギガ・ガレットがもう骨董品レベル位の価値しかない事を知つてゐる……

「確かにもうこれは骨董品だ、だが数少ない名工の一つでも……有る私に一時的に預けてくれないか?今よりは性能を上げられるが?」

僕は殺氣を抑え彼女に目的を聞く事にした……

「何が……目的ですか？」

「対魔神用の格闘兵器をスクラップにするのはもったいないからさ……」

彼女は嘘はついていないが……どうじょり？

「私に預けてくれれば今以上の性能こしてやる。」

「……見返りは？」

見返りに無しに学者が提案すり訳がない……

「君は慎重だな……」「ノンを元に新型武装を造りたい君にはそのモニターをしてもらおう……」

「他には？」

「いや、特に無い君が動きやすい用に君のデータを改竄してやる逸れでは不満か？」

「……解つました引き受けます。」

僕の答えに納得したんだろ……カレンさんが病室を出ようとする…思わず僕は彼女に問い合わせる。

もつ殺氣は消えていた。

「……データは今から改竄してやる君は彼女の側に居てやれ。」

逸れだけカレンさんはいつと病室を出て何処に行ってしまった。

（不思議な人だが悪人では無いだる……とにかく良く分からぬ人  
だった……）

＊＊＊

### レスター・エルストン side

あいつと待ち合わせしてかれこれ2時間かな？逸れにしても……遅い幾らな何でも遅すぎだろ。

逸れにしても、うん良い天氣だ空は晴々してるし、白鳩は空を舞う……これが仕事じゃあ無けりやなど。

だいたい、さつきからカップル達の視線がイタイ此処はこの時間はカップルやビジネスマンとかの憩いのオアシス何だぞ。

取り合えず注文したコーヒーを飲むか……うん美味しいあいつ何かと話し合ひじや無けりや もう少しマシ何だか……

＊＊＊＊＊

さて2時間ばかり遅れたが……奴は来ているな。

店員がマニコアル道理の対応をして来る俺も愛想良く返答する。

奴は一番奥の席で待つて居た取り合ひ、注文をして店員を追い払う。

「待たせたか？」

「待つたとも……お前じや無けりや、もう少しで帰る所だ。」

と皮肉のやり取りをする奴は、昔からこんな男だ。

「お前とは正直氣が合わんやつだと用件を済ませよ。」

(同感だ……俺もお前が、好かない。)

持つて来た鞄からファイルを出す……全てあの襲撃事件の資料だ……

さて美味く喰い付いてくれよ……」ちらほ様子を見るだけだ。

奴は真剣にファイルを見て、いくたちまち顔が険しくなる。

「アルティア第22補給基地襲撃事件ファイル、？・23635…  
…イリア・キサラギ少尉」

「お前……正氣か？」

「お前……正氣か？」

険しい表情<sup>かお</sup>で、睨み付けて来る……

今にも、殴り掛かつて来そうな雰囲氣だ。

「落ち着け……密見ている。」

「……チツ。」

## レスター・ヒルストン side

相変わらず、涼しい顔で居られるなお前……

もう少しで「イツに一発見舞つてる所だふう……逸れにしても大した奴だわざわざ人の多い、しかもランチ・タイムで賑わうこんな場所を指定してきたか……侮れん。

「俺は、悪役に成るつもりは無い。」

「で……彼女の件だが……ラボが欲しがつてる。」

ラボと言つのは、変異体の研究及び実験をしている、何でも有りのマッド達のたまり場だ……建前上は【変異体被害者の治療と研究】が目的と謠つているが……はつきり言つて、係わり合いに成りたく無いだろ、まつどうな連中は……

「お前の目的の為か？」

「想像に任せぬ……しかし連中にくれて、やる気はない。」

「……。」

となると……大聖堂騎士団つまつ俺達か？

「お前達に、彼女を頼みたい」

そう来たか……全く嫌な奴だお前は……

「構わないが、一つ確認するラボはどうする？..」

「既に説得済みだ。」

成る程……既に決定してるので訳だ。

「解った。」

今日の最大の収穫は、やっぱり俺はお前が嫌いで事か……

「話しあは以上だ。」

はつきり言つてやるか。

「やっぱ俺は、お前が嫌いだ。」

「やうか……」

そう言つて席を立つ……彼女の所に、その意志が有るか否か聞かないとな、奴は彼女の前に現れる俺だと修羅場に成る、なそう思い携帯のに連絡する……【彼女】に任せよつ多分女性同士気が、合づだるつ。

\* \* \* \*

イリア・キサラギ Side

今病院には見舞いに来てくれた、リフィアと【腕】の検査と体調のチェックをしている、レイラさんそして心配そうに、私を見つめる、フェリオ君の三人だ、今のところ特に検査で悪い所は結果無かつた。

ただ困つた事に、リフィアが、あの噂話をまに受けてる事だ……彼女欠点は怒りに火が着くと、歯止めが無くなる事だ。結局落ち着かせるのに30分は掛かつた……

(カレンさんとリフィア逸れにフェリオ君まで……ハア……)

多分彼女達の中で、対少佐連合軍が結成されてるその時だ病室のドアがノックされた。

「失礼する。」

「今はしょ……」

少佐は入らないで、下さいと言おとしたら三人共顔が険しくなつて  
る……

「ほお……」これは、ゴアイイサツだな？」

（今核心しました、少佐の女性運は最悪です。）

レナード・ウォード side

何だか……知らんが愛想が悪いぞ……お前等、妹を始めそこには大聖  
堂騎士団のマッド女に。

報告に有つた、獣小僧……そして彼女が居る。

「兄さん、何の御用ですか？」

いぐり俺を毛嫌いしてるのは言え、その対応は無いぞ妹。

「フ……来たな女の敵」

お前に言われたくない、マッド女。

「マスター僕は、この人が嫌いです！ 追い返しましょー！」

野性の勘か？ 獣小僧。

「わ、私は大丈夫です……皆さん。」

「ほつ……これから、お前に、残酷な一撃をもつて来たのに随分気丈になつたな。

「私は彼女に話しおこしに来ただけだ。」

「「……。」「

「どうせ、納得してくれたか。

「フ……地獄に墮ちる女の敵。」

その言葉をまま返すマジド女。

「何を、企んでるか知りませんが……恥の上塗りです。」

……流石は俺の妹だ、勘だけは鋭い。

「マスターを泣かせたら承知しないからな……」

黙れ獸小僧。

\* \* \* \*

さて邪魔者が消えた。

「君に殴られて以来だな……」

取り合えず、皮肉の一つでも言つておくれ

「そうですね……でも、あれは……ついカッとなつて」

そして彼女は顔を伏せる。

「まあ、別に構わないが……」

あの事件は、彼女の両親の事故死に有る俺も、色々調べたが、解つたのは空中貨客船が爆発事故を起こした事だ、原因は不明調査しようにも肝心の船が木つ端みじんに吹き飛び残骸は、破片だけだった  
……

その時彼女は、まだ学生だつたな……問題は、その後だ時の現場を同僚に見られた事だ、お陰で色々噂話が有つた。

「今日は、君に二つの選択肢をもつて来た。」

手つ取り早く、彼女に説明する一つ地獄を用意したから、好きな方を選べ……と。

「詰まり私に、モルモットに成る方と戦闘マシーンに成れと言つ事ですか？」

彼女の声に怒氣が、含まれる……前髪が顔に掛かつて良く表情が見られない。

その時邪魔が入つた。

「大聖堂騎士団特務騎士隊フェンリル・ナイトの者だ、入室の許可を願えないだろうか?」

「……チツ、」

思わず舌打ちがでた……

(マッシュ女の次は狼女か)

「は、はいドアは開いて居るのでビリビリ……」

ドアが、ゆっくりと開かれる。

イリア・キサラギSide

病室に入つて来たのは、私と同じ年か、少し年上の騎士だった……

蒼い色の軍の礼服を、戦闘用にした、感じの制服と白いマントを羽織っている、髪の毛は腰の所まで伸ばした赤毛だ顔も、かなりの美人だ耳が少し尖つてるハーフエルフか半魔人だろうか?

「何の用だ? 狼女」

病室に恐い、緊張感が走る少佐は敵意を剥き出しこしている。

「此処は、病室で在つて貴様の狩場ではない……」

女性の目付きが鋭くなる。

「……とにかく用件は伝えたぞ少尉。」

そう言って、踵を返して病室を出ようとする女性と皿が合つ……

(ふん、狼女め……)

(……血まみれの獵犬。)

お互<sup>いに</sup>、鋭い視線を交わし少佐が病室を出る。

「済まない、嫌な思いをさせてしまったな……申し訳ない。」

彼女が私に謝罪する。

「い、いえ……気にしていません……」

彼女は私の前まで来ると敬礼をする。

「大聖堂騎士団特務騎士フェンリル・ナイト騎士隊長サラ・フェンリルだ。」

正直驚いた、大聖堂騎士団の最強部隊の指揮官が  
私に会いに来るなんて。

「私は……。」

「いやそのままで、私はただの、形式見たいな物だ、逸れより座つても良いだろか?」

私が敬礼をしようとしたら、サラ将軍が逸れを遮る。

「どうぞ、おかげ下せ。」

「有難う。」

サラ将軍が病室の椅子に座る。

「怪我の具合は、どうか?」

「お蔭様で、大分ましになりました後2週間で退院出来るそうです

……

「それは良かった。」

しばらく、彼女と何気ない会話が、続いたが彼女は、おもむろに本來の用件を切り出した……

「此処に来たのは、君に大聖堂騎士団の入団希望申請書と異能者保護申請書の一つを、渡す為に来たんだ。」

騎士団入団希望申請書は文字通り、大聖堂騎士団に入る為の物だ、そして異能者保護申請書は特殊能力に目覚めた、ものの使う必要性が、無い人達が保護を求めるのに必要な書類だ。

「いきなりで、戸惑う気持ちも解る……」

「自分の立場は、良く分かつます……少佐が教えてくれました……

……

私は投げやりに答える……

彼もそして、騎士団も本当は私とフェリオ君が欲しいのだろうか……

「それは心外だな……」

「えつ……」

彼女の……サラ将軍の意外な咳きに、正直驚く……

「確かに我々は化け物集団だ、しかし我々は君達一人とも、単なる（力）だけの存在だと思つていい」

「もし、君達の（力）だけ必要なら無理矢理連れ去ればいい……違うか？」

「……済みません」

「謝らなくとも良い」

普通なら『ふざけるな!』と怒鳴られたかも知れない……しかし彼女は寛大だった……

「失礼を承知で、お聞きします何故? 私何かに此処まで接して下さるのですか?」

「何故……か、これでも私の耳は良く聴こえるのでなあの獵犬が、二択しか無いと言つていたのが聴こえた……それは奴の思い込みだ、誰にでも選ぶ選択肢は有る……違つか? それに君は君だ自分自身の意志で決めなさい。」

「……やつですね」

「そうだ、だが最終的には君の判断で決めるんだ……自分の意志で戦うか、戦わ無いかだ。」

「……」

「もう一度だけ言おう、急ぐ必要無し……やつへじ考えて決めなさい。」

「

優しく、諭す様に言葉をかけられた。

「肉親に、話し手も宜しいので?」

「構わない、良く話し合って決めなさい。」

「有難う……ござります。」

私は彼女が帰った後少しだけ泣いた……

それから一週間後、無事病院を退院した。

私は今フェリオ君と一緒に叔父さんの家に向かっている。

\* \* \* \* \*

カール・フォートフェルト。

そう……今となつてはたつた一人の叔父さんだ。

私が4才の頃、両親が事故死空中貨客船の爆発事故らしい……事故原因は不明……それから、暫くしてから、叔父さんに引き取られた。叔父さんは、私の母メアリー・フォートフェルトの母のお兄さんだ、顔は余り母に似ていないでも叔父さんは、私を実の娘の様に可愛がつてくれた。

私を此処まで、育ててくれた、叔父さんには感謝している。

やがて、叔父さんの家に着いた、玄関のドアの呼び鈴を鳴らす。

「誰かな？」

久しぶりに、叔父さんの声を聞く、実に2年ぶりだ。

「私ですイリアです叔父さん。」

「おおっ、イリアか久しぶりだな……無事で良かつた。」

（余り無事じやあ無いんだけどね。）

「?……どうした。」

顔に出たのだろうか？叔父さんが私を心配して顔を覗き込む。

「な、何でもありません。」

と誤魔化した……

\* \* \*

## フュリオSide

マスターと一緒に、住宅地の中を歩くと、一軒の家が見えてきた、マスターがドアの呼び鈴を鳴らすと、中から中年のおじさんが、ドアを開けて出て来てくれた。

マスターの話しからこのおじさんが、マスターの話していたカールおじさんだわ。

「家の前で、立ち話も何だ中に入りなさい。」

「はい。」

「お邪魔します。」

彼と田代が会つ。

「まっ……イリア何故早くワシに言わなかつた?」

僕の顔を見るなり、おじさんが、マスターに少し意地悪そつと話しがけた。

「な、何ですか？叔父さん。」

マスターが、少し慌ててゐるどうしたの?だろう。

「ワシに内緒で、我が子の紹介か？して相手は誰じゃ？」

(あ、あの僕はマスターの子供出は有りません……)

「ワハハハハ！ そうじやな！ お前がそんな娘と違うのはワシが、一番良く知っている。」

「 / / / { } 」

あわわわ、ま、マスター、マスター 落ち着いて下さい。

マスターは顔を紅くして家に入つて行つた。

「全く、ユーモアもまだまだじやな。」

おじさん、それはただのセクハラでは、無いでしょうか？

「所で、君の名は？」

「フェリオです、おじさん。」

「ワシは、カールじゃよよりしくフヨリオ君。」

カールおじさんが僕にさつ話し掛けて来る。

「さて、我が家によつて」ナリオ君。」

「お邪魔します。」

そうして僕はおじさんの家に入る。

家の応接間に通されるとマスターが。

「叔父さん、キッチン借りるね。」

「構わんが、折角来たんじゃから、たまには外食でもせんか?」

「どうせ、オールレトルト何でしょ? だつたら、私が作るから、少し待つてて」

「判つたでは……お言葉に甘えるとしよう……」

(おじさん、マスターの手料理を食べるのが、嫌なのかな?....)

「フヨリオ君。」

「何でしょか?」

「覚悟するがよい……」

（おじさんの顔が少し引きつる……もしかして……）

「失礼ですが……マスターの手料理で……」

「ウム、以前よりは上達したと想いたい……」

「……」

マスター僕……頑張つてマスターの手料理食べますね……

祖の後……マスターの料理は何とか完食できた……ただ何故、あんなに塩氣がきついのだろうか？

……見た田は凄く良かつたのに……

何とか食事を終えた、でも辛かつた……マスターの顔を見ると、とても食べれませんなんて言えないあんな笑顔にそんな事言えない。

一段落ついて、おじさんガ騎士団にて口にする。

「のぉ、イリア……騎士団にてじやが、お前に聞きたい……」

「何でじょつ、叔父さん？」

マスターとおじさんの間に緊張感が漂つ……おじさんは、マスターが騎士に成る事に、反対なのだろうか？

「覚悟は、出来るんじゃなっ！」

「はこ……」

重い空気が流れる……時間を置いて、おじさんがゆづくとそして優しくマスターに話掛ける。

「お前が、決めた事に口は挟まん……が騎士団について、説明せねばならん騎士団に入るからにはお前もそしてフェリオ君も、常に命の危険に晒される……ワシも若い頃入ったが一ヶ月でリタイアした……今までの経験など、全く無意味なんじやよ……」

「……」

「……」

僕達は、おじさんの話を聞いて黙つた、まだおじさんは、構わず話を続ける。

「入る者は、例え、將軍だらが！下士官だらが！同格に扱われる……おまけに脱落者は、毎月300人出る……それに隊長ともなると、空中戦艦をも指揮せねばならん……まさに……化け物集団何じやお前にその覚悟があるか？……イリア。」

「全ての兵科ですか？」

「いや、隊長クラスを田指すなら……な。」

「……彼を……フェリオ君を私は守りたい……それでは……入る動機になりませんか？」

マスターは泣くのを堪えておじさんに話掛ける。

「誰かを守りたいか……そつまつ所はお父さん譲りだな……イリア。」

「

「お父さんが……」

(お父さんとマスターが同じ?)

「ふふ……フヨリオ君を守りたいか……だが道は険しい茨の道じゃ……」

笑みを含み、マスターに問うおじさんは、マスターの顔を見ると、そこには、一人の女の人の顔ではなく強い意志の有る顔だ。

「さて、重苦しい話は此処までじやな……所でイリアよ。」

おじさんが、マスターに話し掛けた。少し意地悪そうな顔だ。

「何でしょ……叔父さん?」

「何時に成つたら、ワシに可憐い孫を見せてくれるんじや?..」

「ツツツ~し、失礼します。」

マスターは怒つて、席を立つ。

「ま、マスター?」

「何処に行くんじや?」

「もう休ませて貰います。」

「なら、フヨリオ君と少し話をしても良いな?」

(え、僕と……?)

「どうぞ……それではお休みなさい。」

「ああ……また明日な……」

マスターは部屋を出て行った残ったのは、僕とおじさんの二人だけ

……

「フヨリオ君じゃたな?」

「はい……」

「お前さん獣人では無いな?」

「!?」

何で今日はいつも正体ばれるの?

「はははっ大体獣人が、人間と契約出来る訳がなかろう、それにじや、マスターと言つては、ばらしてると同じじゃよ……」

「あ、それで……」

獣人は、魔力が低いが特徴として身体能力が、異常に高いのだそのため各国で奴隸として扱われる。

「我が姪を、助けて暮れたことに礼は言ひ……」

いきなりおじさんが出でる。

「あ、頭を上げて下さい僕はただマスターに、死んで欲しく無いだけです。」

本当なら僕は、おじさんに批難されてもおかしくなかつた……

「マスターは僕が命を懸けても必ず護ります！」

と大声で宣言した……すると、おじさんはいきなり大声で笑い出した。

「わはははっ、フーリオ君その台詞は一端の男が言つ台詞じゃ……それにその台詞は死亡フラグじやよ。」

（えつ……死亡フラグ何だら？名前からして不吉だな？新手の魔法かな？？？）

「あの死亡フラグで何かの呪いですか？」

僕は思い切つて尋ねた。

「呪いも何も、迂闊な発言をした書き物に登場する人物が、必ず死ぬと言う意味じゃよ……」

「え、ええーっ必ず死ぬ……そ、そんな……」

「はははっ、安心しなさい所詮はただの作り物の中の話じゃからな。

「

「や、やつですか？」

「やつじや、だが自分の命を軽んじる者は生き残れん……その事は肝に命じておけ。」

「は、はい。」

おじさんの真剣な眼差しに思わず身体が引き締まる

「いかんな軍人の癖が出たか……」

なるほど、道理で氣の引き締まる威厳があつた訳だ。

「それに、死ぬのは年寄りで十分じゃからな……若い者達が先に逝き、年寄りが生き延びる……そんな世界は間違つおるー。ワシはそう思つ……」

「……」

「わはははは、そんな顔はお前さんには似合わん。」

多分寂しげな顔をしていたのだろう、おじさんが豪快に笑い出した。

ひとしきり笑った、後急に真面目な、表情になる。

「もし、叶うのなら生きていひて、アリアの晴れ姿を一目見てから逝きたいものじやな……」

「……」

「そんな顔はするな、今のは、ワシの独り言じやよ、わははまつ。」

「そうおじさん、笑ってたが……僕の心の中にしこりみたいな違和感が、あつた……」この時の僕はまだその事に気付いていなかつた……

第5話～日常との別れ～（後書き）

次回執筆がんばります。

- - - 人物紹介1 - - - (前書き)

ネタ紹介に続いて

人物紹介です

主要人物の紹介です

- - - 人物紹介1 - - -

イリア・キサラギ

年齢20才位

髪の色赤毛

瞳緑

キャラ紹介

元国防軍辺境勤務オペレーター

怪物の襲撃で右腕を失うフェリオと契約し  
魔王の片腕を得る

スキル

射撃

魔王の腕による

武器の具現化

(剣・ロッド)

壁や天井を踏み台にしての跳躍

補足

普段は優しいが

たまに魔王化する

フェリオとは姉弟の用に  
成りたいと思っている。

フェリオ

頭は狐、

胴体は狼

尻尾は狐

髪は青

瞳は緑（獣化の時は金色）

イリアが死にかけた時  
彼女の使い魔になる。

外見：10才位の少年

スキル

変身：獣化

武装

【ギガ・ガレット改】

カレンの魔改造によつて  
かなり出力と耐久性が  
アップしている。

キャラ紹介

甘いお菓子が好きで  
たまに食欲魔神化する

基本的にマスター優先  
だが大の勉強嫌い。

## カール・フォートフェルト

### キャラ紹介

イリアの叔父さん

年齢：60才

髪 白髪

瞳 青

### キャラ紹介

性格

少し親バカでも怒ると恐い人。

フェリオを孫にしたいと思っている。

国防軍軍人。

階級：准将

お茶目な一面有り

公国の白狼と呼ばれる。

- - - 人物紹介1 - - - (後書き)

これからも本作を宜しくお願いします。

## 第6話～フヨリオ誘拐事件～（前書き）

誤字を発見して直しました。

描[跡]を修正しました。

キャラ視点の修正しました。

キャラの階級はガーダの軍階級観を参考にしました。

大聖堂騎士団の元ネタは月の教会です。

## 第6話～フェリオ誘拐事件～

フェリオ side

僕は昨日マスターと喧嘩をした……原因は僕が、勝手に騎士団の【異能者保護申請書】サインしようとしました事だ。

それがマスターに見つかって、口論になつた。

『フェリオ君！何故…………どうして？…………答えるぞい！』

『マスター……貴女は戦つてはいけ無いんです！』

『じゃ、じゃあ、自分はどうなの？独りで……戦つて……あんなに傷付いて！』

『…………マスター僕の記憶を勝手覗いて…………それで自分の事は、上げですか？思い上がりで下さい。』

『わ、私が何時？思い上がつたて言ひのひの……フェリオ。』

『それです……マスター貴女は、僕のお姉さんを気取るつもり何ですか？』

『…………つー私がフェリオ君の…………』

僕もマスターもお互いに血が上っていたらしく……遂に僕はマスターへ、言つべき出はない言葉を言つた。

『こんな……こんな分からず屋だと解つてたら……契約なんてしなければ……良かった。』

ちくちくと胸が痛む……出も言つた言葉は、取り消せない……

『もつ一度言いなさい……フュリオ……』

『何度も言います！貴女は僕のお姉さんじゃあ無い！』

次の瞬時マスターの平手が僕の頬を叩く……驚いてマスターの顔を見る……マスターは泣いていた……

『…………マスター。』

僕は動けなかつた……

『そうね……私は貴方のお姉さんじゃあ無い……そして……フュリオ君は私の弟でも無い……でも私は貴方の力に成りたい……だって……今のフュリオ君泣いてるもの……』

そつ言つて僕をマスターが抱きしめる。

(暖かい両手に包まれるマスターの暖かさが伝わって来る……これが……マスター貴女の優しさ……)

『「めん……なさい……マス……ター。』

涙声で声にならないが謝るマスターも泣きながら、僕に謝る。

『フェリオ君……私の方こそ「ゴメンね私……フェリオ君の事をちやんと考へてなかつた……』

「めんなさい……僕もマスターの気持ちを考へていませんでした。

『だから……一人で乗り越えて行こう。』

『はい、マスター……』

それが昨日の事だ、おじさんに話したら喧嘩をするほど仲が良いと言われた確かに……僕達は、他人から見れば姉弟の様に見えるだろ……

\* \* \*

イリア・キサラギSide

昨日喧嘩をした……フェリオ君をぶつてしまつた……子供に手を上げるなんて最低だ……

(あーっ、考へても仕方が無い第一私は、ジメジメしたのが嫌いなのだ!)

良し今日はフェリオ君にお詫びを兼ねて買い物に行こう、うん うん そうじょづ。

「買い物ですか？」

「あつ 買い物。」

フリオ君の居る部屋を訪ねて今日の行動を決める彼は、惑いながら一つの疑問を口にした。

「それは良いのですが……お金は？」

「私が出すわよ」

「マスターが……でも魔導師の服とか、けつこうにですよ……自分で出します。」

やつぱり彼は金袋からお金を出す……

「フリオ君！」めぐ……

「何でそこまで謝るんですか？」

「その金額じゃ……安いホテル代にもならないから……」

そう彼のお金の残金出は服じりか宿代をえ危うく……

「あれ……」の前確認した時は……宿代位……あーっ！――

「び、びっくりした……いきなり何よ……大声を出して？」

「僕の金袋に穴がある時、モンスター達と戦つての最中に

……

「じゃ私がフヨリオ君のお金を出すから……」

「「やうはいあません!!」」

フヨリオ君はいきなり大声を出した。

「まだ昨日の事怒ってるの?」

「違います……マスターに……女人に、お金を出して貰つて、僕のプライドが許さないです!」

「じゃ、どうするの?」

はつきり言つて昨日の今日だ、私が折れよつ……

「では、いります……」

彼は両手に意識を、集中させて魔力を集める以前の私なら絶対に、解らないだらう。今になって彼の凄さに正直驚く。やがて、魔力が収束して深い蒼色の宝玉が現れる。

「これなら……かなりの高額に成りますから……で、マスター何片手で額押さえてるですか?」

「フヨリオ君……、ermen君の創った宝玉絶対に、売ちやダメー!」

「ど、どひして何ですマスター?」

「売ると……私たち警察に捕まるから……」

「はい～どうですか……マスター。」

「私が14才つまり、6年前ね當時、それ宝玉を悪用しようとした人達が居て、それ以来この国じゃあ宝玉や、その他の魔法道具全て……じゃあ無いけど、拳銃や刀物以上に管理が義務化されてるから、それは国家資格をもつてる魔導師しか扱えないから……」

「じゃあ……この国に闇の魔法屋は……」

彼はすがるように私に、尋ねて来る、私はある意味彼に、死刑宣告を告げる。

「彼等は真っ先に騎士団に、徹底的に潰されたからフェリオ君の努力と気持ちだけ受け取つとくね」

「そ、そんな……」

「はいこれで、フェリオ君のお金の件は私持ちな」

「何だか……嬉しそうですねマスター。」

フェリオ君が恨めしそうに私を見る……半分怖い……しかたがない此処は、フェリオ君の好きなお菓子で機嫌を直して貰おう。

「じゃあ、買い物とお菓子おひつてあげるから。」

「お菓子ハイ、行きましょウマスター」

(ふふふ……僕の食欲は旺盛ですよ )

(フ、フェリオ君の目が既に捕食者モード……)

「あ、あのフェリオ君？」

「何ですか？マスター。」

(行きますよ、マスター、「飯代の財源は十分ですか？」)

私は、この時フェリオ君……の得に甘いお菓子に対する彼の恐ろし  
までの食欲をまだ私は、知らなかつたのだ……

フェリオ君の服装は、リフィアに貰つた犬のアニメキャララのイラス  
トが入つた子供服だ、私は動きやすいTシャツとジーパン姿だ、ま  
ずは先に学生時代からのお菓子屋「シャングリ・ラ」を目指す。

昼時ともなると、かなりの人で賑わう、フェリオ君が人の数に圧倒  
される、しばらく来ない、内にけつこう握わつてゐる。

「えーとフェリオ君どれでも好きな物頼んで良いよ。」

「それじゃ……あの大きなのが良いのです、マスター」

(てつ、あれ挑戦メニューのジャンボ・パフェ！完食者2・3人し  
かいないよ！？)

とか言つてる内にフェリオ君が、事もあらうに注文してしまいました。

(何かサイズが前より大きく成つてゐる……しかも制限時間……4時

間以内で、フェリオ君何か……追加注文してるんですけどーっ……）

とにかく、食べるペースが速い！見掛けは普通に食べてるんだけど……勢いも普通に見えるんだけど、とにかく早いの一言しか無い……結局店員さんと私が泣いて止めるまで……彼のジャンボ・パフェ無双は30個を超えた。

あうーつ、シャングリ・ラが今日から……全て遠き理想郷に  
スチエンジしました……  
アヴァロン

まあ、結局全て完食したけど私達確実に…… ブラックリストに載つたフェリオ君…… 君は正真正銘…… 食欲の魔王です…… 確かフェリオ君のが出でる童話に「お菓子好きの狼」と言うタイトルの本が有つた確か、一国のお菓子屋を根こそぎ食べつくした……あの話しもオフィシャルだつたんだ……

「ご馳走様でした、マスター」

フェリオ君その笑顔は、可愛いけど君は……正真正銘お菓子の魔王です……

「さてと次は、魔術屋ね。」

「はい、マスター。」

でも魔術屋なんて……ほんと……こや全く知らない  
何処に有るのだろ……

「マスター 路地裏に有りますよ。」

「て……フヒリオ君、今心読んでた？」

「そうですね……僕が食欲の魔王あたりからです」

「次は、念話だけにしなさい……」

「はい、マスター。」

とか言つてゐる内に、目的の店に着いた……でもお店に見えない……フヒリオ君曰く魔術協会に属している魔術士にしか……解らないそうだ。

店の中は????だった全く解らない、色々な道具が売つてるがちんぶんかんぶんだつた、フヒリオ君が頬もしく見える。

「うーん、この呪符は、イマイチだし……」の魔法の短剣は……僕向きじやあ無いし……

「フヒリオ君何か、欲しいの?」

「せつかくだから、自分のお金で、何か買おうかなと。」

「足りなかつたら?」

「おじさんから、おこづかい貰いました。」

(叔父さんいつの間に?)

「マスターの仕度を待つて居る間に。」

「「」のブレスレット……かなりの物だ！」

と言つて彼はその、ブレスレットを見させてくれた、ミスリル製で宝玉を飾り付けて有る。

「つかーっキレイ！」

て見取れていだが、値段は10000万ゴールド！？何この値段正直……高すぎ……

「大丈夫です、マスター！」

と言つて、カウンターに彼は行きフード姿の店員さんと交渉を始める、結局ブレスレットと黒の魔導師服と白いマント三点をワリカンで買った、結局またまた意地の張り合いに成りかけて、妥協案を私が出した結果だ。

（やるわね叔父さん、あんな大金をおこづかいでフヨリオ君にあげるなんて……）

店を出て表通り道に出ると心地いい、違和感を感じた……

（マスター僕達、後をつけられます。）

（どうするの？私達、武器なんて持つて無いよ。）

（僕がサポートします。）

（解った、じゃあこのま逃げましょ、そつすれば他の人に迷惑が、掛からないし。）

とにかく、此処を離れ無いと……後を着いて来るのは、10人位らしいだ……何とかなる。

\* \* \*

### アルト・ファルディス side

銀色の毛にショートカットの水色の瞳の青年が、他の騎士達と何処に行くか相談している

「おい、アルト何処にいこーや?」

特に行きたい、場所なんてほとんど有りませんよ。

「そうですね……?」

と言いかけたその時……彼の目に、二人の人物をつける不審者が映る。

「済みませんが……用事を、思い出しました、また今度お誘い下さい。」

「そつかあ、それじゃな……」

「今度付き合えよ……」

「じゃあな……」

一人だけ除いて皆それぞれ去つて行く……

\* \* \*

「私……残る……」

「レイラさん良いんですか?」

オレンジ色の切り揃えた髪と紅い瞳の少女だ、普段から何を考えているのか、全く解らないが、彼女とアルトは属に言つ腐れ縁だ。

「……早く追わないと。」

「そうですね、その前に。」

彼は通信機の回線を入れる。

『はい、こちら大聖堂騎士団治安担当部…』

「ナミさん、聞こえますか?」

『あ、アルトさん勤務中の私語は……』

オペレーターの注意も、意に返さず彼は要点を書く。

「直ぐに、保安課と市警察に連絡を、お願いします保護対象は、赤

い髪の女性と青い髪の……恐らく半獣人の少年……女性の年齢は20才位、少年は10才位、なお……後ろを付けてる方々は獣人狩りですね。」「

『り、了解しました直ぐに伝えます!』

「ひらは、レイラさんと僕達だけですね。」

『サポート班を手配します……』

「頼みます、一旦連絡終わり。」

『解りました、お気を付けて!』

「レイラさん行きますよ。」

「……解った。」

そして二人は後をつける。

\*\*\*\*\*

イリア・キサラギSide

路地裏に向かい、いきなり……囲まれた、その後複数の男達に囲まれた、その後フェリオ君と一人で戦つたが、フェリオ君が捕まつて、氣を取られた所を、後ろから撲れた……その後の事は……覚えて無いどの位時間が、たつたのだろう……人の気配がする……誰だろう

……

「大丈夫ですか？しつかりして下さいー。」

「うう……」

「まだ……動いては……ダメ。」

意識は……ぼんやりしている……あれ……フェリオ……君は……？

「ふえ……フェリオ……痛つ！」

フェリオ君の事を思い出して……慌てて起きようとしたら、頭の後ろがズキズキと痛む。

「貴方達は？」

「大聖堂騎士団の者です、私はアルトと言いますそして貴方を、介抱している彼女が……」

「……レイラ。」

「そりだ……フェリオ君は！？」

辺りを見渡すと……見知らぬ男達が倒れていた。

「申し訳有りません、彼等に邪魔をされて……彼等は、獣人狩りです。」

獣人狩り……半獣人を何の躊躇いもなくさらり、時として殺す事も

厭わない犯罪組織だ……

「現在サポート班と警察が連絡のアジトを探しているのですが……」

「フーリオ君は……」

「感心いく、ラジトでしょ? ね。」

田の前が真っ暗に成りそうだ……

「彼等に手にさつましたがアジトは彼等に聞きましたわ。」

え……どうやつて?

「おこ……起きる……」

「うへん

意識がぼんやりしてゐる男をレイラさんが起します

「私の……眼を……見る……」

男の田をレイラさんが見つめる……

「う……あ……つ。」

男が反応する……田が虚うだ。

「アジト……教える……」

「そこの……角を右に……2ブロック……先……の廃ビル……」

「見張りの……数は?」

「表に……3人裏に……2人……後……他脚が1台……」

そう男が言つと倒れてしまった。

「彼女は魅了の魔眼使い何です。」

「それで……これから、どうするんですか?」

私はアルトさんに尋ねた。

「乗り込みましょ。」

「……賛成。」

「えつーつ、」

正直驚いた!作戦も無しに乗り込むなんて……

「私は応援を、待つた方がいです……」

「そう、それが普通常識でしょ。」

「ですが、その逆も有るんですよ……つまりひらは大勢で来ると思わせての奇襲です。」

なるほど、逸れならいけるかも……でもアジトの中の相手の数が解らないと、かなり辛い……

「敵の数は見張りだけ、中の数が解らないとかなり厳しいわ……」

「やうですね……では私達が陽動を……」

アルトさんがあう、言いかけた時、通信機が鳴る。

『アルトーっ、また勝手な行動する気やな！サポートする身にもなつてみい！』

いきなり女の人の怒鳴り声が響く。

「あひやー、ヒレノアさんもひ来ひやたんですねか？」

『ミナちやんから、連絡有つたわー！アルトさんが暴走しそうなので、急いで現場に向かってください~いつ、いつの場所教えるから早ひ來やー』

そして通信は切た……

「あ、あのー。」

「さあ、ひとまずヒレノアさんと合流します、彼女怒ると悪いですからね」

\* \* \* \* \*

アルトさん達と、急いで指定されたポイントへ向かう。

そこには、複数の装甲車と警察車両に指揮車と大勢の警官と騎士団員が、完全装備で待機していた。

白いベレー帽に、白いロングコートを羽織つて緑の騎士団の制服を纏っている、栗色の髪のおかっぱ頭、緑の瞳の少女が、無線機片手に指示を出していた。

「そやから、A・B・Cの三班は、各自所定の位置にそれとへりは要らんで五月蠅いだけで、邪魔や機動部隊突入させろ？アホつ……大惨事にしたいんかつ、さつき話たやろ……隠密作戦による奇襲や覚えとけ！」

（何か外見とのギャップが有りすぎ……何で関西弁と言つか……何でこんな子が指揮してんの？）

「どうやら」機嫌ななめですね～、エレノアさん。」

とアルトさんが、少女に話かける。

「あつ、もうアルち来たん？」

「はい、連隊隊長がお呼びになられたので……」

「あーっ、うちが呼んだんやたな……ゴメン血イ、上つて忘れてた……『めんな。』

そつ言つて彼女は、頭を描く……

「そちらの人は？」

と言つて私を見る……表現が険しい……

「被害者のイリアさんです。」

アルトさんが彼女に、私を紹介する彼女は、最近頻発する、半獣人の誘拐事件について、教えてくれた。

「じゃあ、フェリオ君達は……」

またも卒倒、仕掛けた……不意に誰かに支えられる。

「大丈夫です、私達に任せて下さい。」

アルトさんが私を支えてくれた……

「……任せて。」

「あんたは民間人や、此処で待つとき、直ぐに犯人いわしたる。」

エレノアさんが、いつの間にか鉄扇を有名な天才軍師の様に振りかざし、号令を出す。

「よしひしゃ！これから、悪党退治や、遠慮要らんへんで、全員まとめてフルボッコしいや。」

「「お———っ！——！」

(どちらが悪人だらう…しかも、フルボッコー？)

でも、フェリオ君達は大丈夫だらうか？

(私も武器が有れば、戦えるの!?)……)

その時だつた!右腕がまるで感電したかの様に、痛みだす……

「…?ぐつう…」

たまらず地面に、倒れ込む眩が、私に駆け寄る。

「だ、誰か衛生班急ぎやー!」

「イリアさん大丈夫ですか!?」

「…………」

私の右手に何か解らない力がら集まる……そして一握りのロッドが、現れた。

「はあ、はあ、い、これは?」

「イリアさん魔術師だつたんですか?」

「……凄い。」

アルトさんとイリアさんが、駆け寄つて来る。

(何やこの子?魔術師そんな者で、今のは証明でけへん……)

しばりくして、無線機の呼び出しが鳴る

「はい、イリシア何や……？」

《隊長…全班配置完了。》

「了解や、じつも一手に別れて行動する……アルト・レイラをアジトの正面に……ひむらは裏に回るさかいアンタ等も注意しいやー」

《了解。》

そう言つて、エレノアさんが通信を切る、私はもう痺れは、無い私は立ち上がり、アジトに向かおうとする……

その時エレノアさんが私の手を掴む。

「ちょい待ち！何処にいくねん？」

「フーリオ君を……助けに。」

「そんな状態でか？」

かなり厳しい目付きで、私を睨む、私も睨み返す

「放して下せ！」エレノアさん。」

「アカン、アンタ一人で何が出来るんな……聞つてみい！」

心配してくれるのは、嬉しいでも余り時間が無いそんな時、アルトさんが助け舟を出してくれた。

「行きましょう、イリアさん。」

「アルト……あ、アンタ氣は確かか？」

「ええ……正氣ですよ、それに、彼女は止めて、フェリオ君を助けに行きますよ。」

「私も……賛成。」

エレノアさんが考へ込むやがてら開き直つた様に言い放つ！

「あーあーっ、うちだけがワルモンかあ、しゃあないただしつ、イリアさん無茶すんな！アンタに死なれてみい！始末書やのつてうちの首が飛ぶからな……」

私は大きく頷いてエレノアさん達と裏口に回る。

\* \* \* \*

アルト・ファルディスSide

さてエレノアさんに、裏口は任せて表を、攻めますか……ちょうど、3人一瞬で片付けましょう……

私は駆け出すと、素早く剣の柄に手をやる……

見張りが私に気付く。

「何だ？てめえは。」

「や、やつひまえー。」

「何もんだ！」

「別に名乗る程では、有りませんよ。」

一瞬で彼らと交差する、瞬く間に彼等を切り伏せる。  
「「」の見えて、居合は得意何ですよ、ああ女心下さい峰打ちですか……」

既に氣絶している、彼等につぶやく……

その時目の前のシャッターが吹き飛び！四足歩行の他脚戦車くキヤンサーへが現れた。

「闇ルートの中古品ですね？」

キヤンサーはガトリング砲を無差別に撃つて来る！嵐の用な弾丸を避けながら、レイラさんに合図する彼女には、玩具同然の相手だ。

「レイラさん！」

「……分かった。」

彼女はジクザクに素早く動く！キヤンサーは彼女の動きに、ついて行けない！パイロットの焦りが聞こえる。

「なんだーっ、このアマーブルタラメ過すぎる……」

そして、素早くキャンサーの腹の下に潜り込むと脚を手刀や回し蹴りで、三本破壊し素早く、腹の下から脱出する。

そして砲頭に上りハッチをじき開けると、中のパイロットヒーロー。

「……………」

ヒドスの聞いた声で話す。

「は、はい。」

呆氣なく片付いた。

「レイラさん、お見事といひで腕や脚にルーンを仕込んで、いたんですね？」

彼女の怪力は両手足に仕込んだ、ルーン魔法だった後、格闘術？（我流）で他を圧倒する。

「…………こんな子供のケンカ…………別にたいしたことない…………」

「わい、中でもう一仕事しましょうか？」

「…………早く片付ける」

\*\*\*\*\*

うちらは、今裏口に向かつて進んでる……イリアさん……よう解らん女性や、何で自分から危険な場所に飛び込む、しかし……あのいきなり出現したロッドが全然解れへん。

情報通りや……突入用意の合図を皆に伝える。全員に緊張が走る……そん時や、不意に嫌な予感がした……壁に何か居る。

(光学迷彩ー? )

「咄つゝ、さよひ隠れるやー!」

対人他脚戦車くスパイダーゝが、バルカン砲をこゝちに向ける!

(アホー! そんな物要らんわー! )

「やつぱつ、咄早う隠れるやー! 、イリアさん何しどんねん……早う逃げるやー!」

いきなり、彼女はジャンプをいや跳んだ! そして手にしていたロッドで、壁に張り付いていた一匹をあっさり倒す。

(なつ……ー)

それだけや無い壁を、踏み台にして! 反対側のスパイダーの胴体にロッドを突き刺し見事に、着地する、そういうしていの内に見張り

達がやつて来る……次は、うちの番やな纏めて相手したる。

「邪魔や、覚悟せーーー！」

「な、何イー？」

「つおつー！」

ジャンプをして、鉄扇で見張りを倒し着地する、そこえ扉を開けた見張りが現れた……気付かれたか、すかさず、うちはサマーソルトキックを放つ。

「ぐえつー！」

「ふう、余り手間掛けさせんな……」

額の汗を拭つてつた所へイリアさんが駆け寄つて来る。

「エレノアさん大丈夫ですか？」

「うちは大丈夫や、逸れよりイリアさん、疲れてへん？」

うちより、彼女が心配やジルの壁に張り付いていたスパイダーを、あつという間に、一匹も倒したんや身体に無理でもしていた。

「私は平氣です。」

何て事を口にした……ひ、嘘やーっと、叫びかけた、その時無線機から予備だしが有つた。

『「じゅうアルト、エレノアさん聞こえますか?』

「うむ、直ぐに返事をする。

「アルち何や、今から裏口から突入する。」

『「じゅう、あらかた片付いたので被害者の捜索に当たります』

「向こうは順調やな……」  
「も予定通りや。」

「了解や、無理はすんるんやないで。」

と言つて、無線機を切る後は奥に進むだけやな。

\* \* \*

フェリオSide

路地裏に、誘い込んだと思ったら罠だった、いきなり電撃が走った  
と思つたら、氣を失つた……

（此処は何処だろ……マスターは居ない……）

多分さらわれたのは僕だけだ、周りを見ると外見の僕と同い年の子  
供達が、20人居る。

（皆、半獣人の子供達だ。）

中にはさらわれる時抵抗したのだな……顔にアザが出来る、子も居る。

(皆……表情が虚ろだ、何とかしないと)

まずは手足の獣人用の拘束具を破壊する。

この程度のなら何とも無い！身体は動くな……良し反撃開始だ……まずはドアを破壊する、

そして駆け付けて来る奴らを全員倒す……他だし、子供の前だ殺しはしない。

僕を誘拐したのは獣人さらいか……纏めて生き地獄に落としてやる……立ち上がりつて皆に叫ぶ。

「皆つ、田を開じて！」

子供達が、僕の声にならう僕は右腕を前に突き出し、ドアの空間をく押す＞派手な音と共にドアが吹き飛び、見張りの一人が巻き添えになる。

「ぐべえ」

壁にドアごと叩き付けられ氣絶する。

(残りは一人！)

僕は外に飛び出すと直ぐさまに、一人に襲い掛かる。

「がぼつ」

「げふつ」

はつきり言って人狼より弱い……顔を上げると、マスターと保安部隊の人達が目を丸くしている。

「えーと……大丈夫ですか……マスターそれと、サポート能力は無事に発動しましたか？マスター」

「大丈夫だけど……サポート能力て何？」

忘れてた、マスターに僕の力の説明をしていなかつた……説明不足の非礼を詫びて、マスター説明する。

「試しにやつて、みるわね……武器精製……ソード・ワークス」

マスターの手に剣が、出現したやりましたねマスター。

「コホン、あーつそろそろえーかつ？」

マスターの横に居た女の人が僕達に話し掛ける。

「す、済みません、」

「ごめんなさい……」

二人で謝る。

「別にえーよ、逸れより誘拐された他の子達、見なかつた？」

そつだ……彼らを直ぐに保護して貰わないと。

「IJの部屋の中には居ます！」

「何人位？」

「20人です！」

彼女に子供達の状態を説明する……彼女とマスターの顔が……恐ろしく変わっていく……。

（ま、まるで魔王と破壊神が降臨した用だ！）

「イリアさん、今気持ちが見事に一致しよったな？」

「ええ……一致しましたエレノアさん。」

僕も同じです、マスター エレノアさん……

三人は口々に言葉を出す。

「殲滅<sup>やっせつ</sup>良いですか？」

「無双<sup>やうしゆう</sup>良いわよ」

「半殺<sup>やつせつ</sup>しやつたらな」

それぞれの決意が固まり自己紹介をし終え、エレノアさんが命令を下す。

「おーし直ぐに、被害者の保護活動開始、残りは、つづいて続け犯人共を血祭りするでーっ！」

「「おーっ！」」

何か悪人になった、氣分だ…廊下の警備をしている他脚や見張りを片付けながら進むと、ぶ厚いドアが有った僕はドアを爪でこじ開ける。

「なつ何者だーっ！」

ドアの向こうに、シルクハットヒタキシードを着た中年の男が口を開く。

「見て解らん？あんたらを捕まえに来た保安隊やけど…シン・トカラフ？」

「シン・マカロフだ！」

男が怒鳴り散らす。

「マカロフやろうがトカラフやうが、関係あらへん話をさせて貰つて、ついでに刑務所つて言つて、別荘にて招待するけど？」

「ふざけるなつー、わつ、ワシがーつ、体何をした？」

「惚けんの……半獣人の子供達さうつたやうへ。」

エレノアさんの声にドスに入る。

「あ、あんな……人間の成りぞこない等、ら、ラボや奴隸で十分役立つだろ？」「

「ふーん、なあ今の台詞取り消す気は……あらへん？」

「肩を、肩呼ばわりして何が悪い？」

「そつかあ……一片逝つてみる眞界に？」

たちまち顔が青くなるドン・マカロフ……

「野郎共やつてしまえ、それと、ガル・ディアスを出せ！」

その時、壁を突き破つて一つ田の熊の様な怪物が現れた恐らくキメラだろ？……

その時いきなり後ろのドアが吹き飛ぶ！中から飛び出して来たのは、スクランプに成ったスパイダーだった。

若い男の人と女の人と見張り達を蹴散らしながら乱入する！

「お待たせしました。」

「……直ぐに片付ける。」

キメラが一人を睨む……

「キメラに子供を使つた？」

僕は首領に聞く……

「屑のDNAだけならな！小僧」

じゃあ遠慮は、しなくて良いや……むつり怒りで頭が爆発しそうだ……またマスターにビンタされるけど……もう我慢しなくて良いよね？…………マスター？

「つあああああつー！」

僕は叫ぶと、キメラに向かって突進するキメラのガギ爪が、振り下される。

バックステップで避ける。

床が吹き飛ぶ。

11

」……！？」

「ば、化け物！？」

僕は右腕の爪を巨大化させると、キメラを真つ二つに切り裂く……大量血を吹き出しながら、倒れ動かなくなる……後は……こいつだマスター やエレノアさんは、雑魚を相手にしている……後から来た二人も雑魚ばかりに構っている……目の前の肩を片付ける。

「うあああああつ、た、助けてくれーつ！」

「ナニ……言つてゐるのか……ワカラナイナ?」

(爪を構える……)「う言つ奴は生かしては、イケナイ……イキテチ  
ヤ……ダメダヨ……?」

「ふえ、フュリオ君ダメーツ!」

「フュリオっ、殺したら……アカン、止めいやーつ!!」

(「メン……今はボクハ……フルイ」で良じよ……マスター……)

二人が止めに来る前に……殺す……腕を大きく上げて 振り下ろす。

「おーっと、おいたはイケナイナ坊主?」

硬い金属がぶつかる。

目の前に褐色のオールバックの半獣人が、バスター・ソードで僕の攻撃を防ぐ。

「邪魔しないでよ、オジサン……」

「オジサンじやねえ、お兄さんだ! 邪魔するね、特にお前見たいに血が、上ってるヤツは……なつ。」

彼は僕をバスター・ソードで、吹き飛ばす。

「ぐあつ!」

4・5メートルは軽く飛ばされた。

「フーリオ君ー！」のをおおおおつー。」

マスターが武器を、バスター・ソードに変えて男に挑む！激しい切り合いか始まる。

「悪いな……お嬢さん……後2・3年したら剣の相手してやるよー。」

マスターを弾き飛ばす。

「あやあつー。」

マスターが床に叩き付けられる……

僕は起き上がりつつ、上半身を起します。田の前に剣先があった……

(二つの間に近付いたんだ？)

「なあ、坊主頭冷えたか？」

「……」

「お前には血生臭い事は似合わねえよ……」

無言で睨み返す……男は勝手に話を続ける……

「お前の力は、何の為に有る？お前の守りたい物は何だ？、そこの嬢ちゃんか？それとも……さらわれた子供達か？」

皆が男の言葉を聞いていた。……その時、首領が近寄り口を開く。

「御託は良い。…さつやと付ける。」

「やつだな……片付けるか? テメエから……なつ。」

いきなり首領を蹴り上げる。

「くへえ」

「話の腰を折るなバーカ」

そして首領は動かなくなる。

「ほ、僕は首を護りたい!」

「じやあ……そつるのは何だ? 力に……振り回せ! そじやあねよ  
!...」

思わずびっくりと、なる。今ので頭が冷えた。

Hレノアさんが近付いて来る、そして男と対峙する。

「なあ……アンタさつきから偉そうな言葉吐いてるけどアンタは、  
何しとんねん?」

「この男は確かに強い、ただ強いだけや……でも向やこの……寂しさ  
的な雰囲気は……」

「アンタ名前は……？」

「ガレスだ……」

何か調子狂うは……やりすりついでかなわん。

「周り見んでも解るやろ……古臭いけど……尾繩になる氣無いか?  
まだ間に合つて。」

ガレスは咳く様に吐き出す。

「それは……無理だなあ……俺は悪党だ……もう此処まで染まつち  
まつた……」

「何で獣人やらいに手貸したん?他にするべき事はあつたはずや……  
」

ガレスは諦めた様に叫ぶ。

「ハツ、今更か?そりや無理だな!俺達見たいな半獣人にまともな  
仕事有るか?、何処に行つても化け物扱い……やけ自棄になつて気が付  
いたら……こんな所で用心棒だつ!」

そして……うちに斬り掛かつて来た……身体が動かん……多分この  
男の台詞がそうさせとる……

そん時やアルトがうちの間に割つて入った……

「困りましたね……隊長らしくない……」

えつ、つかじしく無い……どうこいつ事や?

アルトは【夢幻流】の使い手や……しかし手に持つてゐる。

「はあああああつー」

「ふつー！」

「一人の剣が激しくぶつかる！正直ガレスの言葉に打ちのめされた……けど、うちにも言いたい言葉はあるー

「確かに半獣人には住みづらこの世の中やつ、けどなつ誰もが、アンタ見たいにくすぶつてへんでつそれになあつ、人さらうに手貸してそれで満足かアンタはー！」

叫ばず必要られんかった……その時や……アルトが圧されたんは……

「やりますね……わすがに此処で……余裕とは思つてしませんでしだけど闘剣王ー！」

「お前もな……こんな所で夢幻使ひと、やつ合ひとは思つてなかつたぜー！」

アルトはボロボロや……「ちのせこや……余りに腹が立つたんで、自分の額にグーを入れる……自分の不始末は自分で着ける。

「アルト……アンタのお陰で気合に入ったわ、サンキューーやで。」

「隊長……？」

そつ言つて鉄扇を構えるさあ、舞を舞わせて貰おか？

「その鉄扇……鬼姫か？」

「他の奴やつたら……もう一遍言つてみい……と怒つてたで……まあ有名なアンタなら、別に怒る氣なんてないで……」

うちは今正直嬉しいと想つた、あの有名な黒豹かれとなら久しづりに修羅の舞を踊れそいや……とつその前に隊長としてやっておかな……アカン事とイリアさんこいつの秘密を知つて貰わなアカンな。

「アルト・レイラ・それに各班つ、手え出したら懲罰や！」

「「うつ、『解』」

多分うちの怒気に圧されたな、皆には後で謝るわそう思いながらベレー帽とコートを脱ぎ捨てる……頭にある一本の鬼の角……正直この姿見られんのは嫌なんよでも、私を産んでくれた両親には感謝してるで。

「イリ亞さん……うちな鬼族の子供なんよけど……」

そう言いかけた時イリアさんの口から、想つてもなかつた、言葉が掛けられる。

「エレノアさんは、貴女の【友達】に成りたい、その前に……ガレスさんを救つて……多分……いえ貴女にしか出来ないから……」  
友達に成りたい……か、本当に……変わった人や普通【鬼】で、聞いたら普通は逃げるで……まあどうでもいいか。

「待たせてごめんな。」

「構わんさ……」

さあ始めよか互いに、遠慮は要らんな？

同時に仕掛けん、まさに死の舞踏会やーガレスは 剣舞うちは演舞や、余りの愉しさに互いに顔が喜んどる、でも何か寂しいで……あんたの実力はこんなもんか？

「どうした……それで終わりか？」

「そやな……鉄扇が取り柄だけ……やつたら……あんまり面白無いやろ？」

そう言つて鉄扇を床に、捨てる……鉄の重い音が響く。

うちは直ぐに拳法の構えを見せる。

「おいおい、剣士相手に素手か？」「

「ウオーミングアップはこれまでやろーアンタの剣へし折つたるさかい、掛かってきつ！」

ガレスは無言のまま突きの構えをとる……そしてついに突進して来た。

「……何イツ」

ガレスの驚きも解る何故なり……つちは肘と膝で刀身を挟んでいたからや……」

「ああ、へし折るでつ、覚悟しいや……」

鉄の折れる音がした、剣は真ん中から真つ二つに折れた。

「ほつ……やるな鬼姫!」

そう言って、半分折れた剣を投げ捨て、中華拳法の様な構えをとる。

「剣術は洋式で……拳法は中華流かあ？随分良い趣味してんよ……アンタ。」

「どうせなら、一つをと想つてな……」

(二つ? 一つのやつで?)

「そんな事は、どうでもいい今度は……これから行くぞー!」

彼が駆ける、つちと山の獲物に向かって……つちはとつたガードする。

(凄い……まるで疾風や防ぐのがやつとやー)

まるで……拳と脚技の暴風やな、【黒豹】の一いつ喝伊達やあらへる。

「良こに動きをするなあ黒豹！」

「俺こいつこして来るとはやるな鬼姫ー！」

互いに拳や脚を打ち込む、まるで嵐の用戸……

でも……流石に疲れた……もつ……そろそろ仕舞いにしてよづか。  
「これから……ひの取つておき（一撃）を食らわししたる……や  
の前に、もう一度やり直す氣い無いか？」

「せうだなあ……お前が俺を倒せたらな？」

ガレスは田を覗じて静かに言った。

「男こ、一いつ喝は無いな？」

「聞くまでも無いだろ……」

何でアンタ……そんなに不器用なん？

「ひが……アンタの想い受け止め……たろか？」

「それは……皆田か？」

(なつ、なつ、何言つてんねんーー)

「／＼／＼ アンタが 余りにも不器用で ほつとけやんから  
や……」

確かに……ほつとけやんなアンタは 半獣人で犯罪に手を染める奴はこの国でも珍しくない……

うちはまだ、恵まれてる方やろ……色々有つたけど、いつして物騒な仕事してるけど、仲間に巡り会えた、ただ彼にはそんな機会が無かつたのだり……

「 もちろん決めよか?」

「 もちろん決めよか?」

同時に駆け出す!互いの急所に一撃を見舞う、余りの激痛にうちは膝を折る……

「 なんで……急所はずしたん?」

不思議に想い黒豹に聞いてみる。

「 別に……ただ……殺すのが惜しい……だけだ。」

黒豹の脇腹が朱に染まる。

「 うちは手加減なんて器用な真似出来るか!」

脇腹の痛みを堪えてそつ吐ぶ……でも返事が無い。

「 何や……氣絶したんか……案外だらし無いんや……な……」

その後いつも氣を失つたらしい……情けないけど、氣がついたん  
……は逸れから三日後の話や。

第6話～フエリオ誘拐事件～（後書き）

描写を修正しました。

## 第7話～第16騎士隊創設秘話～（前書き）

誤字・脱字の他言語を少し変えました。

描[跡]を修正しました。

## 第7話～第16騎士隊創設秘話

エレノア・アリアドネ Side

獣人狩り事件から、六ヶ月が過ぎたボスの、マカロフはようしが、締め上げたら、あつさりと白状した。

ただ、ラボは今回の件は一切無関係と正式に発表してるが……うちが思うにラボは黒やな……何故ならアジトに在ったパソコンのデータ調べたら、改竊されてたからや……あんな連中にキメラなんて造る技術あらへん、連中もアジな真似しあるで……

「まあ……事件は解決したし獣人狩り組織は、根こそぎ潰した……これで一件落着やな。」

そつそつガレスやけど、うちの司法取引を断つて今は刑務所に入ってる、何でも『けじめ』付けたいんやて……律儀な奴や、ガレスは誘拐に加担しとらんけどら15年の刑に架せられるはずや、この前面会に行つた事をうぢは思い出してた。

『ついらの所に来いへん?』

『刑期を終えたらな。』

『そつかあ、じゃあ待たせて貰つて、ついについ見えてけつこう気が長いんよ。』

あまガレス、アンタが律儀なお勤め果たしたいんなら別に止めへんよ、ただ出て来たら、その分思いつ切り働いて貰うからなー！

『お前……何か企んでるのか？』

「うわっ、技だけやのうて感も鋭い。」

『別に企んでへんよ、それより聞きたい事が、有るんやナゾ？』

『何だ、聞きたい事で？』

『面倒臭げに答えて来る。』

『何で二つなん？』

『一つの武を極めても面白く無いから、いつも二つにしただけだ。』

『あははは、やつぱりアンタ面白いな それじゃ帰えるわな、うち

……』

やつぱり二席を立ち踵を返して刑務所を後にした……

ふと気が付くと、アルトが書類を持つて来た何やら怪しい顔して

……

『連隊長……』

「何やえらい慌てで、どないしたん？」

「ハツ、実は……イリアさんの事で……」

アルトは何時もエレノアさんて、うちの事を読んでるただ……連隊長の公称はとんでもなく大真面目の時だけや。

「イリア騎士候補生がどないしたん?」

今イリア・キサラギは、騎士候補生としてこの六ヶ月訓練の真最中のはずや……何かあつたんか?

「イリア騎士候補生に…トラブルか!?」

「いえ、彼女と……言つより彼女のご両親ですね……空中貨客船【アトル・カルゼ】号墜落事件の犠牲者に、彼女のご両親が……乗船されました!」

アトル・カルゼ号!/?あの原因不明の爆発で、フォルド樹海に沈んだ船か……

「それで……何か解つたんか?」

アルトは横に首を振り。

「いいえ……特には……」

とだけ答えた……

「無駄足踏む、為に此処に来たん?」

アルトが少し怯んだはつとなつた……怒氣をはらんでたらしく……

「『コメン』……一人にしてくれる?」

「分かりました……」

アルトが、自分のディスクに戻る自分でも、調べて見るか?・そう思つて、パソコンのキーを叩き検索する。

アトル・カルゼ呑墜落事件へとヒットした……どれどれ……そこには簡潔にこうあつた。

以後の閲覧は、最高機密の為パスワードを入力して下さいvvv

パスワードー?ただの墜落事件やのに……?

待てよ……イリアさんのお母さんは確か……軍の研究部やつたな……人物検索……メアリー・ホートフェルト……

魔人兵士製造プロジェクト……以後国防軍司令部権限で閲覧を禁ずくく

国防軍!?!何で、民間船の事故に軍が、絡んでんのや?それに魔人兵士製造プロジェクト?……まさかな……あれは失敗やつたはずや

……

うちは、かつて参謀部にいたからな……考へても仕方が無い駄目元で、パスワードを参謀部時代の物を入力する……

やつぱり無理やな……パスワード変更されてる……

しかも「丁寧に」この、パスワードは無効やて……役に立たん端末や、

モニターライブで潰したらか?その時モニターから呼び出し音が流れた。

「エレノア連隊長……局長が至急、連隊長に局長室まで出頭せよ、との通達です。」

ミナ・ディストが連絡して来る……のは良いんやけど……また何かやらかしました?てつ、そんな眼でこいつを見んなーつ、

「あのーっ、また何かしでかしました?連隊長」

「それ、ボーナス減らして 嘘つ意思表示?」

ジト眼で睨みつける。

「何でも、ありませーん」

「アハ ジョーダンやで、すぐに行くて局長に伝えとこ!」

「解りました」

この娘も大分冗談が、解つて来たな……さて局長がお呼びか……やこじい事に成りそうやな……

\*\*\*

今俺は大聖堂騎士団の、部隊編成や各部隊の編成状況の報告書を読んでいる。

各部隊は以下の通りだ。

特務騎士団  
フェンリル・ナイト

実戦部隊

零式戦車大隊

各騎士団

第1騎士団・氷竜騎士団

第2騎士団・魔竜騎士団

第3騎士団・白狼騎士団

第4騎士団・炎竜騎士団

第5騎士団・雷竜騎士団

第6騎士団・光竜騎士団

第7騎士団・天狼騎士団

第8騎士団・地竜騎士団

第9騎士団・赤狼騎士団

第10騎士団・銀竜騎士団

第11騎士団・鉄竜騎士団

第12騎士団・白竜騎士団

第13騎士団・双竜騎士団

第14騎士団・飛竜騎士団

第15騎士団・黒竜騎士団

そして各騎士団に編成予定の空中戦艦隊

これらはもつ少し、時間がかかる原因は、国防軍の石頭共だ我々に空中戦力つまり空中艦隊が配備されるのは好ましくないとの理由だ。

⋮

そんな理由で、かなり編成は遅れているが、戦力としては陸戦がらメインだから今の所艦隊は演習艦のみだしかしそれらもよつやく形に成ってきた。

次に頭の痛い話の書類が目に入る……まだ候補生にこだわってるのか…コイツラは。

次は……やつぱりイリア騎士候補生への評価だな……まあ教導官や各騎士達の評判は良い……しかし……

（此処まで来ると……ある種の嫌がらせだな全く俺は女一人に構つてゐる程暇人じやあ無い。）

彼女の実力は、フヨリオを抜きの場合でも、かなりマシな方だ……大体彼女だって……こんな化け物屋敷に来たくて来んじゃ無い。

「はあっ……全く奴らの言い分はまるで子供だな！」

「まあ我が儘な子供の意見なんて、無視して良いよこの場合……」

そう言つてくるのは、俺の弟のヴァインだ、俺と同じ赤毛でら前髪を垂らしている、制服はエリート職の白だしかも、この国の将来の王だしかし、俺は王族の地位とかには興味は無いそんな地位より化け物を相手にしてる方が俺向きだ……

「しかし改めて見ると……」

「パワハラで言ひやつだね、これは？」

確かに魔王等従える魔女等追放しろとか、魔獸王は早く封印しろとかだ恐らく裏がある。

「多分……ラボだな」

その時ドアがノックされた。

「局長カレン・ノア出頭しました。」

「同じく…Hレノア・アリアドネ出頭しました。」

「いいタイミングで、来ててくれたよ……」

二人が局長室に入つて来る。

「サラ・フンリル出頭しました、遅くなつて申し訳ない……」

これで全員だな、さて秘密会議を始めるか。

それぞれ、ソファーに座る会議を始める前に、集まつて貰つた理由を先に伝える最初に、切り出したのはエレノアだった。

「えーっと、で、ですね……」

「敬語抜きで良いよ、エレノアさん。」

ヴァインが、エレノアの様子を見るに見兼ねて、助け舟を出す周りも釣られて苦笑する。

「コホン……じゃあ言つてイリアさんの何処に、あいつら不満持つてんねん?」

「確かにおかしな話だ、嫉妬でこちらの仕事を潰さないで欲しいものだ。」

カレン・エレノアが口々に発言する。

「私はイリアとフーリオの一人は、正当に評価されるべきだ。」

サラ将軍も同意見だった。

「問題は誰の指揮下に、彼女を置くべきかですね？」

ヴァインが、もつともな意見を言った。

「皆の意見は解った、しかし俺は彼女を部隊長にしてよしと思つ。」

「ふ、部隊長！？幾ら何でも早すぎやで、後最低でも4・5年は掛かる……「ちは反対や……局長アンタ……イリアさん殺したいんか？」

「まあ待て、局長の意見も聞こつ話はそれからでも遅くない。」

興奮したエレノアを、カレンが止める。

「理由は、彼女の魔王の力だフヨリオが安定を保つてるのがやつと  
だつたなカレン博士？」

「その通り今は、安定しているが……いつ覚醒してもおかしくない  
……」

「一」

「……」

エレノアは沈痛な顔をする、そしてサラ将軍は口を開じたままだ。

全員の沈黙を待つてヴァインが口を開く。

「今の現状じゃあ、誰も彼女を部下に欲しがらないでしょう。」

「そ、それやつたら隊長候補のローザリア・コーロ・クラウスはどうや?あの三人かなりイリアさんに助けられてるで。」

エレノアの気持ちも、分解らんでも無い、彼女は元国防軍参謀部の上級士官だった……無能な上官のせいで、怪物討伐で、かなりの犠牲を出した責任を押し付けられてほぼクビ同然で此処に来た。

「確かにあの三人なら、大丈夫だろう?……」

「だつたら何故!?」

「部下が、納得しない!」

サラ将軍が強い口調で、言い放つ、

「僕も同意見です」

「そうだな……しかし問題だぞ彼女の階級ではな

ヴァインやカレンが口調に意見を言つ……俺も決断を下さねば、集まって貰つたメンバーに申し訳ない。

「彼女の階級を一階級上げて中尉とする、理由は先月の訓練で遭遇した魔神を撃退したものによる。」

もう誰も黙つて居る構わぬ話を続ける。

「エレノア連隊長、本日をもつて保安部の連隊長を解任する、理由は民間人を事件に巻き込んだ事だ……表向きはな、君には新しく創

設される騎士隊の隊長参謀に、就いてもひづ。「

「解ったわ……それで……部下の人選は?」

「実力の有る者を……ただし各部隊で厄介者つまり……」

「分かりやすく言えば……連中にとつて、扱いづらこ連中やな。」

大聖堂騎士団は半官半民の武装機関でも有る、騎士隊には、軍から出向いてる連中が頭を占めて居るそこから、使える連中を一いつ気に引っこ抜いて彼女に当てる……後は彼女次第だ。

「うちが参謀として、誰が副隊長なん?」

「それは僕の方で、うつてつけの片を就けますよ」

「なお新騎士隊は、フェンリル・ナイツ魔狼騎士団と同じ特務機動部隊とする」

俺とヴァイン以外の全員が怪訝な顔をする、まあ当然かそれを踏まえて説明する。

「他の騎士隊と同列に扱うのは危険だからだ、魔王に覚醒の可能性が有り、その上自分達よりも潜在能力が上だつたら……誰もが彼女を敵視するそう成つたら、彼女を含む全員が孤立する。」

なんにせよ部隊の区分けは必要だ、問題視する馬鹿が現れる前に先手を打つ!それしかない。

「彼女の能力だが、格闘技能はフェリオのサポートを含めば、Aランク、次に射撃はAランク、そして魔力はD～Sランクと出た。」

「何よ！？その魔力の不安定差！魔術師として完全に落ちこぼれやん？」

「この魔力の件は、問題に成らないだろう、彼女は国防軍士官の時から魔力テストは最低ランクだ。」

エレノアとカレンのやり取りを聞くしかし、彼女には悪いが不運属性でも有るのだろうか……

「では、この件はこれで終了」とします。」

「次の件は、彼女の件とはシャレにならじ。」

「「.....」」

全員の沈黙を待つてから、一番厄介な件を告げる。  
「大聖堂騎士団内にスパイが紛れ込んでる……」

「「.....」」

「エージェントからの情報だ間違いない」

恐らくは、身内（軍）または最近動き出した【世界再建議会】だろう、警戒を強めるか。

「ついうちはスパイまで、相手せんとあかんのか……」

「スパイの方は俺の方で何とかしよう。」

取つ合ひえずは、内部の連中……ラボ繫がりだな。

「済まない局長。」

「サラ将軍どうかしたのか?」

「今度の空中艦隊の演習延期には出来ないだろか?」

「難しいな……もうスケジュールは組まれて……まさか!…?」

「流石は魔狼……俺もその可能性を見落としてた。」

「つまり将軍は、内部の連中とラボそして国防軍の二つがつながつてると?」

「あくまでも可能性の一つだ。」

「解りました、艦隊演習に参加を要請しますサラ将軍。」

「解りました、演習中……魔狼の眼を光らせましょ。」

「ではこの会議は、これで終了とするなお本件は一切他言無用とする。」

無言で全員が領き局長室を出立つとする。

「Hレノア連隊、少し良いか?」

「奇遇やな、今つかもうつと思つとつたんよ。」

「どうやら同じ考え方らしい。」

「さて本音で、話していいしよか？」

「そうだな……立ち話も何だ、座って話すか？」

俺と彼女は向かい合ってソファーにすわる。

「それでイリアさんを、どうしたいん？」

「そうだな……せっかく魔王の力を……手に入れたんだ使ってみたくなつた……とか？」

「局長……笑顔で殴つて良い」

「嘘だよ、安心しろ……。」

「口一 口笑顔だが、エレノアの背後に恐ろしいオーラを感じる……冗談半分でフルボッコにされそうだ……

「本音は、彼女と君達の為だ。」

「うちらの為???

「彼女は自分で、何でもしょい込もうとする。」

「六ヶ月前に、一人でフェリオを助けに行こうとしたで……

「つまり騎士団と同列だと……分かるな?」

「やつ……やね……自分のせいにしてまへ……そんな娘や……」

全く……少しは仲間を頼れ！それが彼女の欠点だ。

「人事の件やけど……「つちがこれや、と思つた人材でかまへん？」

落ち込みそうな、雰囲気を打ち払いながら聞いてくる。

「それぐらいは連中も文句は言わんだろう」

腕組みをして、やう答える。

「じゃあもう……行くわ、ついでに一言言つとくで……」

去り際エレノアが俺に一言。

「魔人兵計画に付いて、局長は関与してへん？」

あれか……魔人を改造して兵士として使う研究か……

「大聖堂騎士団の前任の局長は、この件については事件が終わった後だ関わるのは……」

「彼女……隊長にしたら薄々気付き初めるで……」

「気付くまで絶対に言つな！」

強い口調で釘を刺す。

「でも彼女を騙すんは……」

「君が耐えられなく成つたら彼女に話しても良い。」

全く君もまだ子供だな……

「全部話すで……うちが知つてゐ事……でも尊レベルやけど……」

「その時は俺も協力する。」

やつぱり俺は女の子に弱いらしく……

「それじゃ行くわ……」

「最後に君の階級を一階級降格する、そしたら釣り合つだらう?」

「でも一人中尉があるので……」

「階級なんて、意味がない彼女の指揮する部隊は、民間出身で固めれば良いさ。」

「やつぱり、女の子に囁くは甘いぞ。」

そう言ってエレノアが部屋を出た。

\* \* \* \*

あの会議から一週間後、そろそろ新任の隊長と成った彼女が来る。  
うちが保安部から、引っ張つて来たメンバーは以下の通りや

アルト・ファルゼス小尉

リフィア・ウォード小尉

楓（半獣人）曹長

アリシア・コードウェル：小尉

レイラ・フォーエル：小尉

スコット・ベール：準尉

シルビア・フォート：曹長

レイス・マカリスター：軍曹

ジャック・フォルト：伍長

マリアベル・アミュレット：小尉

ロバート・ミュラー：曹長

スミス・ジエス・伍長

フィーナ・ローズウッド・中尉

エレノア・アリアドネ・中尉

フェリオ・キサラギ伍長

イリア・キサラギ・中尉・隊長

以上のメンバーや、女子の比率が多い?仕方が無いわな……男子片つ端から声かけたけど……中々……ヘッドハンティングに、掛からんかったんよ……まあ今のリストのメンバーには役職を与えて、後は歩兵隊やね……まあ数は有るんやけど……その……150人しか認められへん、かったんよ局長に……恫喝……もとい要請しといたから……後なんとか50人は追加されそうやな頭痛で……

ドアをノックする音がした。

スコット君が来客をうちに告げる。

いきなり階級無視で隊長か……氣絶さんといでな……イリアさん……

「人事部から……」けりに配属との通達が有り出頭した、イリア・キサラギ中尉です!」

初日から……カチコチやないか……取り敢えず……和ませつ……

「ようこそ第16特務騎士隊へキサラギ中尉。」

「ハツ、よ、ようじくお、お願ひします……」

敬礼を交わして挨拶を終える。

「びつくりした? イリアさん。」

「は、はい、いきなり……」いかにも行へようとして言われて……

「コラックスして良じよ」

「わ、解りましたエレノア中尉。」

「あー……此処じゃ階級なんて意味無いねん。」

取り合えず彼女に、我が隊の状況を伝える。

(勿論あの会議の件は今は内緒や……)

「だいたいの事情は解りました、それで隊長は?」

「何いつてんねん、イリアさんで決まりやで……」

軽い冗談でイリアさんに指を指して教える。

「わ、私が……隊長……?」

自分の顔に指を指してついに聞く……まさか……

「もしかして……何も聞かされてへん?」

「ク「クと頷く、彼女……後の展開見えたで局長。

「冗談抜きで、イリア・キサワギ中尉アンタやで……」

（まるで死刑宣告やな……）

「うへん」

バッタリとその場で氣絶する……ついには騎士隊のみんなを集めてイリアさんを介抱した。

（まあ……こきなり隊長で言われたら普通はやつ成るわな……局長……覚悟しいやー…）

無論……局長をシバきに行ひにしたらみんなに止められた。

第7話～第16騎士隊創設秘話～（後書き）

一部描画を変更しました。

## 第8話～イリアとフヨリオの訓練～（前書き）

誤字がありました。

申し訳ありませんでした。

第八話をミスで消してしまって申し訳ありませんでした。

第八話のストーリーを一部変更または描写の変更をしました。

## 第8話～イリアとフエリオの訓練～

イリア・キサラギSide

今私は、フエリオ君の勉強を、仕事の合間に見てている、フエリオ君はこの前の試験で、信じられない成績……つまり赤点を出してしまった……その為今フエリオ君の理性は、限界に近づいている……そのつむ本に噛み付きそうだ……

今彼は隊の非番の仲間と猛勉強中なのだ……

(歯あん本当に...)迷惑なさい。

「「「うああああっーーー」」

可哀相ですが無視します。

「「だあああああっーーー」」

頑張つて、フエリオ君我慢だ私……

「「ぐおおおっーーー」」

プチ……（我慢の限界です！）

私は消しゴムを取ると、フエリオ君の頭目掛け手加減をして投擲するー。

「「痛つ……マスター」」

頭を抑え私を睨む、フェリオ君しかし私は魔王化してにこやかに。

「ふ・え・り・お君、お願ひだから静かに勉強して」

と笑顔で彼に頼む……

「「は、ハイ……マスター!…」」

そんな時だディスプレイに予備だし音がなり、私は相手の顔が映るのを待つ予備だしの相手はカレンさんだった。

『忙しい所済まない』

「どうかしましたか……カレンさん?」

何か有ったのだろうか?凄くカレンさんが嬉しそうな顔をしている。

『フェリオのギガ・ガレットの改良型が完成した』

「「完成したんですか!?」」

嬉しそうに、言つフェリオ君。

『そこで今からテスト兼ねて訓練を行うから取りに来て欲しい』

こう言う時は、絶対ろくな事に為らないしかし訓練で一体何をするんだろ?……

『何なら、フェリオ一人でも良いぞ』

「それはダメです……分かりました、私とフェリオ君と後手の空いている隊員の方を連れて向かいます！」

実はフェリオ君一人では、危険なのだ……以前騎士候補生として通路を歩いていたらきなり女性騎士候補生達にフェリオ君が囲まれた。

その時は、サラさんや副将のカオスさんに助けられた、フェリオ君一人でカレンさんの所へは絶対に行かせる事は、出来ないただでさえあの時……泣き顔だつたのに。

「場所は何処でしょうか？」

「場所は第2野外研究部だ。」

第1研究部は施設内に、有る第2研究部は屋外だ此処からだと2時間位だ。

「分かりました、第2研究部ですね直ぐに向かいます。」

「ああ、急がなくても構わない。」

そう言って回線は切れた。

メンバーは私とフェリオ君・リフィア・楓・エレノアさんだ、騎士隊隊長室はアルトさんに任せて第一研究部に向かう。

向かう途中でローザリア分隊長に会つた、青いロングヘアを束ねて赤い瞳の美人だが冷たい印象を周囲に与えがちだが性格は普通だ。

「あら、イリア隊長お久しぶり。」

「お久しぶりです、ローザさん。」

彼女とは騎士候補生の時から、色々と教えてくれた私も始めはフルネームで呼ぼうとしたら怒られた。

「今日はどうりへ？」

「カレンセ……いえ博士にフェリオ伍長の武器の件で呼ばれて、第一研究部に。」

「そう、私はこれから書類の整理ですでは頑張つて下さい。」

そう言つて彼女は、第4騎士隊室に向かうこすりも早く第一研究部に行かないと。

「ローザさんですが、少し冷たそうですね~？」

「楓ちゃん、人の悪口は言わないの。」

楓では研究部で働く清音の妹だ一人は妖狐の姉妹だ、楓の方は父親の血が強く出た為外見は短めの、狐の尻尾がある位だ、姉妹とも、髪で彼女は髪をショートボブにしている性格はおつとりしたのんびり屋だ。

さて第二研究部が見えてきた、入口にカレンさんが腕組みをして私

達を待つていた。

「10遅刻だ……」

「遅れて済みません。」

「『めんなさい』……」

「済みませんです。」

「時間気にせーへんて、カレン姉さん言つとたやん?」

と口々に言葉をのべる。

「良し、これから改良型のギガ・ガレットの性能テストを行う。」

とカレンさんは足元のトランクケースを開ける。

「何か、前より大きく成つてるー前は腕にはめるだけ……これじゃ片腕が一つすっぽりと……しかもクローラーじゃあ無くてブレード!ー?」

フェリオ君が、田を大きく開けて驚いた正直私を含む全員が同じだろ?。

「クローよりも見栄えの良いブレードにして、アサルト・マシンガン・やバズーカ砲並の砲撃能力を追加した」

フェリオ君が複雑な顔をしている。

カレンさんは魔改造した、ギガ・ガレットの説明をしていたとでも

嬉しそうに。

「注意事項を先に言って、おく魔弾はフェリオの魔力を使っているからブーストの際はオーバーロードに注意しろ片腕が吹き飛んでも知らんぞ！」

そんな物騒な改造したですか？

「安心しろ、ただの冗談だそれとキサラギ隊長」

この人の場合冗談に聞こえない……

「はい、何でしょか？」

嫌な予感がする……

「君にも、参加して貰う。」

「私はフェリオ君、見たいな才能は……」

「これは、副局長命令だ！」

選択肢は無いんですね……

「分かりました、キサラギ騎士隊長訓練に参加します。」

そして訓練所に通された、かなり広いまさか此処で総合火力演習でもしどと……

(主に大砲や戦車の性能テストを使う所よ……此処は。)

「ルールは、イリア隊長とフェリオ伍長の連携で敵を倒す事……な  
おどりらかのアラームが鳴った時点で一人の負けだ！」

かなりハードだ、でもフェリオ君とならやれる。

「敵は新型スパイダー50機とリーダー機はケンタウルスそれにト  
ラップが一つ隠してある言い忘れていたベスパもいるからな。」

とにかく、負けない様にしないと。

「後敵の弾は統べて模擬弾のペイント弾だ、安心して当たつてくれ

（あ、当たりたくないーーいつ！）

「では、始めるぞ清音まずはスパイダーとベスパだ」

「ベスパ！？」あの空中無人偵察機、あれは各国で対人兵器として使わ  
れてる。

形は 型で、中央にローターがある言わば無人ヘリだ。

ケンタウルス型は最新型の多脚戦車で、六本脚の大型機だ武装は主  
砲一門にアームバルカンとグレーネードを装備していたはず。

清音さんがコンソールに触れる、隠し扉が開き大量のスパイダーが  
外にあふれ出て来る……

（うあーっ、悪魔に見そつ……）の光景

スパイダー全機がフォーメーションを整える。

『来れより、訓練を開始する』

「行くわよ、フェリオ君！」

「はい、マスター！」

私達は、スパイダー達の攻撃をかわして、一手に別れて行動するフェリオ君が魔弾をアサルトモードで放ち次々と片付ける。

『ほう……ならベスパを二機出せ……清音。』

『了解……ベスパ出ます。』

三機のベスパが互いに連携攻撃を開始する反射的に遮蔽物に隠れる、ペイント弾が遮蔽物を青や赤に染め上げる。

「地上（下）は私に任せて、フェリオ君は上を！」

「分かりました、マスター！」

フェリオ君が地面を蹴って、跳躍する。

「はあああっ！」

一機田をブレードで突き刺す……そして、踏み台にして一機田をあらう事か蹴り飛ばす！三機田は距離とろつと離脱しようとした所を狙い撃たれる。

「バスター・シユート！」

呆気なくレーザー状の魔弾によつて墜落する。

地上ではイリアがバスター・ソードで、数の多いスパイダー達を相手に戦っている。

その時スパイダー達が、一斉に今までのパターンを変え激しい攻撃を開始する！二人はとつさに遮蔽物に身を隠す。

\* \* \*

エレノア・アリアドネSide

「何やあの動き！？……隊長やフュリオについて来てるあの多脚等……カレン姉さん……まさか？」

「あの多脚戦車達は、一機づけ撃破されると攻撃パターンがそれを元に学習し変化するつまり、レベルアップだ。」

「ターゲットが、レベルアップしてどーすんねん！」

「エレノアさん、落ち着いて下さい。」

「そ、そうですよ～。」

楓と清音の一人が、うちをなだめに来る……

清音は楓の姉で、髪の色は金髪や田の色は青で眼鏡を掛けたる生徒会長見たいな雰囲気があるな。

その時や、この訓練の仕掛け人が来たんわ……

「二人共頑張っていますね、おやエレノアさんご機嫌ななめですか？」

「よく言わ、これ訓練やのうてただのなぶり殺しやんか……？」

余りにも腹が、立ったんで皮肉を口にする今は副局長の二三二三顔が腹立たしかった。

「副局長は、女子供をいたぶるのが趣味なん？」

つい、口調がきつくなつた。

「いえ違います、エレノアさん一人には今以上の成長をして自身の限界を知つて貰う為です。」

「あんな痛め付けみたいなのが？あれが実戦やつたら確実に死んで……」

「では貴女は、キサラギ隊長とフェリオ君達を殺したいのですか？」

殺し……たい……や……て、うちが？副局長の冷たい、いや氷の槍見たいな言葉が胸に突き刺さる。

「うちが……隊長やフェリオ殺すやで……？」

「やつです、このままでは確實にあの一人は死にますそして貴女もです」

「うちらのやり取りにリフィア・楓・清音の三人は身を硬くしてゐる……」

「副局長のやり方が、少し氣にいらんだけや……」

「敵を知り己を知れば、て奴ですよいぞれ分かれます。」

なるほどな……うちも、まだまだやて事か……考へてもしゃない今は訓練の結末でも見てよか……やつぱり内もまだまだやな……

\* \* \* \*

### フェリオSide

スペイダー達の激しい、攻撃に徐々に僕達は圧される足元に違和感を感じた。その時マスターの周囲に、バリアフィールドが展開して僕達は分散された、それだけでは無い隠し扉から三機の零式が現れた。

『フェリオトラップに引っ掛かるなんて、まだまだだな!』

『蒼い獣王か…腕が鳴るぜ!』

『フェリオ君、お手柔らかにね』

ルースさん率いる零式戦車隊【テス・ハウンド】が迫る。

「マスター！」

（フェリオ君は、ルース隊長達をお願い！）

マスターが他脚を次々と倒して行くそして遂にケンタウルスが起動する。

『フェリオ……覚悟！…』

ルースさん達零式戦車隊が、一斉に主砲を放つ僕は遮蔽物を楯にして避ける、さつきまで居た場所はペイント弾で赤く染まっていた。

『やるな！フェリオ良し、カイル・レイン、フェリオにテス・ハントイリングを仕掛ける！』

二機の零式が一手に別れて、正面からルースさんが突撃して来る。

僕は直ぐさま回避に専念する。

『甘いぜ、フェリオ』

とカイル機が僕目掛けて砲撃を仕掛けて来る、直ぐに別の方向に逃げようとする。

『ゴメンね、フェリオ君！』

レインさん謝るなら、撃たないで下さい……

とにかく、避けるしかない遮蔽物に身を隠す……

(テス・ハンティングか厄介だな……まるで狩りだな……)

彼らの戦法は一人が、追い込みそこを一人または全員で攻めると言う物だった……なるほど【狩り】と言つのも頷ける。

並ば獸王らしく、狩りをさせてもらおうまずは一人づつ片付ける。

そして、素早くマスターと合流する。

『フェリオが……消えただと……?』

『センサーやレーザーは正常だぞ!』

『嘘!?信じられない……』

さて本気を出せば、ステルもどき位は僕でも出来る……気配を殺し田標に近づく……そして襲い掛かる。

まずはカイル機からだ、人型に変身してありつたけの魔弾を周囲に叩き込む、爆炎と衝撃で今頃センサーはパニックを起こしてゐ筈だ。

『カイル、後ろにフェリオがいるぞ!』

ルースさんから警告を、受けてカイル機が変形して上半身を向けるだが遅い素早くジャンプをして、真上に飛び上がりギガ・ガレットをコックピットに向けてロックオンする。

『撃破された！やるなフェリオ』

『カイル機がフェリオ君に……負けた！？嘘』

『相手はフェリオだ……油断したら負けるぞ、レイン！』

とローラに一人は連絡を取り合つて、僕を警戒する僕は素早く着地すると魔獣に変身をして勢い良く走り出す目標はレインなんだ。

『よーし、見つけた！』

先手を取られた！ガドリング砲が襲い掛かる、ジクジクに回避に専念して魔弾を撃ち込んで旋回機能を奪う。

そして呆気なく勝負はついたカイル機同様に、コックピットをロッタクオンする。

『あーあ、負けちゃった。』

次はルースさんだしかも手強い事如くこちらの攻撃をかわす、驚いた事はスピントーンで攻撃を仕掛け来ただ、危うく負ける所だった。

訓練開始から既に、2時間が経っていたマスターは他脚をケンタウルス以外全て撃破している……しかしそろそろマスターは魔力の消費が激しく、なって来ている……限界は近いだろ？……僕はルースさんとの勝負を付ける事にした。

『焦つるのか？フェリオ』

気付かれた？

「ええ……でもマスターの救援には、貴方を倒さないと行けない。」

駆け引きでは無く本心を言ひ。

『なら迷うな俺だけ……倒せばいい。』

確かにそうだ。

「全力で倒します！」

ルースさんとの戦いは、激しかった互いに決定的な、攻撃を繰り出せずには膠着して来た全くお互い隙が無い。

遮蔽物を利用しながら、攻撃を互いに繰り出す。

僕は一つの賭けに出た。

『また隠れたのか、フェリオ……何！？』

そう僕は遮蔽物を駆け登り、ルースさんの真上に飛び上がるそして魔弾を真下に撃ち込むしかし、ルースさんはバックで素早く後退して反撃して来る。

ルース機の周りを走りながら様子伺う、向こうもこちらの攻撃を警戒して撃つて来ない。

『なあ、フェリオそろそろ……』

「はい、決着を付けましょうルースさん。」

その時、僕達の敗北を知らせるアラームが鳴り響く……マスターが敗北したのだ……

『これにて訓練を終了する。』

カレンさんの声が無情にも響き渡る。

『フヨリホ……今日はオレ達の戦いは引き分けだな』

ルースさんが僕に、残念そうに言つくる僕も彼に自分の気持ちを伝える。

「ゴメンね、フヨリオ君。」

マスターが僕に謝つてくる、胸ねあたりが青く染まつていた。

「僕もあのトラップを見抜け無かつたんです、ごめんなさいマスター」

とマスターに謝つたそこえ、副局長が皆を連れてやつて来る。

「皆さん訓練」苦勞様でした、キサラギ隊長とフェリオ伍長お疲れ様です。」

僕達に言葉をかける、副局長でも表情は厳しい……

「まずフューリオ伍長……瓶はあるのトランプをもつと注意していれば見抜けましたね」

「はい……副局長……」

確かにそうだ、トラップだつて注意していれば見抜けた。

「つぎにキサラギ隊長。」

「はい……」

「もう少しフューリオ伍長と連携を、上手くしていればケンタウルスを倒せましたね。」

「そうかー副局長は……」

「貴女達は見事なチームプレーが出来ます、しかし自身を危険に晒し過ぎです！」

全員がその声にビックとなる。

「もう少し貴女達は、仲間を頼るべきです今のままでは貴女達は勿論全員が死にます！」

……言葉が見つからない。

「後は自分達で答えを見つけて下さい、以上解散」

そして今日の訓練は終わった。

\* \* \*

イリア・キサラギSide

隊長とフェリオの訓練から、三日立つた。

フェリオ君は零式戦車隊のルース隊と特訓の最中や何でも、あの後互いにライバルと宣言したまあ……別に止める必要無いし一種のじやれ合いかな？。

そんな事よりカレンさんから、隊長達の戦闘データがハッキングで盗まれたって、連絡があつた今わたしとエレノアさんと一緒に第一研究部に向かっている。

「遅くなりました。」

「何があつたや、カレン姉さん？」

実験室兼オフィスに入る。

「済まないな、忙しい時に。」

カレンさんが、事情を教えてくれた。

「盗まれたデータは、三日前の戦闘データ特に、キサラギ隊長のデータが主だ！」

「騎士団のセキュリティは要塞並やでー外部からは……」

「不可能ですね……」

「可能性はゼロではないが……恐らくは」

「内部ー?でもどいつもって……内部の監視は厳重なのに。」

「スパイダーの一機からだ」

「「ー?」」

「スパイダーに細工……いつの間に?私は混乱してしまった。」

「調査して分かったのだが……スパイダーのブラックボックスが抜き取られていた。」

「す……いや、アクション映画じゃあるまいし……」

「エレノアさんがカレンさんにツッパリを入れる。」

「もう一つ小細工があった、盗聴機が幾つかあった。」

「「盗聴機ー?」」

「盗聴機だなんて……誰が……」

「それなら、まだあるぞー一番私の腹の立つ事がな!」

そう言つて、カレンさんが、ワナワナと肩を震わせる……

(何だろ……カレンさんが怒る事なんて……)

「それは……これだーつ！」

と勢いよく、机に置かれたのは……

「フェリオ君？…とは違うわね……」

「近いけど……似てへんな」

「こんな、こんな、物をーーー！フェリオと呼ぶなーーー！」

思わず、ビックとなつてしまつた。

確かに……フェリオ君とは違う、頭は狐・胴体が狼・尻尾は狐……  
そして足は象……だつた……

フェリオ君が見たら……

(こんな不細工なのは、僕じゃーつ無い！)

と怒り狂う姿が頭に浮かんだ……

カレンさんの怒りは収まらない火山でも噴火したみたいだ。

「盗聴機がなんだ、ハツキング！？面白い私に対する宣戦布告だつ  
そんな物は、しかし私の愛しのフェリオ君人形は、こんな不細工な  
物ではない……だいたい目が豆粒とは何だーつ、私が作った愛しの

フェリオ君人形の目はもつと、あにめちっくにしたぞー！しかも「ん  
な紛い物に盗聴器を仕込むな　っ。」

と延々とフヒリオ君人形について、熱く語る…。

「そう言えば、カレン姉さん」

「何だ？」

カレンさんの話を遮り、エレノアさんがカレンさんに、関係の無い  
話をす。

「その……ラブリーフェリオ君親衛隊てのが、有るとか噂で聞いた  
んやけど」

「フツ……確かに初代会長は私だ！」

「ア」「ギな事はしてへん？」

エレノアさんがカレンさんに詰め寄る

「入会費は100ゴールドからだ、会員証を見せてやるわ」

会員証はアニメの魔獣フェリオ君がSDキャラで表情されていた。

「Jのほかにも、副業でフェリオ君グッズやDVD等を正規ルート  
で販売している」

フェリオ君グッズやDVDいつの……間に。

「フェリオにお菓子をおこして、交換条件で協力してもらつた」

フェリオ君後で歯医者さんに行こうね

「エレノアさん、カレンさん済ません私急用を思い出しました失礼  
いたします。」

とフェリオ君の所へ大急ぎで向かう。

\* \* \*

エレノア・アリアドネSide

フェリオ……災難やな……

「カレン姉さん、もうイリア隊長行つたで。」

「フェリオに後で私から謝つておこう。」

一人で少し溜め息を吐ぐ。

「カレン姉さん、ハッキングの件やけど……めぼし付いてんの?」

「ああ……四人当てはまるな……」

四人つまり、カレン・リフィア・清音・後……性悪 やな。

「私・リフィア・清音は、この件から、除外される。」

「その根拠は？」

取りあえず、事情調査みたいやなと思ひながらカレン姉さんの回答を待つ。

「スパイダーのデータ解析は、私と清音が行つて此処に居た、ブラックボックスから情報を集める最中だ、リフィアはキサラギ隊長の定期的なメティカルチェックの最中で、ハッキングなんてしている時間が無い。」

そうなると……後一人は性悪やな……しかしそれもカレン姉さん自ら否定した。

「残念だが……性悪にもアリバイが有る……」

「アリバイ？」

「性悪の戦艦ダーク・ウイチ号はその時哨戒任務中だ。」

何や……降り出しに戻つてしまつたな……

時計を見ると、こんな時間か……そろそろ副隊長が来る時間や。

「カレン姉さん、悪いわそろそろ副隊長が来るんよ。」

「やうか、済まない。」

「かめへんよ、それじゃつづけへわ……」

そう言つて部屋を出る、副隊長着任をもつて第1-6騎士団【ミコト】

ージュ・ウルフ】は正式に稼動する……幻影の狼か……だけど幻で終わらせへん絶対に……そう決意を秘めてうちは隊長室に向かつた。

\* \* \*

? ? ? Side

暗明かりの部屋の中で、モニターの中の人物と会話をしている声からして、モニターを見ているのは女性と伺える、またモニターの中の人物は男性だ。

「戦闘データだが、かなり良いものだった」

「それで無ければ困ります、解析班に混じってこちらの回収班が活動したのですから」

ブラックボックスの回収は内部に潜入した、回収班が行いハッキングは彼女が行つた。

「流石だな……人形使い。」

「自分の人形等割と簡単に造れますわ。」

そう彼女は戦艦に乗艦せず、変わりに自身の人形を戦艦に乗艦させた。

「まさか連中も自動人形だとは思つまい?」

「逸れともワザと」ちらりと泳がせてくるのか？」

男は彼女にぐきを刺す。

「所でラボはキサラギ隊長を、無傷または殺さずに回収して欲しい  
そうだ……」

「あの女をそれは無理ですわ！それならスパイダーに細工をして事  
故を装つた方が……」

「それでは、貴重なサンプルが台なしだ……」

「ええ……軽い冗談ですか」

彼女が言つと冗談には聞こえない。

「所で、フイーナが副隊長に着任したそうだな？」

「小娘同士精々、馴れ合つて欲しい物ですわ……」

皮肉と敵意をもつて彼女が答える。

「狂狼と化け猫を、そちらに送つておいた。」

「……」

狂狼と化け猫正直余り係わり合いに、なりたくない彼女はそう心中で思つた。

「そろそろ、時間だな。」

「これ以上は連中に嗅ぎ付けられます。」

「無断で回線を仕様しているのだ、そろそろタイムアップと考えるべきだろ……」

「それでは、我等が真の主の為に……」

「世界を真に導く王の為に……」

そして回線は切れた……

第8話～イリアとフニリオの訓練～（後書き）

描写を一部修正しました。

- - キヤラ紹介2 - - (前書き)

フィーナ達のプロフィールが完成しました。

- - キヤラ紹介2 - -

フイーナ・ローズウッド

髪・薄い金髪

瞳の色・紫

性格

以前は明るく優しかった。  
今は人を遠ざけてる

武装

銃剣

シューティング・スター

魔導弾と実弾の切替可能

特長  
ソニック・ブームを放つ  
片手でバイアネットを撃てる

補足

エレノア・アリアドネ

栗色のショートボブ

(注・調べるまで分かりませんでした)

瞳：緑

性格：普段は砕けた人柄  
怒ると手がすぐに出る

武装

鉄扇と父親仕込みの拳法

鉄扇で演舞

補足

鬼族の父親と魔族の母の間に、産まれた混血。

父親・母親共健在で、現在母親と一人暮らし。

父親は、見聞を広める為に一人旅をしてます  
たまに、よく分からない  
お土産品を、旅先から送つて来る。

アルト・ファルゼス

銀色のショートカット

瞳：水色

武装

無名の刀（夢幻流）

居合の使い手

九本同時の斬撃：幻龍

（フハイトの燕返しを、アレンジしました）

性格

穏やかだが、時には厳しい事も言つ。

サラ・フェンリル

髪型：紅いロングヘア

瞳：蒼

武装

ロングソード二刀流

魔力の壁（防御）

碎牙（牙突を参考にしました）

性格

穏やかだが厳しい

根が真面目過ぎて、怠け者が嫌い。

イリアに剣術を教えている。

- - キャラ紹介2 - - (後書き)

頑張つてファイーナ達の話を書きます。

## 第9話～副隊長フイーナ～（前書き）

今回はフイーナ&エレノア視点重視です。

次回もフイーナ&エレノア視点で行います。

誤字と描写を直しました。

## 第9話 副隊長フイーナ

フイーナ・ローザリアSide

薄い金髪のロングヘアのエルフの少女が、第16騎士隊ミコラー  
ジュー・ウルフ隊隊長室に向かう。

制服は旧エルザリア紋章皇国の親衛隊の上に、大聖堂騎士団の白い  
マントを羽織っている。

彼女の紫の瞳は暗かつた……

(私は……一体何をしているんだろ……?)

彼女はかつて自分に起きた出来事を……思い出していた。

『いたぞーっ、じつちだーっ!』

『この裏切り者め!』

『構わん、撃てーっ、撃てーっ!』

兵士達が私を追つて来る!。

『殿下……アルバート殿下!……』

私の守るべき、主アルバート殿下……幼い頃……私を妹様に優しく

接して、くれた方、彼は今私の前で血まみれになつて、倒れていた。

『で、殿下……アルバート様……』

『無事……だつ……たん……だね……フィーナ……』

横たわる殿下の手を私は握りしめる。

『殿下……今お助け致します……』

私は涙ながらにさう、伝える……しかしアルバート殿下の口から、血がこぼれる……

『わ……たし……は……もう、いい……か……ら、は、早く……逃げなさい』

『貴方を置いては行けません！何処にも行きたく有りません！』

私は首を左右に振つて子供の様に泣きじゃくる。

その後……私は反逆者として、処刑される筈だつた……逸れでも良かつた……アルバート様の側に行けるのだから……と思っていた、その後私はフェンリル・ナイトに助け出せられた。

ふと気付くと、騎士隊隊長室から半獣人の青い髪の少年が出てくる、何故こんな所に子供が居るのだろう……彼と目が合つた。

「お姉さん、こんなに泣いてます。」

彼は会釈をして挨拶をして来る。

「ここに……ええと何は？」

彼は会釈をして挨拶をする、彼は第16騎士隊「ミコラージュ・ウルフ」のエンブレムの刺繡幻狼が入った黒いマントを羽織っている、彼も関係者だろうか？

「フエリオ・キサラギ伍長です。」

「フエリオ、この子が？」

隊長か参謀が居るか聞かないと。

たしかミコラージュ・ウルフは軍階級なんて意味が無い」と、副隊長が言ついた……

「えーと、フエリオ伍長？」

「何でしょか？」

「隊長はいますか？」

（ううう、そんなに覗き込まなくでも……）

「マスターはサラ將軍の所です、僕は……マスターに叱られて……罰として訓練に……」

「罰？訓練？どういった事だろ？……

ドアにノックをして隊長室に入る。

「失礼いたします、この度副隊長を任命された、フィーナ・ローズウッドです。」

私は部屋の隊長執務席の所まで、進むと立ち止まり、敬礼をする、ベレー帽をかぶったショーボフの女性騎士が居た、白いマントに縁の制服を着ている彼女も敬礼をしてこちらに返礼をする。

「うちが、この第16騎士隊〔ミュラージュ・ウルフ〕の参謀をしている、エレノア・アリアドネや。」

エレノア・アリアドネ……あの国防軍魔神討伐戦でかなりの犠牲者を出した作戦を反対して、追放同然で騎士団に入った元防國上級士官が目の前に居る。

「うちの顔に、何かついてんの？」

「い、いえ……ただ、以外とお若いと思つただけです。」

（かなり失礼な事を、言つたかな私？）

彼女は少し苦笑して、から成る程なあ……と呟いた。

「元国防軍の上級士官の肩書の事やな、あれ実は親の七光り何よ。」

「七光りですか……でも……」

そつには見え無い、彼女はそんな雰囲気をもつていた。

彼女が言つには、母親の一族の影響力が強かつた、為無理矢理階級

を上級士官に押し付けられたそうだ。

「うちが働ける所なんて、限られとつたさかいな」

「あつ、もしかして、上級士官やつたからひょいとして……物凄いお婆さんと思つた?」

少し興味がわいただけです。

「それから此処は、階級なんて意味無い物やから気楽にしてや。」

「それは、局長から聞いていましたが……」

何故階級が意味の無い物? 何故だろ…… そう思う自分がいた。

「分からんのも、無理ないな此処の騎士隊は、半官半民の混成部隊なんよ……」

「成る程それで階級が無意味と……」

「うん、とエレノア参謀は話を締めくくり隊長執務室を出ようとする。

「おの……どう？」

「皆の訓練観に行かへん?今やつたら、フヒリオと隊長達の戦い生で見られるで。」

ぐいぐいと私の腕を掴んで引っ張つて行く。

「まあ早う行かんと、終わって仕舞うで！」

「イタイ、イタイ、分かりましたから……腕引つ張らないでくださいーい！」

私はエレノアさんに無理矢理腕を引っ張られて訓練所に連行されるように連れて行かれた。

訓練所には銃騎士隊とフヨリオ伍長の姿があつた、全員が私達に気が付き敬礼をする。

「皆樂にしてや、今日からうちはこの隊に配属された、フィーナ・ローズウッド中慰や彼女の隊の役職は副隊長や、皆よろしく頼むでー。」

「「はい！」「

何だか……」の雰囲気は悪く無いが……今の自分には必要が無いかも……

「フィーナ・ローズウッド中慰です、この隊の副隊長を拝命しました、皆さんよろしく頼します……」

隊員達に挨拶を済ませる。

「それじゃ……訓練を始めるでー銃騎士隊は何時も通り配置に着けー！」

銃騎士隊が配置につく。

「フヨリオは何時もり頼むでー！」

「はいー。」

そう言つとフェリオ伍長が魔獣に変身する。

エレノア参謀が銃騎士隊に厳しく、驚く指示を出す。

「ええか……白線の中にフェリオを絶対に入れたら、アカン、もし入れたら……アンタ等全員フェリオに食い殺されると思え!」

「「はい参謀殿!」「

(ーー)

思わず私は息を呑む……

「フェリオ聞いての通りや、銃騎士隊全員食い殺す氣で突こんで来るやー!」

《了解です、エレノア参謀》

エレノア参謀が合図を出す!銃騎士隊が一斉に銃を構える……そして、フェリオ伍長が走り出す。

銃騎士隊が先にフェリオ伍長に仕掛ける。

(す、凄いフェリオ伍長も銃騎士隊も……正確にフェリオ伍長を狙つて撃つてる。)

フェリオ伍長は驚く事に全弾を完全に避けて、白線目掛け突進して

いく。

『よーし、バズーカ及び迫撃砲！撃てーつ！』

砲弾がロケットが次々とフェリオ伍長に向かつて放たれる、その時エレノア参謀の、罵声が通信機越しに流れ飛ぶ。

『砲術隊何やつとんねん？ちゃんと、フェリオを見てんのかつ、砲撃止めいや、銃弾煙で何も見えとらんやろー』

確かに銃弾煙で周りが完全に煙りで、視界がきかない……

そして、フェリオ伍長が白線を超える……訓練はフェリオ伍長の圧勝だった……

「アホつ、誰がド素人の真似せえと言つたんやー」

「「も、申し訳ありません！」」

エレノア参謀が凄い顔で銃騎士隊全員を、怒鳴り付ける。

「はあ……もうええわ、後で皆揃つてへばるまでグランド走つてきい、解散やー！」

銃騎士隊はグランドに向かつて行く、フェリオ伍長は、苦手と言いながら今日の訓練のレポートを書くために、騎士隊の自室に戻つて言った。

「ああ、副隊長驚きました？」

少し所がかなりビックリしました……

一人で今、私達はイリア隊長とサラ将軍のいる修練場に向かっている。

「さうきは……ごめんな副隊長。」

歩きながら、エレノア参謀が話しかけて来る。

「い、いえ厳しい方々には慣れています。」

「副隊長……一つ約束してくれへん?」

急に足を止め、私の方を振り向くエレノア参謀、その眼は鋭く真剣な物だった……

「絶対に何が有つても、つちりを信じて欲しいんや。」

えつ……エレノア参謀と皆を信じる……どうこう事。

「それは……どうこう事じょうか?」

「失礼やけど副隊長は、うつよつ危なそりやからや……違つか?」

私が危ない……その一言に頭に血が上る……

「うちの言つてる事気に入らへんか?ええよ……うちも副隊長の事気に入らへんから、そんな暗い目した人に隊長をして、皆を預ける事でけへん!」

「そこまでにして下せ」エレノアさん。

突然の声に後ろを振り向くと、ヴァイン副局長がいつの間にか立っていた。

「副局長……いつからそこには？」

「イリア隊長とサラ将軍の鍛練を見学しようと思つていったら、エレノアさんの怒鳴り声が聞こえたのですから。」

「見られてたんか副局長？ 何か白けたわ、それじゃ副隊長さつきの事、心の中にでも留めといてじやあ、つち先に行ぐで……」

片手を振つてエレノア参謀は私達を置いて修練場に一人で向かう、残されたのは私と副局長だけだ。

「エレノア参謀……僕達に気を使つてくれたな。」

「あつ、あの私……」

彼に、いい訳をしようと考えていたらいきなりヴァインが私を抱きしめる。

「！？」

「フィーナ……すまない。」

「／＼／＼なつ、何がですか？ 副局長」

私は訳が判らなくなつて、混乱する顔が少し赤くなる。

「エレノアの気持ちと君の思いを、もう少し考えてから、配属を決めるべきだった……」

「副局長……苦しいです……放して下さい……」

（いつもさうだ、貴方は『自分のことよりも私たちの事を優先してましたね）

すまないと言つて、私から距離をおく副局長。

「エレノアだが、彼女は昔国防軍にいた……その時に魔神討伐戦で、数多くの兵士が、無謀な突撃が原因で多くの兵士が犠牲になつた……」

……

「それも、あの国防軍のバスク中将が彼女に全責任を押し付けて彼女のせいにした」

「……」

エレノアさん……彼女にそんな事が……あつたなんて。

（後で彼女に謝つておこう……）

「さあ、行こうか皆が待つていてる。」

湿っぽい空気をふり払つよつて、ヴァインが宣言するそして一人は修練場に向かう。

\* \* \*

? ? ? S.i.d e

薄暗い廃倉庫の中で、三人の人物が密かに、密会をしていた……

「ケケケツ……さてこれで全員か？」

身長一メートルの大男がドラム缶に腰をかけて話し始める。

「待ちなさい、指定時刻にはまだ時間が有ります。」

発言したのは以前騎士団本部で、ハッキングをした女】だった。

制服でかなり上級の騎士だと分かるが、顔をフード付きのマントで深く隠していた。

「キイシシシシシ遅れて来る奴なんて、口クナ奴じやないねえキイシシシシ。」

そう言つたのは、フードを深く被つて顔を隠している獣人の女だった。

足音が近づいて来る、最後に現れたのは、以前ハッキングの報告とキサラギ中尉の状況報告をやり取りした国防軍の将校だった。

「待たせたな。」

「クククッ もう少し遅かつたら、アンタの首を土産に貰う所だつた  
ぜ……？」

二人は裏の世界では名の知れた暗殺者だ……

獣人の方は、砂漠諸国を中心に破壊活動を行っている。コードネーム通称【狂狼】そして、女の方は、極東諸国連合の暗殺者通称【化け猫】一人とも、今回初めてこのヴァルゼラート公国に潜入した。

「世界再建議会から指令だ。」

「何と言つてきただの？」

「まあ予想つくわなあケケケッ。

二人は狂気を溢れ出しある一人は、さつさと此処から、帰りたがつ  
ている。

「イリア・キサラギを魔王に覚醒せし……だ。」

男は淡々と言つ放つ

( もう少し使えると、思ったのだが……それもやむを得ないか )

「では誰がそれを、やれと？」

「狂狼と化け猫に任せるとある……」

「気前の良い話しなこいつてクククッ。」

「具体的にどうすれば、良いのニヤー キイシシシシ。」

三人がそれぞれ質問をする。

「取りあえず、部下を一人始末しろ……それとフィーナ・エレノアを片付けろだそうだ。」

目的伝えると彼は何処かに去つていった、女もまた狂気に、これ以上付き合いたくないのか何処に行つた。

「じゃ最初は俺にさせろクククッ。」

「そう言つ約束でニヤしたねキイシシシシ。」

狂狼が廃倉庫から出て行く、彼女は昼寝を決め込んだ。

\* \* \*

## フィーナSide

修練場では、エレノア参謀・サラ将軍そして・初めて会ったイリア隊長が、サラ将軍と剣を交えていた。

「右からの攻撃が遅い！」

「はい！」

「左がガラ空きだー！」

「はいー！」

イリア隊長は熱心にサラ将軍の双剣をかわし、またわ防ぎながら、反撃を狙う。

そして隊長の剣が弾かれる。

「フム……だいぶマシに、なつたなイリア隊長。」

「はい……フェリオ君のサポートが無ければ……」

「確かにフェリオのサポートが無ければ、私に一刀流などさせることも無い。」

サラ将軍の厳しい言葉が続いている、そこにフェリオ伍長が遅れてやってきた。

「マスターお疲れ様です」

「ありがとウーリオ君。」

そう言いながら、タオルや、飲み物をイリア隊長に渡していく、こうして一人を見ていると、本当に中の良い姉弟に見える。

「副隊長さつきは……その……『ゴメンやで、さつき此処に来る途中に、ローザリア分隊長と副隊長の事話したんよ。……そしたら、……』『メン、少し無神経やつた。』」

「別に……『氣にしてしませんさつきは私が悪いのですから……』

「せや、こいつペニヒルと手合わせやつてモジハヘンやうひか?..」

「…………えつ?」

手合わせて……私とエレノア参謀が……

「エレノアさん……無茶苦茶です、エルザリア紋章公国親衛隊の実力は、大陸で1・2を争います!」

「ええ……エレノア参謀ちよづらいドシょう。」

「せやね、言つとけどこれケンカや無いんやで?」

私とエレノア参謀が視線をぶつけ合ひ、周りは水をしつたように静まりかえる。

お互ひに武器を構える。

「うちは取りあえず、訓練用の警棒でええか?」

「私も余り剣を持った事は有りません、銃剣が主な武装ですから…」

「…」

お互に距離計りまわいを取る…そして同時に仕掛ける。

「はああああつー！」

「やああああつー！」

リーチ面では私が有利だしかし技や素早さでわ彼女の方が私より上回っている。

「ツツ…なかなかやりおつくな！」

「やああああつー！」

アクロバチックな動きで、私の攻撃を完全に避ける。

(成る程……素早さと冷静な判断力……並ば逸れを逆手に取る…)

私は攻撃の速度を技と落とす、彼女のペースが乱れる。

「成る程そういう手も……ありやな……？」

「余裕……ですか？」

「いや……ハルザリアの親衛隊相手に余裕なんかあらへん。」

こちらも少し疲れてきた向こうもおなじだろ。

「じゃ……終わりにしょか?」

「はい……おしまいにします。」

二人同時にとどめに入る私は彼女の胸に、そして彼女は私の首筋に  
それぞれ武器を突き付ける!。

結果は相打ちだった……

\* \* \*

エレノア・アリアドネSide

副隊長との試合は引き分けやつた。

まあ一種のケンカやつたなあれば……勿論サラさんに『修練場で喧嘩とは何事だーっ』て、怒られたけど副隊長がうちの事庇ってくれたんは、以外やつた……結局サラさんにグーを一人で頭にくらったけどな。

報告書に田を通していたら、ディスプレイにうち宛ての呼び出しが  
あつた。

「えーと差出人は……ジエスやで?」

ジエスはうちが保安課に居た頃から使つてた、情報屋や……でも実働部隊に異動になつてからじご無沙汰やつたな、取りあえず、回線を開ける。

「久しぶりやな、ジエス。」

『エレノア嬢ちゃん相変わらず元気そつだな?』

「挨拶にきたん?」

『いや……嬢ちゃんに忠告だな今日は……』

(忠告?…どうゆことや?)

『狂狼と化け猫が来た……』

「なんやで、あんな化け物……一人やで……一体どうやつて?」

あんな凶悪犯簡単に入国出来るか。第一すぐに入国審査でアウトや。

『それが……正規のルートで入つて來た。』

「そんなアホな事……」

そいつ言いかけて顎に手を掛けた考へる……。

(入国審査は厳重やし、必ず最初にチェックが入る……となると……)

……答えは一つやな? )

「で……誰が手引きしたん?」

『それは俺にも、サッパリだ?』

ジェスは情報収集に掛けては、ピカ一やとなると。

「やつらかラボやなーそれで他に知らせた?」

「わつ嬢ちゃんの古巣にはまつ先に知らせておいた。」

やつぱりアンタは頼りになるな。

『嬢ちゃんも気をつけろよ……』

「?」

『どんな事件か知らんが昔の事件調べてみるだろ?』

「バレた?」

カンの鋭さも敵わんな、アンタには……

「何で教えてくれるん?」

『得意先の嬢ちゃんは、良い客だからな……客が減ると俺の稼ぎも減るからな……』

「ありがとやで。」

『詳しい事は送ったから後で田を通してくれ……』

「報酬は？」

ジエスは生糀の商売人やさてどんな値段を……

『今日はタダにしちゃぜ。』

「なんでや？」

『理由は良い客だからな。』

そう言いつて回線が切れた。

さてと、データが送られて来たな…… どれどれと

〔魔人兵士計画報告書〕

やで！？ジエス…… アンタ何処まで知ってるんよ！  
今はそれ所やない……

報告ファイル

魔人化は完全に失敗……

被験体の精神状態が不安定になり暴走する、当時 施設職員500人と国防軍約一個連隊を1時間たらずで全滅させる……

被験者名

＝べ。

アカン……データファイル壊れとる……まあ一種の収穫はあつたな。

断片的やつたけど……被験者は【狂狼】や……

さて疲れたから早づ寝よか……化け猫……嫌な名前聞いたな……寝て忘れよか……

## 第9話～副隊長フイーナー（後書き）

狂狼のモチーフは、GIGHネレーションの参加作品〇〇のサーシュスさんを参考にしました。

化け猫はメルブリのワカキアを参考にしました。

一部描写を修正しました。

## 第10話～狂狼と化け猫～（前書き）

エレノア視点・フィーナ視点の後半のストーリーです。

一部表示を変更しました。

一部描写を変更と修正しました。

## 第10話／狂狼と化け猫

『一、後退命令を……』

『ぐああああつ』

『し、司令卑う撤退命令を……このままじゃ前衛が全滅してしまいます。』

『全陸上戦艦砲撃用意!』

『……司令駄目や味方まで……』

うちの叫びも虚しく砲撃が地上艦から放たれる……そして……うちのせいで大勢の兵士が死んだ……

アレはうちのせいや……うちが……見殺しにしたんや……

『そひ……全ては貴女のせい……紅姫。』

懐かしい声に振り向くとサクヤ姫が顔を伏せて泣いておつた……

「サクヤ姫……うちは……」

『私を見捨てて、國を棄て……ただ逃げ出した……貴女に……私の辛さがわかる……紅姫!』

白く長い髪が逆立ち純血の九尾の尻尾が全て広がる。

「ち……サクヤ姫……つ、つかは……」

『来ないで……』

髪を振り乱しつゝ襲い掛かつて来るサクヤ姫……

「うひ……こや……私は一度も姫を見捨てた事はありません。」

姫の両手が……「うひの両頬を掴む……

「アタシの顔をじるな風にしたのは……紅姫ねえさんだよ……キシシシシッ。」

「お前は……は、放せはなんかない、化け猫つ。」

「一緒に地獄に行こうよ……ねえれど……キシシシシッ。」

(やめーつ、放せーつ……)

キシシシシッ、キハハハハはははーつー

れる……今度こそ……一緒に

「うああああつー」

がばつと布団を引き離しステンレスのコップに水を入れ……一気に飲み干す。

「はあ……はあ……はあ……うちを殺して……来たんか?化け猫……

……クソつー」

自分でも怒りに歯止めがかかるん……

「はあ……はあ……うあああああーっ、早う殺しここ化け猫が一つ  
…」

コラップをドアに投げつける！ガシャンとコラップがドアに当たって跳ね返る。

「くくくく……はははっ、あはははーっ…」

両腕で脇腹を締め付け、ただ狂った様に……つらは笑い続けた。

ドアをノックする音がした。

「Hレノア参謀……大丈夫ですか？入りますよ。」

フィーナ副隊長の声に思わず、ビックとなる……今は真夜中の零時や……かなり……「近所迷惑してたな……て、そんな事考える場合か。

(しもた……今隣の部屋はフィーナ副隊長が使っているやつた……)

アカン入らんといと……前にドアが開いた、非常用のロック解除のコードを打つて入つて来る。

「あ……ちよつと待つて欲しかつたで……副隊長。」

「でも……Hレノア参謀の部屋からものす」音が……

仕方が無こうちは副体長に今までの事全部話しす事にした……

「なあ副隊長……うちの話を聞いて……くれへん……少しな”」  
なるけど……」

「ええ……エレノアさん頼みなら……喜んで。」

「初めて……名前で呼んでくれたね？」

「／＼／＼」

「じゃあ、話すわ……うちは昔、大和王朝に住んでたんよ今から  
10年まえやな……そんな頃サクヤ姫て言う九尾の純血の姫様がい  
てな……うちは姫様のお守り約を仰せつたんよ……白髪の可愛いお  
姫様やつた……」

白髪の長髪に狐耳そして紅い瞳……うちは正直この姫様にお支え出  
來た事がうれしかった。

「その……サクヤ姫と言つ方はエレノアさんにとってどんな方でし  
た？」

「せやね……笑わんといでな妹みたいに……思つていた……アイツ  
がちょっとかい出すまではな……」

そう……うちの幼なじみの猫又ミオこいつが姫様にちょかい……い  
やあれは、わざとやな……うちは姫様に害をなそうとする、ミオの  
顔に爪で大怪我を負わせた……あれは最初から仕組まれた物やつた。

「そんな事が……あつたんですか……」

「そん時たまたま姫様の前やつたのも運が、無かつたで……」

そして……「ちは姫様に仇なした者として……裁かれる……父がいなければ、今頃は死罪やな……あん時、本当父と姫様には感謝してる、一家共々国外追放してくれたんやから。

「温つぽこ昔話はこれで終わりや。」

「うちはそう言つて話しき替よつとした……

「うう……ううへ……つ、」

「どうしたん？お腹とか痛いん？」

いきなりフィーナ副隊長が泣き出した。

「い、いえ……す、すみません……」

「まあ、時間も遅いし早つ寝よか？明日は早いで。」

「分かりました……エレノアさん……ではまた明日……

うちは彼女をなだめながら、隣の部屋まで彼女を送った……世話の  
係る副隊長やな……

\* \* \* \*

しかしこんなに遅くなるとはな……いくら弟のカオスと剣の修練とは言え、ほどほどにしておかなければ……少し疲れたな……ムツ  
……

何者かの気配を感じる……まるで獰猛な獣の様な……嫌な気配だ。

「よハ、」こんな時間まで！」苦労な」つて……ケケケ。」

突然背後から声が聞こえる。

殺氣……反射的に後ろに向かつてナイフを三本投げつける。

「力力力カツ！甘いぜ、そら、そら、そら、」

素早い動きで自分と同身長の大剣を振り回して来る、私は直ぐに強敵と判断して、二刀流を構える。

「ぐつ……貴様！！」

激しい斬撃を防ぐのがやつとだーしかし私とて、素直に負ける積もりは無い、

「はああああつー！」

「そら、そら、そら、ケケケ！」

大剣が唸るそれをかわす、こんな奴が大聖堂騎士団に侵入しただと……セキュリティーは何をやっている。

大剣と双剣が激しくぶつかる、脚に力を入れてひみどじまるが圧されてそのまま後ろに吹き飛ばされそうになる。

「ケケケ……良いねえ殺しがいが、ありそうな狼だなあケケケ。」

「貴様何者だ！？」

その時背後に殺氣が増える……

「困るニヤー」にいさん勝手に別の人襲つて……キッシシシシ

「ああっ、たまたま有名人にサインしてもらおうと、思つてなめてめえの血でなーつ！」

くつ……避けきれない……情けない……これまでか……

その時数発の魔弾が襲撃者達を襲う。

「マジック・ミサイル！」

「ライティング！」

声のする方を見ると、フェリオ・リフィアが居た。

「リフィア君では無理だ下がれ！」

「大丈夫です、援護位なら出来ます！」

仕方の無い二人だつ、まずは……この人狼から倒す。

「しかし……あまり無理はするなつ」

「数が増えても……構わねえよ……ケケケ……まとめぶつ殺すからよ……ケケケ……」

対峙したその時、リフィアにフードの侵入者が襲い掛かる、クツ……間に合うか、しかし人狼に邪魔をされる、リフィアにガギ爪が襲い掛かる。

「キヤーッ」

「リフィアさん危ないつ。」

「ふえ、フェリオ君！？」

「フェリオーっ」

フードの暗殺者のガギ爪がフェリオの身体を切り裂く。

「ぐああああつ」

「いやあああつ」

フェリオが崩れ落ちる。

「あさみああああつ」

目の前の人狼と素早く間合いをとると、フード目掛け 衝撃波を放つ。

「ふぎやああああつ」

まともに衝撃波を喰らひつフードの暗殺者！素顔があらわになる。

その顔には右頬に引っかかれたような、傷があつた。

「キシシシ……見たな……？」

「オイ、引き上げだ……」

素早く襲撃者達はその場から消えるように姿を消した、しばりくして……複数の足音が聞こえる……

そのあとやつて来た、保安隊に警備と警戒を任せ泣きじやぐるリフィアを連れて、フェリオをカレンの元に運んだ……自分の無力さに苛立ちを覚えた……

\* \* \*

いきなりサラさんとフューリオが教わると聞いて今、‘つか’全員がカレン姉さんの所に居てる。

「カレンさん……フューリオ君の容体は……？」

「大丈夫だ、キサラギ隊長わづかながら急所は外れた流石は……フェリオだな後五週間もすればいつも通りだ。」

「隊長……言ひにくいんやけど……フューリオやサラさん襲つた連中……うち知つてる……」

(隊長……「メン……つち隊長のこんな……辛そうな顔もつ見とう無いんや……悪いけど全部話すで……）

「ヒレノア……さん……まさか貴女……？」

隊長の顔色が見る見る険しくなる……

「此処じや、フェリオの傷に悪い……場所変えよか……」

\* \* \* \* \*

会議室に入る隊の全員が既に集まつて居る、一番表情が厳しいんは  
……隊長や……まあ平手打ち位……覚悟しよか……

「言い訳は嫌やから全部話すは……隊長……」

「うちは知つてゐる限りの事を全員に話す……ただ隊長のい両親の事までは、余り調べられんかったな……」

「……Hレノアさん今の話の内用は本当の事ですか?」

鋭い視線でうちを睨みつける隊長に、無言で頷く。

「——ッ!!」

うちに飛んで来たんは、平手打ちじやあのうて……グーやつた……思いつきつづちは床に吹き飛び倒れる。

口から血が滲む手の甲で血を拭つ……

「……隊長……ゴメン……」

「Hレノアさん……教えてくれなかつた……聴よこれは……」

強なつたな……アンタ……それでこそ、うちの隊長や。

「大丈夫ですか……? Hレノアさん……」

フイーナ副隊長が駆け寄る、うちは片手でフイーナ副隊長を制して

一つの策を皆に提案する。

「なあ……隊長つむから提案が有るんやけど……聞いてくれるか？」

「うちは真剣な目で隊長を見つめる……私事に巻き込みたくなかったけど……手段は選んでる……時間は無い。」

手っ取り早く皆に説明したそしたら……全員が反対した……理由はリスクが高すぎるから……やて。

「ふふっ……あははははは。」

あまりの可笑しさに笑いが止まらなくなつた。

「ヒレノアさん、笑つてる場合ーー！」

両手を腰に当て怒る隊長に皆が頷く。

「ゴメン、ゴメン、あーー、こんなに笑つたの久しぶりや。」

「策の内用は笑えませんね。」

アルトが怒つてると雪より、むくれてる。

「アルチもう、うちは決めたんよ……あの化け猫とケリ着けるて……」

「…」

「ハレノアさん……隊長、私もハレノアさんの作戦に加わります。」

「フィーナ副隊長まで……しゃあ無い……娘やで全く……

とつあえず……化け猫共の住家を強襲やな。

\* \* \*

ミオ ハーデ

騎士隊を追放された、紅姫ねえさんの所に使いを送つて6田田やうそり……回りつかひ……口口サレに来る頃だね……キシシシシッ。

「五月蠅いですわ化け猫！」

紫の三つ編みの髪の毛を弄びながら……フード女はアタシを罵る。

「ケケケツ、おひ、おひ、お一人さん中のようじこ事で……」

「こやんがアタシ達のやり取りを、楽しんでいる。

「アタシも……こやんと回じーイヤーもつづいで、ハレノアねえさんを……口口セルから、キシシシシッ！」

フード女の使い魔の一匹が、ハレノアねえさんとフィーナのお嬢ちやんが来る事を告げる……わあ、楽しげ……殺し愛の時間 キシ

シシシシ～ツ。

\* \* \*

## フイーナ・ローズウッドSide

「狂狼がエレノアさんの仇敵と一緒に？」

「ああ……間違いないやろ？……多分裏切り者もそこさや。」

廃倉庫が並ぶエリアに来た、此処に来たのはエレノアさんと私だけの一人だ。

「フイーナさん……一つだけ言つとは、何があつても……化け猫とうちの戦いに手を出さんとしてや。」

「はい……エレノアもお気をつけ下さ。」

後は隊長達の到着まで時間を稼ぐ……絶対に。

\* \* \* \*

アルト・ファルゼスSide

「1番・2番・3番格隊は順次出動ッ、ランカスターへリにスペイダーザの搭載を急げ！！」

私はエレノアさんの会話を思い出した……

\* \* \* Side

『化け猫はうちが仕留める……だけど狂狼は別や、狂狼には……悪いけど……イリア隊長に戦つて貰う……』

『『……』』

会議室内に緊張が走る。

『それで……参謀はどうする？ フィーナ副隊長は？』

古参組のロバートさんがフィーナ副隊長達の案に難色を示す……当然です。

『フィーナ副隊長はうちトイツラの餌や。』

『それじゃあ……サメの巣の中に餌を抱えて飛び込みモンだ俺は反対だな……』

『確かにリスクは高い……しかし今がチャンスなんよ。』

『チャンス?』

全員が怪訝な表情になるエレノアさんは構わず、話しを続ける。

『つまりな……うちらの隊内で……うちとフィーナ副隊長が姿を消して見せてしかも、一人のこの連中のアジトに向かつたら……向いつけ……いつちが分裂したと思つ……いや思わせるんや……』

『一体どうやって?』

リフィアさんが不安な顔で質問する。

『簡単話しゃ隊長といひながら、喧嘩したと内部のネズミに教えるやう!』

『私も反対です……もしも一』

リフィアさんの意見を遮りエレノアさんが優しくリフィアさんに言う。

『リフィア君がフェリオの事で責任を一番感じるのは私にも十分わかる。』

フェリオ君はあの時夜遅くまで、頑張って報告書を作っていて、リフィアさんに手伝つて貰つた。

それが原因で、フヨリオ君は怪我をした彼が、魔王の眷属で無ければ命が危なかつだろ？……

『だからリフィアは今回はフヨリオの側に居て欲しいん、よこの意味分かるな？』

『はい……』

エレノアさんがリフィアさんを宥める、やがて強い意思の……いや決意をもって隊長に一つの決断を迫る。

『隊長……実はな危険やけど頼みがあるんよ。』

エレノアさんのその決意そして……隊長の決断に、会議室は騒然となつた。

\* \* \*

「アルト隊長補佐、出撃隊準備完了しました。」

「解りましたアリシア通信士では、ミコラージュ・ウルフ隊出撃！」

さて、フリオ君に傷を負わせた代償払つてもいいますよ、僕達も出撃をする。

\* \* \*

### フィーナ・ローズウッドSide

倉庫エリアをエレノアさんと歩いていく……エレノアさんから念話があつた。

(フィーナさん……周り囲まれると……気よ付けや。)

(はい……でも生氣が全くありません……不死系のモンスターでしょうか?)

確かに倉庫の屋根な影に隠れてる氣配がある……エレノアさんが念話で、相手を教えてくれた。

(今まであの性悪のスキルを軽視してた……ついのナスや……あの性悪上級の人形使いや。)

人形使い……主にゴーレムや自動人形を操る魔術師しかしこの数は

..... 100いや..... 300は居る。

(まあ..... うちらを一人殺すつもりやつたら....かなり評価されどる  
な.....)

(確かに化け物一人で十分ですね?)

いきなりエレノアさんが大声で叫ぶ、一体何を考えているのだろう.....

「「出で」」、「狂犬と駄目ね」」一つ...」」

あたりにエレノアさんの罵声が響き渡れる! しばらくして複数の人  
の気配がする。

「ねえさんひとすぎーつ人をバカネコ扱いなんて、キシシシシシッ。

」

「「ひるせいな..... フィーナか元氣そこいつて、ケケケケケツ」

狂狼の姿に殺氣が溢れ出しが私は、それを堪える私の役目は時間稼  
ぎだ、あ・ん・な・化け物に私では役不足だ.....

(フィーナさん死に急いだら負けやで。)

そう言つてエレノアさんが倉庫の屋根に、ジャンプする化け猫もそ  
の後を追う。

(はい、出来るだけ時間稼ぎをします)

「こきます、シユーテイングブラストーー!」

先手必勝で仕掛けるつ。

青いレー・ザー状の魔弾を放つ！しかし化け猫は飛び上がって避ける。

「うつ、嘘！？」

「ケケケツ……惜しかつたなつ。」

狂狼は大剣で私の攻撃を防ぎきった。

「はああああつ」

ソニックブームを放つ。

ジャンプをしてかわす狂狼。

「ハハハさて……何処から何処をどうして……欲しい……アッアッ  
？」

「「これでどう？」」

私は地面にシュー・ティング・スターの刃を叩き衝ける。

土煙と石の破片が大量に舞い上がる。

そして素早く片腕で狙い撃つ、数発の弾を狂狼に見舞う。

「きかねえな……そんな物話はなつ、ハハハハツ」

いきなり首を締め上げられた銃剣が腕からこぼれ落ちる、もがいてなんとか腕から逃れようとするが食いつかれた様に首を絞めつけられる……

「ぐああ、うひひひ……」

意識が薄れて行く不意にヒレノアさん達の顔が浮かぶ……まだ私死にたくないな……。

「ぐああああっ！……」

聞こえて来たのは狂狼の絶叫だった。

「その手を放せ化け物。」

体が自由になる地面に落ちると思つたら、誰かに身体を支えられる。

「けほつ、けほつ、けほつ。」

「やあ、お田覚めかな……お姫様？」

意外な人が私を助けてくれた。

「ヴァ、ヴァイン……」

「積もる話は後にしましょ、フィーナ副隊長。」

そつまつて【ロンバルディア&amp;ファイニール】の一丁のバイアネットを構える、彼の銃剣は拳銃タイプの小型紋章兵器だ。

私は安心したのか、彼の戦いを見届ける事無く意識が闇に墜ちる……  
次ぎに気が付いたのは医務室のベッドだった……

\* \* \*

### ヴァインSide

フィーナは気が抜けたのか、ぐすりと眠っている……アルバート……  
君は悪い奴だ……こんなに君の事を想つてくれる女性（人）は彼女だけだよ……

「ケケケケケ……ナイトご登場か？ああっ」

「騎士を気取るつもりはありません……どちらかと言えば死に神で  
しょうか？」

狂狼は片腕だけで大剣を振るつ。

「遅すぎです！」

しかし僕には、かすりもしない。

「テメ……何モンだ？……何者だーっ」

もう笑う余裕さえ無いらしい……ただ怒鳴り散らすだけだ、なら……  
お遊びはお終いだ。

「言つたはずです、僕は死に神だと」

恐怖が狂狼を襲っているのか……逸れとも喜んでいるのか……まあ僕にはどうでもいい話ですね、さてなぶり殺しは趣味ではありますから、わざわざお付けますか。

「レクイエム！」

一二丁拳銃の射撃の雨嵐を見舞う、奴はまともに銃弾を食いつ。

「ひゃあああああ！」

無数の銃弾を浴びて逃げ惑う狂狼、……悪党にしては余りにも情けない。

「見苦しい……アズラエル！」

ガンタイプから双剣タイプに切り替え嵐の様な斬撃を見舞う。

「ひつー」

最後まで言葉を紡ぐことは無かった……首が綺麗に跳ねられたのだ。

「さて……アルバートの敵は討ちました……後はイリア隊長達にお任せしますか。」

踵を返して眠つてゐるフィーナさんを抱き上げる。

「アルトさん後はお任せします。」

『ハツ、任されました。』

なにしろ彼に頼んでイリアさん達に無理矢理ついて来たのですから……しかし間に合って良かつた。

（アルバートにフィーナさんを頼むて約束されますから。）

苦笑しながらその場を後にした。

\* \* \*

エレノア・アリアドネSide

ちらつと下を見るとちょうど狂狼が副局長に討ち取られた、やつぱり副局長は生糞の化け物やで……しかも先発隊に無理矢理ついて來た。

「まさに……愛の成せる技やな？」

「ねえさんアタシを、シカトする気？ キシシシシシッ。」

さつきから耳障りな雑音がする……月を見ると紅い月が出る……  
駄目猫のお陰で気付かんかった。

久しぶりに本物恐怖味合わせたる。

「自分で言つのも何やけど…… 鬼姫の恐れしも…… その身に刻んで冥界に逝きや！」

「わ、ねえさんは生糀の鬼姫つて言つ化け物、キシシシシッ」

昔のミオはこんな感じやあなかつた…… 少なくとも サクヤ姫に出会つまでは…。

「「グオオオオツー！」」

天に向かってうちの、叫び声が、こだまする一両手の全ての爪が鋭くなる…… 眼の瞳孔も猫の眼に近い物に変化する。

「さて…… じつもねえさんと同じ土俵に立たないとねえ…… ギニアアアアツ」

ミオも化け物に変わる…… 爪が刀見たいに伸びる…… 牙もまるでサベル・タイガーや。

「「ギニアアアアツ」」

「「グオオオオツ」」

咆哮を上げ激しくぶつかる、ミオはより機敏に、うちはより激しく攻め立てる！ 屋根の上を飛び回りミオやうちはそれぞれ屋根板を剥がして投げつける。

「キシシシシシ、ねえさんそろそろ……」

「ミオ……何でサクヤ姫に襲い掛かったん?」

以前から疑問だつた事をミオに尋ねる。

「簡単な話 姫になられるお人に……純血だろうが、混血だろうが……要らない血統だからキシシシシッ」

そう言って飛び掛かって来るミオ。

「そんなん理由なるかー！」  
「ウオオオオッ！！！」

うちも同時に飛び掛かる。

一頭、冷やしきり馬鹿ネコ……」

空中でミホを引っつかんで地面にたたき付ける。

「アリス」

「 もう…… 謳めや…… さあ誰に雇われたんか白状せえやつ。」

「し……仕事のな、内容バラス……馬鹿は……いない……よねえさん

そう言つて……ぐつたりと動かなくなる……多分毒呑んで自害しおつた……

「アホ、誰か一つ、衛生班急ぎやつ。」

頭では助からんのは分かつとる……馬鹿ネコ……殺しの一族に生まれた者は最後は何時もコレや……仕事に失敗したら……だからひちは姫様以外あの国のが嫌いなんや……

＊＊＊＊

イリア・キサラギSide

エレノアさんから目標の捕獲失敗とそしてフィーナさん負傷の連絡が入る。

「二人の事が気に入るけど……」ちらりも、そつは言つてられない。」

サラさんに私は休む用に言った、だけれど……ぜんぜん人の言う事を聞いてはくれなかつた。

「まずはこの、デク人形共を片付けるぞ！」

確かに周りはのつぺら坊の人形だらけだ、ただ彼等全てが腕に武器や腕そのものが剣だつたりする。

「お待ちしてましたわ……小娘さんに狼女さん？」

フード姿の女性が鉄塔の上から私達に話かける。

「ケケケッ……俺の劣化クローンを処分してくれるのはなあ……さて何処をどうしてやろうか……ええつ？」

そう言つて狂狼は、も・じ・ど・お・り人狼に変身する、ただし姿は人狼とは違う……一言で言えばサイボーグだ……右腕にフェリオ君の改造ガントレットが装備されている……左腕は巨大なガキ爪がある。

(イリア隊長……多分フェリオの魔王の力使わんと、勝てん……使うんやつたら十分注意しいや……)

エレノアさんの言葉が頭を過ぎる。

「フェリオ君……私に……うつん、私達で勝とう一緒に……」

そう……力だけ求めればやがて……私もこの哀れな魔人兵と同じ末路をたどる、だけれど私達は違う今から逸れを証明する……

「必ず勝とうね……フェリオ君……」

「何勝手な事……吐かしてやがる!」

狂狼がレーザー・カノンを放つ、しかし私は瞬時に逸れをかわす。

「サラ将軍は人形使いを、各隊は人形達の殲滅を任せます。」

《了解しました》

「心得た、君はそいつに専念してくれ!」

私は姿勢を低くして、狂狼に突進する。

「ブレード・オン！」

何故か斬馬刀の用な大剣が出現する大剣を下から上斜めに振り上げるレーザーカノンは、砲身から真っ一につに切断される。

「くつ……どんな魔術だ、てめえ一体……何しゃがった？」

ガギ爪を振り上げる、が遅い。

「はあああつ……」

「——つ……」

上半身が吹き飛ぶ……

「まさか貴方も劣化クローンで……言わないよね……？」

自分が死んだ事すら理解出来る時間さえ、『え無かつた……

「回収班後は……頼みます。」

人形達は各隊によつて殲滅されている。

そう言つて通信を終える……私達絶対に彼等に成つてはいけない……

サラ将軍が戻つて來た、表情が暗い……

「済まない……追い詰めたが逃げられた……君にもフェリオにも……本当に済まない……」

そう言つて頭を下げる。

「あ、頭を上げて下せ……サラ将軍。」

彼女の生真面目さは、見習う所があるが……そのもつ少し力を抜いてほしいと思った。

\* \* \* \*

? ? ? Side

「で……一人共失つたと……？」

画面に向ひつの相手が、私に応える……はつきり言つて大失態だ……もう私に後は無いだろ？……

「で……ソフィア……最後の伝書鳩は……」

「多少危険ですが……演習中にも……書管を取り付けますわ。」

最後……つまり切り捨てか……なら彼等も……

「ソフィア今一度と我等が王は機会を、貴公に『えると仰せだ……

「ハツ……ありがとうございます……」

何とか助かったか……

「これから命令書をそちらに送る……その指示通りに動け。」

「ハツ」

並ば全力で掛からなければ。

\* \* \*

エレノア・アリアドネ Side

おびき出し作戦は失敗に終わったけど……収穫はあった見たいや……  
保安課から実動隊に異動したから、後は彼等の出番やな。

変わったと言えばフイーナさんやろか、スコット君にフェリオのDVDもろてから……フェリオ君親衛隊に入つた……あのDVDはフェリオの戦闘パターンも幾つか混じってるから……逸れの研究やろか……

ん……パソコン室から……性悪女のソフィア少佐が一人で出て来た……うちを見るなり……偉い殺氣じみた視線、飛ばしてたけどガンの飛ばし合やつたら……受けたろか？

一別ぐれて自室に戻る?

まあ……ええはいすれ証拠は出るやう……今回ほりかひと……ドローヤからな。

理由は状況証拠だけやからな……あんな自動人形は人形使いやつたら誰でもできるしな。

「あのフード女の声かて性悪女にそっくりなだけ……サラ将軍が捕まえようと挑んだら……スナイパーが邪魔したて話やし……」

考えてしかたがない……せつせつ、フヨリオの見舞いに行かんとな

\* \* \* \*

演習当日自分の判断力の甘さ加減を、思い知られとは……」  
露ほど思わんかった……

第10話～狂狼と化け猫～（後書き）

次話頑張つて執筆します。

「！」の表示を少なくしました。

## 第1-1話～艦隊演習～（前書き）

不慣れですが、頑張つて艦隊戦の描写に挑戦しました。

表示を修正しました。

表現を一部変更しました。

誤字を発見したので修正しました。

作中に登場する「コルムンガンド」は使徒様の超砲艦ドーラとイグルーの同名の兵器を参考にしました。  
使徒様の「許可をいただきました。

また内容の「説明が遅れました事を心よりお詫びいたします。

## 第1-1話～艦隊演習～

空中機動巡航艦

「シルフィード」即

艦橋内 S.U.D.e

イリア・キサラギ S.i.d.e

「アリシア通信士、フィ……じゃなかつた、シルフ・ウイングは  
まだ……」

「本艦の右舷後方にて航行中です！」

モニターに映る艦隊は約150隻に上る現在私達ミューラージュ・ウルフをふくめた約30隻がエルティン山岳地帯上空に向かっている  
ただ……かなり離れてフェンリル・ナイトの艦隊五隻の内旗艦シリ  
ウスが居る。

「イリア隊長、どうかしたん？」

「ええ……伯父さんの言っていた通り、まさか艦長まであるなんて  
……」

「まあ……慣れるより遣れりや、それに……みつやへ白い隊長服や  
し、馬子にも衣裳やな～」

「／＼＼＼＼。Hレノアさん！」

「隊長それに参謀ふざけてないで、お仕事して下せ。」

「アルトさん」に怒られた！

「「いやんなさい」アルトさん。」

「アルち'ゴメンやで。」

\*\*\*

高速機動艦ダーク・ウイチ号

ソファ・ブルーダーSide

さて、機関部に小細工をして出港をわざと遅らせる……もつとうねる……【書管】の投下ポイントね……

「書管の投下準備は？」

オペレーターに状況の確認をする。

「書管投下準備完了！」

ふふふつ……さあ、最後の小遣い稼ぎね……正直議会軍の【良い小遣い稼ぎ】と聞かされて関わってみたら、かなり儲かつたわこれを元に、じかくそこに紛れて他国に自分を売り込むのも悪く無いかしら?。

「もう少し、したら例の世界宣言も行われるハズ……まあ……しばらくなは彼等にお付き合いしましょ。」

投下ポイントの湖が見える。

「脱出カプセル投下せよ、投下後速やかに空域を離脱します。」

「ハツ……投下します。」

さて……回収班に後の仕事は任せましょ。

?·?·?·S·i·e

『ヘイルダム……こちらイーグル・アイ……魔女を確認した……繰り返す、魔女を確認した。』

湖に着水したカプセルを確認する……既に議会軍の回収班は彼等が全滅させた。

『こちらへイルダム封筒の中身を確認せよ……』

『了解……現在こちらの回収班が調査に向かった……』

やがてカプセルを回収した、ボートが湖畔につくそして彼等は速やかにその場を後にする。

\* \* \* \* \*

フェンリル・ナイト艦隊

旗艦：機動高速戦艦シリウス

サラ・フェンリルSide

レスター局長から暗号化通信に入る。

『今封筒の中身を確認した、ダーク・ウイチはネズミだ。』

「やはり……彼女がスパイでしたか……」

『ダーク・ウイチ号には十分に注意するよう』

「了解しました、今は氣づかぬフリですね……」

『そういひ事だ……風の精靈の守護を、天狼に頼む。』

「ハツ」

あまり演習艦隊に近づいては気取られるな……しかし、何か有つてからでは遅すぎる……

「よし、全艦本艦隊は教導艦隊の前衛に擬態する、魔女に気づかれるな。」

「ハツ、了解です。」

全艦と言つてもわずか五隻だ残りは本隊にいる。

「ダーク・ウイチ号は?。」

「ハツ、間もなく合流とのことです。」

(「のまま何事も無く終わると良いが、そうもいかないか。」)

\* \* \* \* \*

空中機動巡航艦シルフィード

## ブリッジ＊＊＊

リア・キサラギSide

ブリッジには、操舵手スコット・通信士兼索敵担当アリシア索敵担当レイス・機関担当ロバートさん達が、それぞれの持ち場に着いている。

「マスター。」

「フェリオ君！？」

艦長室に居た、フェリオ君が、ブリッジに入つて来る。

「ふ・え・り・おーっ、ブリッジ（此処）に入つて来きたら、アカンやうづ。」

腰に両手を当て、エレノアさんがフェリオ君を叱り付ける。

「フェリオ君直ぐに、艦長室に戻りなさい。」

私も立場上フェリオ君をブリッジから、追い出すしかない。

その時アラームが、ブリッジに鳴り響く私は素早く指示を出した！

「アリシア、状況は！」

「ハイ、本艦後方に艦影有り距離は…… 1800-。」

「何やで！？……対空監視何処見とつたんや。」

エレノアさんが対空監視班を怒鳴り付けた。

「姿は確認出来ません、雲の中」……浮上して来ます。」

「回避行動急いで！」

「了解ス」

「各員衝突に備えて下せー！」

レーダーに艦影が映る……ブリッジ内に緊張が走る。

「スコット回避急ぎやー。」

「うああああつー！」

艦体が大きく傾ぐ、皆が必死に衝突に備える、フェリオ君がバランスを崩して壁に叩きつけられそうになる。

「フェリオ君、私に掴まつて！」

アルトさんがフェリオ君を支えてくれた。

雲海の中から潜水艦の様に静かに、浮上して来る、シルフィード号の直ぐ側をダーク・ウイチ号が通過する……

「ふう……何とか回避出来たス」

「「コラーチ、索敵班よそ見でもしてたんか? フェリオが死にかけたぞーつー。」」

「「済ません、雲の中から急に、ダーク・ウイチ号が現れました。」」

「「雲の中やて? アリシア、安全基準守らんかいで……厳重抗議や。」」

「は、ハイ、了解しました。」

「雲の中から急に……びむ言ひ事だらけ……私が考へていると、暗号化通信が入る。」

内容は……?」

\*\*\*\*\*

ヘイルダム・発

宛：風の精靈

暗闇の魔女は、口キなり十分警戒されたし……

また前回の確報した、狂狼は魔人兵計画の初期型タイプと判明……  
なお魔女の目的は風の精靈に害を与える物なり……警戒を厳にされ  
たし……以上。

\* \* \* \* \*

イリア・キサラギ Side

「ハレノア……さんこれって……」

「多分……間違いないで。」

それはそつと、フェリオ君は……アルトさんに、注意されてる最中  
だった暗号と、ニアミス騒ぎでフェリオ君の事を忘れていた……

「フェリオ君、イリア隊長に余り心配をさせでは駄目ですよ。」

「…………めんなさい……」

「…………フェリオ君直ぐに艦長室に戻りなさい。」

「イリア隊長、間もなく演習ポイントです、フェリオ君を艦長室に  
戻すのは返つて危険ですよ。」

そう言つて、簡易式のシートを用意してくれる。

その時メインモニターに教導官が現れる、全艦に指示を出す。

『これより、騎士艦隊の演習を行つ……それぞれの艦隊は所定の位置に着け以上。』

＊＊＊＊

『では、私は迂回ルートで仮想敵艦隊の後方に、回り込みます。』

ローザリアさん所属の第4騎士艦隊以下15隻が迂回ルートに向かうちょうど山岳を逆時計回りで、迂回する。

私は15隻の内自分の指令艦とフイーナ副隊長の艦合わせ2隻しか与えられていない、これを見ても解る様にかなり冷遇されているのだ……

（今更、弱気になつても仕方が無い。）

『前方に仮想敵艦隊確認、全艦攻撃用意！』

全艦が攻撃体制に入る、その時雲海の中から赤い雷球が！こちら田掛け飛んで来る。

「シールド展開急いで！」

「了解、シールド展開します。」

衝撃が艦体を襲う大きく艦体が揺れる。

「被害は？」

「シールド出力73%に低下。」

「雲中からか……やりおるな。」

その時旗艦のシグナルが突然消える……つまり撃沈されたのだ。

「旗艦ブレイブ撃沈！」

旗艦が……でもまだ負けた訳じゃない。

「機動空中爆雷を扇状に……急いで！」

「…急いで投下するや！モタモタしつたら、良い力モヤで。」

「爆雷投下！続けて回避行動に移れ。」

レーダーに青い点が放射状表示される、それらが広範囲に広がり赤い点つまり仮想目標が消滅する。

「敵反応……消滅、更に高エネルギー反応来ます。」

赤いレーザーの一条の光が、艦隊中央を直撃する。

「い……今のつて……」

「ヨル……ムン……ガンドや。」

ヨルムンガンド……対要塞攻略を目的に、建造された重砲撃艦……大型紋章砲一門に対空ミサイルと機銃が有るだけで、艦隊戦ではほとんど出番が無いしかし……あれはまだこちらに配備されていないはず……もしかしたら……そういう訓練設定なのかもしれない。

「ユーロ、クラウス、二人とも無事？」

『ああ、無事だ……』

『たつぐ……危ねつな。』

今のが攻撃でかなりの損害が出た……メインスクreenにギリギリで仮装敵艦隊が確認できる。

数は……10隻いや……11隻だ。

「近くに……観測艦いるな……厄介やで……」

「ユーロ、観測艦を潰せる？」

『愚問だな……任せろー。』

そう言つて、雲海に素早く降下する問題は……他の艦と連携が取れるか……

『さて……我等も備えるとしよう、イリア。』

クラウス……そうね、弱気になるのはまだ早い。

「指揮は」

『君が取れイリア。』

簡単にしかも簡潔に、クラウスは言い放つ。

「簡単に言つくれるんやな……」

「クラス隊長右翼を、お任せします。左翼を指揮します。」

中央は既に壊滅状態だ、なら左翼と右翼で押さえ込むしかない……

「ローザリアさん、こちらに来るまで持ちこたえる。」

そつと決まれば反撃開始だ、まずは両翼を押さえ込む。

「全艦右翼と連携しつつ、一口艦隊の時間を稼げ、遠距離攻撃開始！」

遠距離から、ミサイルやレール・キャノンで反撃をする、少しづつでは有るが仮装敵側にダメージを与える。

「ヨルムンガンドの砲撃……来ます！」

「全艦上下に回避一つ！急げーやつ。」

艦隊が上下に別れる、その直後赤い閃光がシルフィード号の真下を

かすめる。

「弱小出力でも……迫力ありますね……」

弱小出力レーザーでも、少し怖い……あんな物が当たつたら……恐怖で少し体が……震える。

「怖いですか？馴れるとほ言いませんが、悪い事では有りません。」

アルトさんが励ましてくれている私も頑張らなければ。

『こちら、コ一口敵観測艦を撃破した、これより敵本体右翼に奇襲を掛ける!』

「了解、『武運を。』

さて次は私達の番だ、ローザリアさんもそろそろ……来ると思つ。

\* \* \* \* \*

ソフィア・ブルーダー Side

観測艦から、観測データが、途絶えた……撃破されたか……

「全艦前進！これより敵残存部隊の」

「て、敵少數部隊…右翼側面に展開…！」

なるほど、私と同じ様に雲の下を通りてきたか……

「ヨルムンガンド、狙われています…。」

何ですって！こんな戦法を採るのは、コーコーしかいない、今「大砲」を失う訳にはいかない。

「右翼部隊に、ヨルムンガンドを死守させなさい…。」

「敵、ヨルムンガンドに攻撃を開始します。」

流線型の攻撃的な艦船が次々に砲撃やミサイルを浴びせる…反応は撃破…こちらは…切り札を失つた。

更に運の悪い事に、ローザリアの艦隊が背後に、迫る…急いで対応しなければ…

「ローザリア艦隊とは距離があるわね。」

こちらの作戦で向こうも旗艦を撃破して、ローザリアが指揮を引き継いだらしい。

「では…」

「！」のまま、あの小娘の艦隊に突入して…分かるわね？

さあ……計画の実行ね、さよなら……小娘さん、そひ……私の役  
目を果たすべく全艦隊に突撃命令を下した。

＊＊＊＊

イリア・キサラギ Side

いきなり、ソフィア艦隊が突撃を掛けてきた、それだけならまだ良  
いが……突然実弾を使用して撃つてきた！

「じつ、実弾！？」

「隊長つ、全艦に回避行動を！」

「アホつ、今……バラバラに回避行動したら、要らん犠牲者出すだ  
けや砲手！跳んで来る弾は全て撃ち落とすんやつ！」

激しい砲撃戦が、繰り広げられる……被弾し後退する艦が続出し始  
めた。

「シルフ・ウインド号、機関部被弾！火災発生とのことです。」

「ふい、フィーナさん！」

私はほとんど悲鳴に近い叫び声を上げていた、その時だフェンリル・

ナイト艦隊が、救援に駆け付けてきたそしてシルフ・ウインド号の援護に三隻、シルフィード号の援護に一隻が就く！

シリウス号の半球式旋回主砲が全門ダーク・ウッヂ号を捕らえる！

『全門一斉射用意、ただし沈めるなつ！』

砲撃戦が開始される。

（す、凄いたつた一隻で一隻を相手にするなんて……）

ソフィア艦隊は既に教導艦隊に包囲されつつあった。

「た、大変です、ダーク・ウッヂ号が、ほ、本艦に向かって来ます！」

「迎撃……用意ただし、戦闘不能にせよ。」

（敵の脚を乱して、戦闘不能にすれば……やるしか無い。）

「砲手、ダーク・ウッヂ号の回避パターンを乱しなさい！ただしダーク・ウイチ号は戦闘不能します、無弾頭ミサイルを使用します、ミサイル発射管、一番～四番発射！」

「復唱、一番～四番発射つ。」

「続けて、五番～八番発射して下をいつ。」

主砲の連続射撃で、脚を止め急所に無弾頭ミサイルを叩き込む。

次々に主砲……艦首ミサイル発射管……機関部……舵に命令する、そして呆気なくダーク・ウツチ号は降伏した指揮下の艦艇もフエンリル・ナイト艦艇の元既に制圧されている。

\*\*\*\*\*

### イリア・キサラギSide

反乱事件から、一週間後……艦隊訓練のあの反乱事件の後は大騒ぎだった……

彼女の他に、スパイは少なく10人は居たそうだ……そして……ラボも遂に家宅捜査が入った、しかし主なメンバーは、不審死か逃亡していた……TVでは、一週間この話題で持ちきりだ、結局彼女は捕まらなかつた。

「ニコースはどのチャネルも……ラボ関係……か。」

「マスター……」

後……解つた事と言えば、両親はプロトタイプ魔人兵【狂狼】に関与していた可能性が僅かに有るそうだ……

やつぱり……少佐を問い合わせ正したほうが近道かも知れない。

「しばらくは……この件は、局長の判断に任せよ。」

それにしばらくは我がミュラージュ・ウルフは艦艇の発進は無い。

怪我人は出たが、死者が無かつたのは不幸中の幸いだ、しかし肝心の一隻はドックで修理中だ。

そんな中で一つの大事件が起こるとしていた……

第1-1話～艦隊演習～（後書き）

次回頑張って書きます。

描[か]と誤字の修正をしました。

## 第1・2話～それぞれの想い～（前書き）

今回はストーリーを穏やかにしました。

誤字・描写不足を修正しました。

## 第1-2話／それぞれの想い

その日それは急に世界に向けて発せられた。

私はフェリオ君とエレノアさんの二人で、カレンさんの私室で昼休憩をしていたら、アリシアさんから通信が入つて来た。

「隊長つ、急いでテレビモニターを見て下さこつー。」

全員で顔合わせ、慌ててテレビをつける。

金髪の美青年がモニターに現れ……その日全世界に……世界再建議会が電波ジャックをしたのだ。

『全世界の指導者並びに総ての種族国民に、告げる、余は「新制ゼウラニアス帝国」初代国家元首アルゼリアス・ツォン・ファルケン、この世界を統べる真の王である！我等純血統種族は、かつて世界を席巻した眞の支配種族の流れを継ぐ末裔だつ、そして古に世界を滅ぼし、諸君等に世界再生を託した女神【光の翼の聖女】も我等の裏切り者だ、しかし諸君等は女神との盟約を忘れ去り、また世界を再び破滅に導こうとしているのだ！』

この日あらゆる通信・放送・が全て【彼】に支配された……電波ジャックだ既に世界各地で混乱が起きはじめている。

「 ファルケン……」

ぎりつと奥歯を噛むフェリオ君……彼とフェリオ君の間に何が有ったのだろう……

『何故、不毛な争いを続けるのか？何故諸君等は女神との盟約を忘れ去り詰まらぬ争いで、同族を危め続けるのか！それは諸君等が劣等種族だからだ！それは既に諸君等が自らの手で、それを証明している事に、何故気が付かないのか？世界を見るがいい！既に荒廃が始まリそして多くの種族が死に絶えた、もはや諸君等に世界を浄化するだけの【力】は無いと余達は判断し、諸君等の浄化と愚かな指導者達の肅正をここにおいて宣言する！』

「……何てい草やつ。」

「……論外だな。」

エレノアさん、そしてカレンさんが毒づく、同感だ……私もみんなと同じ気持ちだ。

\* \* \* \*

レスター・エルストンSide

遂に世界再建議会……いや古の帝国復活宣言と全世界に宣戦布告か

……

「トレース出来るか？」

「ダメ、でした……ジャミングが掛かっていて……」

まあ……仕方が無いもこきなり……電波ジャックじゃあまず対応は不可能だろつ……

「兄さん、所でこれからが大変だよ。」

「ああ……分かってこる。」

確かに大変だよ……騎士隊の中にも、ソフィアみたいに、向こう側に通じていた連中のお陰で、現在騎士隊は再編中だ、まともに動けるのは、6～8位か……

「それに……国防軍にも不穏な空氣がある。」

あのブリッヂ・フーンリルが最近不穏な動きを見せているらしい。

「しかし本格的に動き出すのは……」

「遅くても……来年だね……」

全くだ……せめて、穩便な年明けをさせてくれ。

\* \* \* \*

レナード・ウォード・シドニー

(ようやく此処までいきつけたか……)

モニターを見ながら、そう思つた、メアリー・フォートフルト……  
貴女の失敗は俺を選んだ事だ……

「何か考え方か？貴様らしく無い。」

顔を上げると同僚のドリスコルが立ついた。

「貴様か……何の用だ？」

「いや、ただ顔を見に来ただけだ。」

フツ……相変わらずだ、さて本題を聞こうか？

\*\*\*\*\*

アルゼリアスSide

今、我々の空中機動艦隊は通称「天空の玉座」に向かっている、古の技術で造られた、この浮遊要塞は下層部が型で尖端に360度攻撃可能な半球の超巨大紋章砲一門、上部は型の平面型をし全ての尖端に紋章砲を備える。

「閣下、先発隊が上部より上陸を開始しました。」

「ウム、」苦労であった、【鍵】の入手には獵犬が役に立つたな。

しかし道化を演じるのも楽ではない……先ほどの演説……あまり私の好みではない……まあ世界を一つに纏める目的に役に立つたな。

「アルゼリアス様、ご気分が優れぬのならお休みになられますかな？」

单眼魔人のジル老師が私を気遣い休むよう促す。

「気遣いは不要願いたい、逸れより我等の軍の状況は？」

唯一の紅一点「飛翔將軍リガティ」が状況を説明する。

「ハツ、既に我が方に盟約を結ぶ諸国が幾つも我が軍門に降つてあります、一部の強国や周辺国が連合軍を組織化し始めています。」

なるほど、この城の【力】を見せ付けばならんか……ならば見せ付けてやるわ。

「まずは、ドラグニア帝国を横切り、アルゼリアを落とす……まずは各地の協力者と、連絡を密にせよ。」

その場に居た全員が頷く、そして間もなく我が牙城「天空の玉座」に入港する。

「では、これにて解散する。」

「「ハツ！」」

皆がその場を後にすると、一番危なつかしい……彼女に声をかける。

「リガティ、少し良いか？」

「アルゼリアス様、何か？」

私は、呼び止められた彼女は怪訝な顔をする、年明け早々我が軍は彼女が指揮を採る地上軍を先陣に、大規模会戦を仕掛ける。

「年明け早々に、大会戦を仕掛けるリガティお前の働きに期待する。」

「／＼／＼。か、閣下、喜んでこのリガティ……飛翔將軍の名内外に轟かせましょう。」

顔を赤らめる彼女を見ると、かつて愛した女を思い出す。

（死別して既に500年……人とは儻いものだな。）

「閣下？」

「いや何でもない……随分昔の事を思い出しだけだ。」

恐らく……フヒリオも居るな……私を敵と思つならいざれ相見える事もあるだろ……

「リガティお前は絶対に死ぬな、良いな。」

「…?」

少し驚く彼女に構わず、話を続ける。

「もし、敵の虜の憂き田にあっても……だ、他の者共勝手に死ぬ事は……許さんそう心せよ。」

「ハツ……心に止めておきます。」

そろそろ……皆が私を待っている、それで行こうか……

リガティを伴い深淵の玉間に向かう、さて……運命はどう動くか見物だな、イリア・キサラギと云つ者と刃を交わす日が来るのが愉しみだ……

\* \* \* \*

イリア・キサラギSide

カレンさん達に、フヒリオ君の体調が悪いから……と嘘をついて、

屋上に連れ出すフィーナさんは今は居ない、この時間彼女は、屋上の屋根で昼寝をしてるのだが……今日は彼女は居ない、……好都合だフェリオ君に話すをきこいつ、さつきの電波ジャック犯、何者何だろ……？

「ねえ……フェリオ君……言い辛い事だつたら、無理に言わなくて良いし、私も聞かないから……」

私とフェリオ君の間に静かで重い空気が漂う……少し間を置いて、フェリオ君がぼつりと呟くように話してくれた。

「彼は……僕の両親を……殺した敵です……」

「『ゴメン』……フェリオ君……私が軽率だつた……」

「マスター気にしないで……もつ今から、6000年も前の過去を引きずつて、弱虫の話ですから……」

フェリオ君……が、弱虫……あんなに、一人で傷だらけで戦つて來たのに……？

「僕はまだ、その時は子供でした……本当に……僕の両親はアルゼリアスが起こした戦いで、死にました……この話は森の長老に聞きました……」

「森の長老？」

「誰だろ……？フェリオ君以上の存在だから……魔神かな？」

「違います……森の長老は巨大な精霊樹様ですよ。」

フェリオ君によると森の長老は穏やかに世界を、見守る存在らしい赤ん坊のフェリオ君を長老様が、フェリオ君の「ご両親の親代わりになつてくれたのだそつだ。

「そつかあ、じやあ森の長老様がフェリオ君のお爺さんになるんだね。」

「ええ……でも次に会えるのは、僕がお爺さんに、なつてからですね。」

フェリオ君がお爺さんになつてから、どうこう事だらけ。

「長老様は……僕の成長を待たずしに、眠りにつかれました……」

「「ダメン」……また言こづらじ事……聞いちやつたね……私。」

更に空気が沈みかかる……これでは……フェリオ君のマスター失格だ……

「ふつ、あはつ、あははははつ。」

「何よつ、せつかく……フェリオ君の事を励まそつと、頑張つてゐるのにつ。」

ひとしきり笑うフェリオ君……しかし怒る氣などしない……まるで元気で世話の焼ける弟だ……

「弟ですか……今なら、マスターの弟も悪くないですね」

「……こいつ、う、せつかく人が、心配してあげたのに、まちな  
さいつ、フェリオ！」

「うあつ、マスター？」

まるで姉弟のよう、「じゃれ合つた。

「……マスター頭撫で回すのは……」

「ダメ、人の心配を無視した罰です」

フェリオ君の頭を優しく撫で回す、少し撫で回し過ぎて、フェリオ  
君がゆでダコ見たいになつた。

「所でフェリオ君？森の長老様は皆で……」

「ええ……森の皆でお見送りした後、精霊樹の苗木を植えました、  
一万年後に再開出来ます。」

私も魔王化したら……駄目だ、フェリオ君が絶対に嫌がるだらう……  
……彼にしたら、短いかも知れないが精一杯彼のマスターにならう……  
少なくとも今は穏やかな時間が流れる、年明けには彼等と本格的に  
戦いが始まる……

(そう……今だけフェリオ君のお姉さんをしよう。)

恐らく……こんな穏やかな 穏やかな時間がもう……送れないはず  
だ。

第1・2話～それぞれの想い～（後書き）

次回頑張つて書きます。

描[写]の修正をしました。

## 第1-3話ウイルム平原会戦前哨戦（前書き）

今回は後一話続けて地上戦をします。

## 第13話 ウィルム平原会戦前哨戦

レスター・エルストンSide

年が明けるとともに、新生ゼウラニアス帝国が世界各地に進攻を開始、開戦の初戦からわずか38時間たらずで、北欧諸国を飲み込むかの様に軍を進める。

我がヴァルゼラート公国も全軍を挙げて、対応に追われている……そして7日前に、大聖堂騎士団にも出撃命令が出た。

「全く……親父の奴、面倒な仕事を押し付ける。」

\* \* \*

今の戦力で食い止められるかどうか……いや、やらなければ……ならない。

今ヴァインは砂漠都市ギザにて、ドラグニア帝国軍・国防軍・大聖堂騎士団の連合軍で、ゼウラニアス帝国軍を迎え撃つ為に、ティアマト級地上戦艦で出撃した、空中機動艦隊は準備が出来次第出撃する。

（もつとも地上戦が今回はメインだな……）

しかし……間の悪い事は起こる物だ……ミコラージュ・ウルフ隊の戦艦二隻が機関トラブルで総点検だ本当にトラブルらしい細工された形跡は無かつたそうだ。

現在建造中の新造艦の状況をカレンに聞くため、通信回線を開く。

「カレン博士【聖槍】の状況は？」

『おおむね……80%と言つた所だ、後しばらくな。』

「分かりました、紋章機関の件ですが……何か問題は……」

カレン博士に新造戦艦の状況報告を聞く、この艦はミュラージュ・ウルフ隊に正式に実戦配備されるため、開発を急がせていた。

まあ……今の状況では無理もないか……

\* \* \* \* \*

陸上戦艦ティアマト

ブリッジ

ヴァインSide

「ギザに集結中の連合軍は約10万に上る……一方ウイルヘルム平原には、5万しか配置されていない。」

「質問があります、私達の仕事は？」

ローザリアを始め何人か隊長職に異動させた、まあ彼女を含む何名かは分隊長経験者だ、まかせても問題無いだろ……

「既にカオス副将が、団部隊を率いてギザに向かっています、我々は此処ウィルヘム平原で敵を迎え撃ちます。」

「所でキサラギ隊長は？」

クラウス中尉が最な意見を言つ、ミュラージュ・ウルフは、我々より先にギザに着いている。

「ミコラージュ・ウルフとフェンリル・ナイトは先発してギザに着いています、他に質問は？ 無ければ作戦の説明を……」

さて……皆さんの不満をどう宥めるか……頑張りましょう。

\* \* \*

ギザの町へ

イリア・キサラギSide

ふえ～暑い～、砂漠用のフード付きマントが無ければ、絶対に倒れる……年明けでも砂漠の暑さは変わらない。

横目でフェリオ君とエレノアさんを見る。……「ひやましい」……「こんな暑さで何も感じないなんて。

「何で一人とも……平気なの？」

「僕は一人旅が長いので……慣れます。」

「うちには、砂漠戦参加者やからな……真夏の暑さが身に堪えるで隊長。」

「うつうつ……此処につわものが居ました、お菓子大魔王フェリオ君と関西系鬼娘さん事エレノアさんです。」

「僕今なんどなくマスターの考え方分かりました。」

「フェリオ奇遇やな、うちも……それとなぐく分かつたで。」

「この後……私は一人に散々いじられた……うつうつ、この暑さされ何とかなれば……」

「オラオラ、よそ見してんじゃあねーぞ！」

「ケツ……半獣人が、うろちゅうすんじゃねーぞ」ラ。

などと通りの奥から、罵声が聞こえて来る。

「行つてみましょ、一人とも。」

「そうですね……マスター。」

「その前に……表通りでトラブルや、何人か回してくれへんか。」

『了解です。』

これで良しと、さあ行きましょう、二人とも私達は表通りの奥に向かつた。

＊＊＊＊

「何だよつ、自分達からぶつかって来て、そっちが - 「

「ああつ、俺達第7師団に盾突く氣か? ああつ。」

「どーせ、俺達がいなけりや、ゼウラニアスにお得意の尻尾振る氣なんだろ?」

そこには、半獣人の少女を締め上げる国防軍下級士官がいた。

「待ちなさい、一般人に手を出して、恥ずかしくないの貴方達!?」

「あんたら、所属はあのハゲ親父のバスク中将やろ違つか?」

「.....」

フェリオ君が飛び掛かるうとするのを、ネコ掴みで抑えながら相手を睨みつけるエレノアさん。

「エレノアさん、放して下さい。」

「ダメに決まってるやつ、フェリオ。」

「……」

「「……」

私を含めた全員がその場で固まる。……こんな状態でも、エレノアさん凄いですフェリオ君を止めて兵隊相手に目線を逸らさないなんて。

「漫才師か？ めえり。」

「違います、大聖堂騎士団です！」

「お、お前味方殺しのエレノアか？」

びっくりとエレノアさんの耳が反応する。……エレノアさんを止めないと……

「ああ…… そりゃ、うちが味方殺しのエレノアや。」

声を押し殺してエレノアさんが、一人の兵隊に答える。

「味方殺しの鬼姫か……！」 まさに化け物屋敷だなあギャーハハハハッ。」

「どりあえず……そこのお嬢さん逃がしたってくれへん？」

フェリオ君を放して、ドスの聞いた声で一人に放しかける。

「ああつ、聞こえねえ。」

「ギャー・ハハハハ。」

「そこまでだ、我が第7師団の面汚しども!」

全員が振り向くと武装した兵隊達が一斉に銃口をこちらに向ける、二人は観念して少女を放した。

「アンドリュー・コレス大尉?」

「はい、今は少佐ですエレノア大佐。」

「エレノア……大佐?」

「ええっ、エレノアさん大佐だったんですねか?」

しまった……とか言いながら、昔の自分の事を色々話してくれた……愉快な話では無いから言いたくないのは分かる、私だってフェリオ君の事や自分の事は余り教えてたくない。

「／＼＼＼。その……階級かつてな……実家が……勝手に……いや……その……」にょ／＼よ。」

「ハハハツ、相変わらずエレノアさんらしいや。」

笑いながら、コレス少佐は銃をホルスターに戻し部下に一人を連れて行くように命じる。

「コレス少佐……そのありがとやで……」

「まあ仕事ですから……それに、エレノアさんに暴走されではたまりません。」

（エレノアさん……国防軍時代の時から……喧嘩つ早かつたんですか？）

「／＼＼＼。それよりさつきの子はどうしたん？」

「ええ、被害者なので調書を取ります。」

その後私達も少し話を聞かれた……その後他のメンバーと合流する。

それからじしばらくして、国防軍ギザ方面防衛部隊そして大聖堂騎士団の陸戦隊と空中艦隊が到着した。

空中艦隊が6個の中規模艦隊……ギザ方面軍陸上戦力は10万人……列車砲トル・キヤノン三基そしてウイルム平原防衛部隊は騎士団陸戦隊が約6個大隊と200メートル級陸上戦艦ティアマトが到着した。

\* \* \*

弟力オスを探していたら……ランスに会つてしまつた、彼は幼なじみでしかも私の……まあ……初恋の人だつたりする……

「ゴホン……で、何故君が此処に居るんだランス？」

「バスク中将の穴埋めさ、陸上戦艦『テスプリンガ』級三隻をウイルム平原防衛部隊に持つて行つて、変わりに僕達帝国艦隊に、出撃の要請が来た。」

「あの……馬鹿者！」

何處まで味方の足を引っ張るんだつ、全く正規軍も末だな……そんな顔（表情）が出たのだろう。……かれが笑い出した。

「あつはははつ」

「／＼／＼。笑つてる場合か？」

「いや、君のそんな顔を見たらついね。」

（まったく……ランス君は相変わらずだな……）

これ以上は長居は出来ない、地が出てしまつ。

「君に対する僕の想いは変わらない、ゆっくりと待つていてる。」

「なななつ／＼／＼。……バカつ。」

ランスはドラグニア帝国皇帝親衛艦隊「黒龍騎兵艦隊」の提督に最近拝命されたばかりだ……少し浮かれているのか？

「君に会つためと言つたら？」

「…………。し、失礼する！」

踵を返し司令部に向かう、ランスは楽しそうに笑っている……

（まあ……悪気はしないな。）

さて会議に向かうか、まあ結果は解りきった事だが……

\* \* \* \*

イリア・キサラギシダ エ

ウィルム平原の一一番端に大聖堂騎士団は配置された、何でも国防軍のバスク中将が「騎士団」とき雑兵は端っこがお似合いだ！」と言つたそうだ……レスター局長なら今頃血の雨が降つたかも……

「ヴァイン副局長やから出来る事当やな……」

「Hレノアさんお疲れ様です。」

彼女には参謀本部に連絡役を頼んでおいた、万が一に備えてだ、国防軍本隊は無人兵器を中心に編成されている為彼女にパイプ役の大役が回つて来た。

「本当に疲れたで～つ、特にあのハゲ親父の相手は……昔の事ネチネチと言つてくるやかい……モニターグーで潰しかけたで。」

「ヒレノアさん……それは。」

「無論冗談や、そんな事より……隊長、司令官に提案をしたいんやけど……」

目が笑つていない……まあスルーしよう、提案？多分この戦いについてだろ？敵軍も大兵力の総力戦だろ？情報では巨大生体兵器も投入されたらしい……

私が考へても仕方が無い尉官階級では相手にされないだろ？まあ騎士団は半民半官組織で特務部隊に近い、副局長達に連絡を入れティアマトで会議を開く。

\* \* \*

会議室へ

イリア・キサラギSide

「皆さん集まりましたね、それでは作戦会議を始めます。」

副局長が全員を見渡し、しばらくしてから立体映像で局長が現れる。

「じゃあ、始めて下さいトーレノアさん。」

「とりあえず要点だけ言つわ……この戦いうちらの惨敗で終わる……可能性が高い。」

エレノアさん以下騎士団参謀部が危惧するのは、バスク中将が国防軍だけで敵本隊と決戦する事を言い出したそうだ、勿論そんな無謀な戦いは出来ない……

『た、大変ですっ、国防軍が攻撃開始しました!』

「なんやて!」

「チツ……あのハゲ親父。」

会議中にその危惧していた事が起きる、国防軍がこちらの部隊の展開を待たずに、攻撃を開始したのだ。

国防軍本隊地上艦隊旗艦「デスプリンガーア

\* \* \*

たつゝ騎士団との連携無しで、攻撃かよ……まつたく……やつてら  
れん、言わないより言つた方が良いかもな……

「バスク中将、敵軍が両翼を広げています此処は騎士団との連携が  
必要と小官は判断します。」

「スパイダーとキャンサーを前面に押し出せーケンタウルスを両翼  
に回せつ、百式戦車隊及び零式で対応せよー。」

人の話聞けよつ大体、零式や百式戦車の連中だつて練度低いんだぜ  
つーしかも零式に至つては、使いこなせない兵士が、目立つチツ  
… ようやく両翼に回つたか…

\* \* \*

エレノア・アリアドネSide

いきなりの情報に周囲が慌ただしくなつた、無理も無い……まあ…  
… じつち無視で戦闘開始したら普通そつ為るわな…

「仕方が無い遠距離戦闘開始する。」

うちひもなし崩しのまま戦闘に参加する……コレス少佐が心配やな

…

「ミコラージュ・ウルフは遊撃隊として戦つて下さい。」

「判りました、ミコラージュ・ウルフ遊撃任務に着きます。」

＊＊＊＊

ミコラージュ・ウルフ担当戦区176ポイントへ

「はい……はい……了解です。」

アリシア少尉が司令部との通信をやり取りしている。

そん時や……あのハゲ親父の声が聴こえてきたんは……

『何をしていろーせつめと擊破せよー』

はあーっ、相変わらずわめき立て、てんのかあのハゲ親父……

『まとめて吹き飛ばせ！味方は無人機だつ。』

あらりと横田でアリシア通信士とアイコンタクトする。

（アリシアへ頼むをかいその回線きつて……）

（だ、ダメです、そんな無茶苦茶言わないで下せーーー。）

そん時やデスプリンガーの主砲が鳴り響いたんは……味方の機械兵器部隊と敵の機械兵器部隊が、一瞬で消し飛んだ……

「あの馬鹿親父！またあん時と同じ事しやがった！」

怒り任せにインカムをたたき付ける、何とか戦線は、ついでに零式  
戦車隊が支えきって何とか防いだ。

しかしこの時誰も、厄介な出来事が起きてるとは夢にも思わなんだ

……

## 第1-3話ウイルム平原会戦前哨戦（後書き）

バスク中将の元キャラはゼータガンダムのバスク大佐です。

コレス少佐がコレト少佐に為つたままでした。

キャラ名と描寫を修正をしました。

真に申し訳ありませんでした。

## 第14話～防衛戦～（前書き）

前回の序盤戦に続いて地上戦になります。

後力オスの次に影が薄くなつていた人達も登場し始めます。

陸上戦艦の艦名を修正しました。

## 第14話「防衛戦」

国防軍本隊Side

レナード・ウォードSide

金を渡した工作兵を呼び出す。本当は生き証人の始末だ、リガティの作戦をやりやすくなる為に、ここに金を渡してある細工をさせた。

「ヒュード、旦那約束の……」

「ああ……金と特別休暇をやろう。……」

味方の砲の発砲音に合わせて男の額を撃ち抜く。

「『』の始末を頼む。」

「ハツー。」

さて……イリアこれからお前の活躍を祈るが、そう思いながらその場を離れる。

(義理は果たしたな……帝国にも……ヴァルゼリアにも……後はイリアと俺の戦いの決着だけだな。)

\* \* \*

### リガティ side

陸龜型巨大生体兵器「ヘカトンケイル」を全面に押し出すよつに命じる、アルゼリアス様のご命令通り、作戦を達成しなくては……

「ヘカトンケイルを国防軍本隊に当てる、敵戦車や歩兵には無人機動兵器で対応せよつ、私も出る」

ヘカトンケイルが国防軍本隊に向かつて動き出す、私は空から氷の短槍を雨嵐の様に降らせる。

「チツ……ただ逃げ回るだけか……つまらない。」

中には私に挑んで来る者もいる……中々のつわものいるものだ。

\* \* \*

### アンドリュー・コレス side

ヘカトンケイルが向かつて来る、各部隊が応戦するが豆鉄砲だな……  
此處は一時後退を進言するか……

「敵の巨大生体兵器が出て来ました、ひとまず体勢を立て直す必要があります。」

「黙つていろ若造！『デスプリンガー』、マドルウク、ギガンティスは主砲発射用意一つ、薙ぎ払え一つ！」

く、黙田田じやないか！あのヘカトンケイルにダメージは『えられない』……並ば俺はやるべき事をするだけだ！

「バスク中将……後退命令を出して下さい……」

「ええいつ、貴様は黙つていろ……」

まるで取り付く島無しだ、だが……言わなければ……

「ならば此処で、名誉なる戦死を遂げられますか？」

顔色が見る見る青くなる……やはり……ただの小心者か……最前線に来るだけ褒めてやる……

「何をしてるつ、早く後退命令せよ。」

よしやく全軍が下がる……しかし、ブラッド・フォンリルの罠が上手く行くと良いが……レナード少佐から、バスク中将には絶対に耳に入れては為らないと命令されている。

(特務は一階級上だからな……)

まあ負ける策は立てないだろ？……

\* \* \* \* \*

### ヴァインSide

国防軍が後退する……しかし、こちらは動け無い何故なら光学迷彩機の多脚が現れたので、今それ達の対処に追われている。

まあ……もうすぐ全軍の投入だな……その時ヘカトンケイルの近くで大爆発が起こる。

ヘカトンケイルが地面に沈む……しかし上部はそのまま、落とし穴にしてはお粗末すぎだ……

\* \* \* \* \*

### ミカSide

ルイセ曹長やツバサ小尉にアレク准尉にフィル小尉……その他の隊員はない。

「ルイセ曹長、上からの指示は？」

「ダメです、全く応答ありません。」

「これは……いよいよ覚悟を決めろと言つ奴ね……そう思つた時、目の前に巨大な狼の蒼い魔獸が現れる。

「フイーナさん！僕は多脚を片付けます、フイーナさんは周りの雑兵を！」

「わかった、フェリオ君も十分注意してつ。」

大聖堂騎士団……が来てくれた、助かつた……あの無能親父のせいで危うく全滅する所だった……

「生きて帰つたら……大聖堂騎士団に転属しちゃうゾ」

「た、隊長……私達を見捨てるのですか？」

ルイセが涙目で見ている……ニッコリ微笑んで、私は宣言した。

「勿論、みんな一緒に騎士団に入れちゃうゾ」

ルイセを始め皆が和む……絶対に皆を連れて帰る、そう胸に決める。

チラッと騎士団の戦いに目を向ける……

「凄い……あれじゃ……」つちが雑兵……いやバスクのハゲが雑兵だ……

フェリオと言う魔獸を見れば解る確實に次々と、敵の多脚を片付け

る……そしてフィーナと呼ばれた少女もバイアネットを片手で撃ちながら、魔物達を圧倒する。

『フヨリオーっ、フィーナーっ、俺達も交ぜろーっ』

『そりそり、アタシ達もやるわよ。』

『零式の見せ場だぜ！』

騎士団の零式戦車隊が切り込んで来る、三方向に別れるあれが【デス・ハンティング】……

\* \* \*

## ルースSide

「カイル、レイン、デス・ハンティングを始めるぜー！」

「『了解！』」

まず俺が囮役になり敵を一人の待ち受けのポイントに誘い込む次に二人がそれを仕留める、今回は別のパターンを取る。

「敵集団を搔き乱せつ、はぐれた奴から片付けるぞ」

敵の集団を遮蔽物に偽りそうな岩や等を利用して、敵を搔き乱す狩

りの基本だ。

「レイン、そつちに多脚が行つたぜつ。」

『任せて、当たれーつ!』

脇腹を撃ち抜かれ爆散するキャンサー、ケンタウルスはカイルがあらかた片付けていた此処も俺達の出番は無いな……そう考えていたら、緊急通信が入る。

『ヘカトンケイルの生体式収束砲により……国防軍司令部壊滅! 総司令官バスク中将戦死のもよづー』

何だつて……司令部が壊滅だつて……ますますこちらの旗色悪くなつたじやあないか。

\* \* \* \*

同時刻国防軍司令部へ

アンドリュー・コレスSide

なつ……ヘカトンケイルが中途半端に地面へと沈む、まさか最初からこれを狙っていたのか? 少佐はなら急いで対応しないと……間に合つか?

「頭部に田掛け主砲及びミサイル一斉に斉射用意！」

「駄目です、間に合いません！」

「ば、こんな馬鹿な事があるかーっ！」

そして奴の放った閃光が俺が見た最後の光景だった……

生体レーザーがデスプリンガーの艦橋を貫抜いた艦橋が崩れ落ち大爆発が起きる続く一番艦「マドルウク」二番艦「ギガンティス」も同じ運命をたどった。

\* \* \* \* \*

イリア・キサラギSide

国防軍司令部が壊滅の報が私達の所にも入った。双眼鏡で確認するまでも無いはつきりと国防軍司令部の方向から爆炎が確認できる……あれでは生存者はいないだろ……

「アリシア……通信士、コレス少佐が……生きてるか確認してくれへん？」

エレノアさんがアリシア通信士に訪ねる、顔面蒼白で田は虛ろだ。

「ダメです、国防軍司令部からの応答はありません……」

すると関を切つたようにエレノアさんが喚く。

「嘘やつ、コレス……少佐の事ははうちが一番しつてる！あいつは……うちの教え子みたいな奴や！こんな……こんな事で死んでいい訳が無いやつ！」

普段なら私もエレノアさんの気持ちも分かるしかし今は殺し合いの最中……だ下手な慰めは、彼女を殺す事になる、私はエレノアさんの両肩を掴んで彼女をしつかりと見据え残酷な現実を突き付けるしか無かつた。

「エレノアさん、アンドリュー・コレス少佐は戦死したんです！死んだのよ！」

私を振り払いその場に、つずくまるエレノアさん……

「つかえつ、ぐえええつ」

彼女は嘔吐をして倒れる、顔色も悪い。

「衛生班、直ぐにエレノアさんを救護区に急いで！」

やつて来た衛生班に担架でエレノアさんが運ばれて行く……

「エレノア・アリアドネ中尉の参謀の認を一時解きます、アルト少尉……中尉の代わりに参謀代理を願えます。」

「了解しました、アルト・ファルゼス、エレノア中尉の参謀代理を拝命します。」

その時ルース大尉から通信が入る。

『……ルース隊至急応援を頼む！敵将のリガティが乗り込んで来やがつた……頭に気をつけろ狙われてるぞ！』

私は意を決して命令を出す。

「ミコラージュ・ウルフ隊出ます、フェンリル・ナイトは？」

「我々の直ぐ近くに部隊を展開しています。」

サラ将軍の率いる陸戦隊は私達の近くにいる……合流は敵を蹴散らしながら可能だ。

\* \* \* \* \*

第166空中機動艦隊

旗艦「ヴォークリング」

カール・フォートフェルトSide

「全艦、黒竜騎兵艦隊と連携しながら、敵艦隊を蹴散らせつ、今だ主砲一斉斉射じや！」

ワシ等の艦隊はバスクの若造を抑える為に派遣されたんじゃが……間に合わなんだ……まあ、ギザの手前までに敵を防げただけでも僥倖じやる。

「フォートフルト准将、エルランド中将より入電です。」

エルランド中将はワシの後輩で今は上司にまで出世した、まあ、あいつの部下ならワシも嬉しい、しかし余り良い兆候では無いのう……  
「フォートフルト准将、直ぐにウィルヘルム平原に予備の戦力を向けてくれ。」

エルランド中将の顔色が芳しく無いやはり……

「ワシの……いやエルランド中将の悪い予感が的中か……」

「この度責任はバスクを押さえられなかつた、小官に有ります。」

貴官の悪い癖だ、何でもかんでも自分でしょい込みたがる……

「ワシが救援に向かう……中将此処を開けても直しいか？」

「……厳しくなりますな」

「いやいや僅か六隻で十分じゃよ、あのヘカトンケイルさえ潰せば良いのじやからな。」

エルランド中将は、反対したもつと艦を連れて行けといふ返してやつた。

「亀」(トカゲ)紋章艦を十隻も連れて行つては、無能の證明となる。

「なるほど……ハハハハ、その通りですな……出すぎた提案でした  
……ハハハハ。」

「その通りじや、ワシ抜きで後のこの場合は中将にお任せする。」

さて、負け戦の後始末を決めるとして。

## 第14話～防衛戦～（後書き）

影が薄くなってしまったキャラ、名前だけのキャラはともかく登場しているメンバーも何とか活躍できる用に工夫していきます。描写を変更しました。

次回頑張って書きます。

## キャラ紹介③（前書き）

今回はお借りしたキャラクター紹介です。

いざれは敵役や主要キャラも紹介いたします。

一部キャラ紹介を変更しました。

## キャラ紹介③

ミカ

髪の色・金色のウェーブでロングヘア

瞳・茶色

口調・私

性格

厳しいが優しい面もある

キャラ設定

孤立していく所をフェリオ達に助けられる。

面倒見の良い隊長。

ルイセ

半獣人の狐娘

髪の色・赤毛

瞳・緑

口調：私

性格

おとなしく子供好き

キャラ設定

フェリオに気が有るが言い出せず仕舞い。

子供達に優しい。

ツバサ

性別：女

種族：妖狐

髪の色：ふわふわした金髪のロングヘアに狐耳

瞳：緑

口調：私

性格

楽しい言が大好きな悪戯っ子。

## キャラ設定

気に入らない相手に指図されたのが嫌いな、イタズラ大好き娘。

フィルミンア・ラウス・フローリン

髪の色：銀色のロングヘア

種族：魔族と人間のハーフの亞種で月狐族というめずらしい種族

瞳：赤と紺のオッドアイ

口調：アタシ

性格

元気なお転婆娘

趣味

魔法の練習と探検

キャラ設定

良い男の子を見たら即ナンパ

アレクトル・デュール・フローリン

種族：魔族と人間のハーフの亞種で月狐族といつめずらしい種族

年齢：18歳

髪の色：銀色のショートカット

瞳：赤と蒼のオッドアイ

口調：礼儀正しい僕

性格

賢く優しいが腹黒一面もあり。

趣味

剣術と昼寝

キャラ設定

システム上等なお兄さん

妹と同じくナンパ好き。

上記のキャラはレフェル様にご使用の許可をいただきました。

## キャラ紹介③（後書き）

次回頑張ります。

## 第15～撤退戦～（前書き）

投稿が遅れて申し訳ございませんでした。

カトラス様より神薙綾人のご使用のご許可を頂きました。

神薙綾人の名前表示を間違えて神薙俊人と誤って表示した事をお詫びいたします。

本作品PVが5000になりました。

これからも本作品を宜しくお願ひいたします。

## 第15～撤退戦

イリア・キサラギSide

もう戦域はめちゃくちゃだ、国防軍は壊滅状態で敵軍がなだれ込む、それを騎士団が迎え撃つ、敵軍の脇腹に突撃をかけて乱戦に持ち込んだ。

「神ヶの砦展開。アースガスル」

フェリオ君のスキルの一つ神ヶの砦を展開する、目の前に不可視の神壁が出現しあらゆる攻撃を無力化する。

「ぐつうううつ！」

爆発の衝撃が神壁に遮れるが相殺仕切れずに衝撃が伝わる。

♪フェリオ君無事？♪

♪はい、マスター。♪

念話で互いの無事を確認する。

＜此処は私が引き受けます、フェリオ君は敵の足止めをお願い！＞

＜了解です、マスター＞

私は目の前の魔物達の殲滅を始める……大体一人当たり30体が目安だ……

「ミコラージュ・ウルフ隊隊長イリア・キサラギ参る！」

私は意を決して魔物達に挑む…… フィーナ副隊長はリガティと戦闘に入つたらしい、私も今は自分の出来る事をするだけだ。

＊＊＊＊

フィーナ・ローズウッドSide

リガティ…… エウレニア帝国の飛翔將軍油断出来ない相手だ……

氷の槍を互いに投げつける、向こうが空にいるので当たらない……  
しかし黙つてやられ放しでは済まらない。

「「流石は氷結天使のフィーナだなつ。」」

「「私を知ってるの！？」」

氷の短槍をかわしながら叫ぶ、飛翔將軍リガティが私ごとき小物を  
知つてるなんて…… 以外と世界は狭いものね。

「君の主アルバート皇太子とは一度手合させをした…… 中々の人物  
だつた…… 残念だその時に君の話を聞いていた……」

攻撃が止むが隙が全く無い…… しかし負けて良い相手ではない。

「アルバート様が私の事を？」

「ああ……将来が楽しみだと黙っていました……さて、君の本当の実力を見せてくれ。」

変わった方だ、いやお互い様かも……並ば私の全力を出そう……でないと彼女はもちろんアルバート様にも失礼だ……

「分かりました、本気で行きます。」

シュー・ティング・スターを両手で構える……彼女の雰囲気が変わる……どこと無く私に期待しているのだろう……

氷の短槍をかわし、撃ち返すまるで……一田中彼女と戦ってる気分だ、しかし翼に狙いを定める……これで決着をつける！

「貰いましたーっ。」

彼女の翼を撃ち抜いた、高度が低かつたので地面に墜落仕掛けたが何とか降りてきた。

「うつぐ……翼が使え無くても……」

「いいえ……終わりです。」

私はシュー・ティング・スターを構え彼女に宣言した……既に戦闘はこちらに流れつつある……此処が終われば次は「ヘカトンケイル」だ……

\* \* \*

### リガティ Side

確かにフィーナ……彼女の言つ通りだ……もつ戦える兵は数える程しか残っていない……

(リガティ……絶対に死ぬな……勝手に死ぬ事は私が許さない。)

アルゼリアス様……我等の主の言葉が胸に突き刺さる……

「……総員直ちに武装解除せよつ、そして私を含め大聖堂騎士団に投降する!」

凛とした私の声がこだまする……私は飛翔將軍の最後の務めを果たした。

「分かりました降伏を受諾致します。」

フィーナ・ローズウッドはエルザリア紋章公国式の敬礼で答える。

ロイル皇王も愚かな暴君だな……彼女が自分に見向きもしない……くだらない理由で、反逆者に仕立て上げ自身の首を絞めている事に気づかないとは……

\* \* \* \* \*

## 救出艦隊旗艦「ヴォーアクリングデ」

カール・フォートフェルトSide

紋章機関に多少の無理をさせて此処まで飛ばして来たからのう、帰りは歩きかも知れんな……等と[冗談を考えていても始まらん。

「閣下、間もなく目的地が視界に入ります。」

「わかつた、モニターに出してくれ、それと臨時司令部に連絡はつかんか?」

やがてモニターに酷い有様が映し出される……まさに地獄絵図じやな……デスプリンガ一級地上戦艦が三隻が爆発炎上中で陸戦部隊は、まるで子供見たいに右往左往している、エウレニア帝国軍はヘカルンケイルが正面に向かって来ている。

しかし……ちと厄介じゃのこの大亀は、しかし頭を潰せばどうじでもなる。

「各艦紋章砲発射用意、本艦の連装式紋章砲の発射を合図にヘカルンケイルに、叩き込め!」

「了解、全艦紋章砲発射用意、繰り返す……」

しかしへカトンケイルの背中の生体レーザー砲が光り輝く……その

時、右の山の上から一條のエネルギー弾が甲羅「」と砲口「」と吹き飛ばす。

「……今じゃ攻撃せよ。」

六隻の空中紋章艦の一斉射撃で、ヘカトンケイルの頭部が吹き飛び、そのまま前に倒れ込む。

「フム、厄介な亀は何とかなつたな……それはそつと今の……攻撃はどの部隊からじや？」

「いえ、味方部隊で戦っているのは、大聖堂騎士団だけです……」

(では……一体誰が?)

そんな事より今は、この混乱をどうにかせんとな。

「敵に降伏勧告を味方全軍に直ちに戦闘停止命令と救援物資の投下を急げ！」

「ハツ、了解です。」

救援艦隊の攻撃によりヘカトンケイルは倒れた。

なおあちこち戦闘は散発的に続いていた……しかし降伏勧告と停戦命令が出され戦闘は次第に終息していった……

\* \* \* \*

さて、きわどい流れだつたけど間に合つて良かつた。

「うん、フェリオ君頑張つてるな……彼等の手助けは……大丈夫だな、ヴァイン副局長に挨拶するとしよう……久しぶりにフェリオ君の顔も見れるしね」

黒衣の少年は大聖堂騎士団の本隊に足を進めて行く……

その頃騎士団によく増援が遅れてやつて來た。

\* \* \*

神薙綾人Side

たつて馬鹿のせいで増援に行くはずが、残務処理に変わつちました……やれやれだぜ、その時、ハリアー輸送機のパイロットが俺に話しがけれる。

「神薙少尉、間もなく騎士団司令部に着きます。」

「ああ……わかった、所で俺達に指示は？」

別の兵士が俺の問いに答える。

「少尉はミコラージュ・ウルフ隊に出頭せよとの辞令です。」

「ミコラージュ・ウルフか……そいつは、ライラバル兼先輩のエレノアさんも配属だったな……」

やがて輸送機は垂直に地上に着地する、俺はミコラージュ・ウルフの作戦ポイントを聞いりと現場の兵士に尋ねる、しかし返ってきた答えには正直驚いた。

「あのエレノアさんが、倒れただってー?」

「はい、自分も信じられませんよつ、此処だけの話しだ……あくまでも噂何ですが……」

その噂も俺にとつては信じがたい物だった……

「コレス少佐が……」

「国防軍のダチの話しだす……間違い無いそつで……」

歯切れが悪く答える兵士正直、あの無能親父の元に配属なんて何かの冗談としか思つて無かつたが……

「エレノアさ、いや參謀は?」

「第10救護所です……」

「ありがと、直ぐに行く。」

俺は直ぐに第10救護所に向かった……

\* \* \*

エレノア・アリアドネSide

「う、う……ん。」

「エレノア中尉、意識が戻られましたか？」

頭が……ズキズキしとる……まるで一日酔いや……身体も鉛の錘でも張り付いてる、みたいや……此処は……野戦病院か？衛星兵に尋ねる。

「つひが……倒れてどれ位経ったんや？」

「まる二三日間です、覚えていませんか？」

まる二三日も寝込んだやつたやで！？

「せ、戦況は？戦いはどうなったん？」

「お、落ち着いて下さいー説明しますからっ。」

気が付けば、衛星兵の両肩を激しく揺さ振つとつた、彼女に自分の

非礼を詫びる……そん時意外な人物がうちの前に現れた。

「よつ、久しぶりエレノアさん。」

「あ、綾人！？どうして此処におんねん？」

確かに……今は補給隊に居たはずや……それに……うちの思考を遮つて綾人が説明する。

「まず、戦いはミュラージュ・ウルフのフィーナ副隊長の活躍と、フォートフルト准将の増援がきて辛勝でこっちの勝ち、それから俺が此処に来たのは司令部の命令で詫け。」

「国防軍の敗残兵は？」

「勿論生き残った連中はギザまで撤退中。」

「そうか……無事生きて帰った連中もいたか……

「そうそう、これエレノアさんのボーイフレンドさんからの贈り物」

「

うちに、ボーイフレンドー？だ、誰や？そんな命知らズ……

渡されたのは、綺麗な紙箱と手紙が一通だけ……贈り主は……ガレスからや。

「確かに渡したぜ、ああ、それと俺も一言だけ、少佐の事は残念だ、けどエレノアさんは生きてる、そして生きて彼氏の所に帰る必ず……なつ。」

「／＼／＼／＼。それ綾人……アンタうちこ気に使ってくれてんの？」

「相変わらず、この男は掴みづらー奴や……」

「じゃ、俺は退散するから、Hレノアさん……」

「綾人、何や?」

「騎士団本部にもどつたら、【燃え】と【萌え】の討論会やります

」

「アンタらしいな……」

うちに背を向けて片手を振つて救護所を出していく綾人、彼なりに励ましてくれたんなや……手紙に田を通す……内容は以下の通りや。

手紙

『Hレノア……済まない本当にう少し早く渡したかった。』

(ガレス……なんで謝るん?)

『その……お前の誕生日に渡すつもりで造っていたが……遅れちまつた……本当に済まん。』

(うひの誕生日?)

紙箱を開けて見ると中には綺麗な木製のネットクレス風の鳥の飾りがあつた。

『その鳥の首飾りは、幸運のお守りだ、今……いや、これからも必ず必要になる、そう思つて造つた……俊とか言う男が俺の所に来てこつそり教えてくれたので、急いで造つた……もし俺に出来る事が、あるなら迷わず俺も頼れ、後無事に帰つて来い。』

ガレス)

「／＼＼＼。アンタ……本当に不器用やな……」

手紙が震んで見える……自分で泣いてるのが解る。

「ええよ、アンタが待つなら、つちも必ず帰つてアンタの想いに答えたる。」

さて、皆に心配掛けたし俊にも、い・ろ・い・ろ教えて貰わなかんな。

\* \* \*

ミコラージュ・ウルフ隊前線司令部

神薙俊人Side

さて、イリア隊長に挨拶を済ませて、我等がアイドルのフューリオ君に特製のお菓子を披露した。

(イリア隊長は最初は、不満そつだつたが、俺が料理店で店の親父に仕込まれたと話したら、急に野菜のお菓子をフューリオ君に頼むつて言われたから、頑張つて造つたぜ。)

ちなみにお菓子はキャロットケーキやパンプキンクッキー等だ、楓にもレシピを教えてやる約束があるし……意外だったのがイリア隊長が俺に料理の弟子入りをしてきたな……よし教えて早く上手になつて貰おうと……

「綾人さんどうかしました？」

「いや、それよりお菓子美味しいか？フューリオ君。」

「／＼／＼。はい、美味しいです、それから名前は呼び捨てで良いです！」

よしよし本部の皆えのお土産……フューリオ君のお菓子美味しいの笑顔写真を早速隠し撮りだぜ！

「綾人！ちょっとお話ししようか？」

「げつ……」

\* \* \*

## フェリオSide

綾人さんが、笑顔だけど怖いエレノアさんに猫掴みで連れて行かれました。

「でも、美味しいですよ」のお菓子

これなら僕の嫌いな野菜が好きになりそうです～

\*\*\*\*\*

## エレノア・アリアドネSide

綾人を引っつかんで、人気の無い部屋にほうり込む……此処やつたら邪魔は入らへん。

「綾人……お惚け無しで、聞かせてや？」

「やつぱり、バレタ？」

俊は悪く無い……けど……

「つちが納得出来る答えだしてや……」

「コレス少佐の件でへこんでる所にガレスの贈り物の件や……サプライズを利かせてうちを元気付けた綾人を責めるつもりなんて無い……

「手紙の日付がおかしいから?」

「うひがもう少し、舞い上がってたら氣付かんかった。」

手紙の田付は昨日やうちの誕生日は今日や……ガレス、アンタ芝居下手や。

「ガレスさんは、俺の提案に乗つただけだ。」

「せや、コレス少佐の事はアンタが誰に聽いたかは別にかめへん……何でこんな芝居打つたん?」

俊に何時ものキャラキャラした空氣は無い……真面目な雰囲氣や。

「エレノアさんに早く立ち直つて欲しいから……かな。」

そつか……

いきなり、綾人の手がうちの頭を優しく撫でる……

「／＼／＼。……て、子供扱いすんな……」

「しない……慰めるのは、ガレスさんに頼んだり?」

「わかつてゐる……長くなるけどガレスがうちの所に来たら……思いつきり甘えるわ……」

うちが甘えて良いのは、綾人ではなくガレスだけや……、ありがとうやで

しかしこの後、綾人はミューラージュ・ウルフの全員に声をかけて、誕生会を開いてくれたや……

綾人の手料理やお菓子のフルコースで賑わったな。

やつぱり侮れない奴やで綾人は……

第15～撤退戦～（後書き）

次回頑張ります。

誤字を修正しました。

番外編・～エレノアさんの誕生会～（前書き）

大聖堂騎士団がPV5001のヒット数になりました。

そこで前話の物語の番外編を書き加えました。

これからも本作品を宜しくお願ひいたします。

少し描写を変更しました。

## 番外編・～Hレノアさんの誕生会～

Hレノア・アリアドネSide

さつさき頭にきて綾人にハツ当たりに近い事したなあ……ハア～～ツ。

（はあ～うちを励ましてくれた、綾人にあんな仕打ちしたんや……綾人怒つてるやろな……）

つい考えこんでしまった、綾人の性格やから、何時も見たいに『Hレノアさん～モフモフの素晴らしい』教えてやるよ』

『じゃあ、うちは燃えの素晴らしさ教えたるー』と言つたからな……つけが雲隠れしたら後でがつかりされるのも後味が悪すぎる……

あかん、此処で皆に背を向けて逃げ出したら……綾人に悪いし、何より皆に申し訳が立たん……

指定された場所は、地上戦艦ティアマトの食堂や……しかも、うちに拒否権は無い。

「／＼＼＼＼。此処で悩んでもうちらしく無い、それにわざやかやけどせつかくのうちの為に開いてくれた誕生会や、楽しまんと皆に悪いわ。」

そんな時フィーナ副隊長に、ぱつたり会つてしまつた……彼女と視線が合つ……

「Hレノアさん、どうしたのですか？」

「いや……副隊長……その……」「じゅしゅしゅ……」

フイーナ副隊長の顔が不適な笑みを浮かべる……「うちは蛇に睨まれた力エルや……

「な・る・ほ・ど」

「な、何がなるほど……なんよ副隊長?」

うあっ、あ、あんた……いつの間に悪人顔出来る様になつたん? そ  
う普段の愛らし笑顔<sup>かお</sup>が消え、副隊長の顔は……「うちがワルを尋問す  
る時の表情や……

「エレノアさん、今、貴女は迷っていますね?」

「――。ふ、副隊長……あんた、うちの心が読めるんか?」

なんでニヤリとなるなん? なんで……うちの腕掴むなん?

「エレノアさん~ 酷さんの所に」案内しまーす

「愉しんどるやろおおおお、あんたあああつ!」

ぐいぐい引っ張つて行く我等のフイーナ副隊長……

以前彼女を修練場に引っ張つて行つた意趣返し? いや……マジで愉  
しんどる……そつこにうするうちに目的地に着いた。

「うふふ、もう逃げられませんよエレノアさん~」

「確かに、逃げたらあかんな。」

(「の、小悪魔娘……）

「じゃあエレノアさんは此処で待つていて下さい。」

さつきまでの黒い笑みが消え、楽しそうに副隊長は食堂に入つて行った。

「すーう、はーつ、すーう、はーつ、」

（良し気分は落ち着いたな……綾人がどんなサプライズを仕掛けても、もう大丈夫や！）

意を決して食堂のドアを開ける……

クラッカーと紙吹雪にくす玉……「うちは動物園にやつて来たパンダか？おまけに垂れ幕に『祝エレノアさんお誕生日おめでとう！』と書かれてあつた。

「／＼／＼。綾人／＼いくら何でも、これやり過ぎちゃう？」

「そんな事は無いぜ、エレノアさん」

「そいつ、新人の配属祝いと副隊長の誕生会を兼ねてだからね」

新人歓迎会と兼ねてる？よく見たら確かに新人歓迎会の幕もあつたでもこのノリは……眞頃テレビ番組のバラエティーでやつてるのと同じノリやないか？

「綾人……それに皆ありがとうございます、／＼＼＼＼。」

「誕生日おめでとう～」

「お祝いしちゃうゾ」

「「おめでとう～」」

と新しく配属された、ミカ隊のメンバーを始め全員が祝つてくれた。

「そじゃあ、次ぎは新人歓迎会だ！各自自己紹介をお願いするぜー！」

いきなり綾人がマイクをひとつからか持ち出して来た。

そして自己紹介が始まる。

「僕はアルト・ファルゼス小尉です、宜しくお願ひいたします。」

「／＼＼＼。わ、私はリフィア・ウォード小尉です、よ、宜しくお願ひします／＼＼＼。」

「私は～楓曹長です～宜しくお願ひします～」

「私はアリシア・ハーデウェル小尉です。よろしくお願ひします。」

「……私はレイラ・フォーエル小尉……よろしく～」

「オレはスコット・ベール準尉ス、以後よろしくス」

「アタシはシリビア・フォート曹長だよろしくな」

「自分はレイス・マカリスター軍曹であります、よろしくお願ひいたします」

「ぼくはジャック・フォルト伍長です、よろしく」

「私はマリアベル・アミコレット小尉だよろしくな」

「俺はロバート・ミコラー曹長だ、此処は変わり者だらけだから気楽にな」

「おれスマス・ジョンズ伍長だぜ、よろしく」

「私はフィーナ・ローズウッド中尉です、この隊の副隊長をまかれています」

「私はフレノア・アリアドネ中尉やこの隊の参謀を勤めとる、よろしくな」

「僕はフエリオ・キサラギ伍長です、よろしくお願ひします」

「私がイリア・キサラギ中尉です、このコーラジュウルフ隊隊長をしています」

「元国防軍のミカ大尉ですよろしく」

「私はルイセ醜態ですよろしくお願いします」

「あたしツバサ小尉よろしく」

「僕はアレク准尉ですよろしくお願ひします」

「ボクはルフュ准尉ですよろしくお願ひします」

「アタシはルフュ准尉ですよろしくお願ひします」

ミ力隊のメンバーのルフュ准尉は、はぐれいた所をフェンリル・ナイトに保護されとつて、こちらに配属された、兄貴のフェイも喜んでいたし、本当によかつたで……

「では、此処で主賓のヒレノアさんに皆むんこじ挨拶をお願いします」

綾人ーーーうちに振るなーーー、ただでさえ……色々皆に迷惑掛けたのに……皆が見てる……、ついに退路はないんやな。

綾人からマイクを受け取る全員の注目がつむに集まる。

「／＼＼＼＼。えーと、うちがご紹介にありました、エレノア・アリアドネです……とにかく皆ありがとう……そして我が隊によつこや！ミ力隊の皆さん、これからもよろしくやつ。」

拍手が起じる……ふと食堂の奥を見るとコレスが居た……田線が彼と会つ……何やつかりに別れを告げに来たんか……アンタらしいわ。

(コレス……ゴメン……、うちアンタを助けられんかった……)

『いえ……ヒレノアさん貴女は十分頑張つてくれました……あの時も、攻撃の巻き添えになつた兄を必死なつて助けようとしてくれた

……』

(違う……今は彼等を見殺しこした、罪深い女や……)

『また、わざわざ自分を責めて……貴女の仲間やイリア隊長に、罰として、Hレノアさんの秘密全部、話しましようか?勿論夢の中ですけど。』

(せやな……今のわが隊長や監が西へ向いてる……)

『ガレスさんだけですよHレノアさんが、甘えて良てのは』

(「ふふ……わわわ……）

彼と話してゐる間に田が霞んで来た、水分泣き出すやうな……そんな、うちにガレスは微笑んで別れの言葉を口にする。

『じゃあ俺は先に逝きますね……向ひで再開しましよう、でもHレノアさんはお嬢さんになつてガレスさんと一緒に俺に会つに来て下さい。』

(ああ……誰か分からん程歳とつたら会つに行へばへわ……そようならやガレス……)

『ええ……わよつなりです……Hレノア、……わざ』

ガレスの姿が消えて行く……綾人が心配わざわざを覗き込んでる

「Hレノアさんどうかしたのか?」

.....

「『メン、……少しほけつとしてた、さあ、わざやかなやけど歓迎会と誕生会楽しもやつ！』

皆がコップを持つ……ビッシと決めたる。

「それじゃあ乾杯ーーー！」

「「かんぱーーー！」」

勿論酒を飲める組とジュース組に別れてる。

うちは、まだ飲めん組や当然フェリオはジュース組になる……隊長は……飲むんやな……まさか酒に強いとは思わんかった。

しかし楽しい会に綾人はやつてくれた、得意の手品で楓・フェリオを始めて、てミカ大尉まで～っちなみに、手品と言つのはうちの主観や……一体どつからか、油揚げや肉に猫じやらしにボール、あつ、足型取るために色紙まで出した。

「アハハツ、綾人らしいわ」

「／＼／＼あーーーつ、フェリオ君、大好きなお肉、ヒック、貰つたからって色紙に、ヒック、お手しない！／＼／＼／＼

隊長……酔つてやね……ロバートさんが隊長に話し掛ける。

「イリア隊長、何だつたら俺達が隊長の話し相手にならうか？」

「ヒック、／＼／ロバートさん、ヒック、あんな訳分かん無い男にフェリオ君盗られたーつーうあーん／＼／＼

「ロバートさん、僕も隊長に付き合います。」

アルトとロバートさんが互いにアイコンタクトでやり取りをする。

(すまねえ隊長補佐殿)

(いえいえ、たまには息抜きも隊長に必要です )

すっかりトラ化した隊長を、なだめに入るアルト達を見送り視線を綾人達に戻すと、綾人が手品で会場をさらに盛り上げている。

トランプにハンカチに鳩まで……綾人アンタその内プロになれるな  
……見事や

楽しい歓迎会とうちの誕生会ありがとうございます。

番外編・～エレノアさんの誕生会～（後書き）

次回本編に戻ります。

これからも物語は、まだまだ続きます。

次回本編頑張ります。

内容を変更しました。

## 第1~6話～天空の玉座～（前書き）

戦闘のイメージは映画インテペンティンスを参考にしました。

番外編のシリアス部分を「ちゃんと」しました。

描画を修正しました。

## 第16話 天空の玉座

エウレニア帝国ギザ方面地上進攻軍とウルゼリア公国・ドラグニア帝国連合軍の戦闘が繰り広げられている頃……

ドラグニア帝国空中防衛艦隊

第10分艦隊旗艦「レッヂ・ドラグーン」

ミネルヴァ Side

私はこの艦隊の参謀の一人として旗艦に乗り込む事になった。……作戦前に戦隊司令に呼ばれた、今後の打ち合わせだろか……

「ミネルヴァ・V・アースロイル少佐ただいま出頭しました。」

司令官室のドアを開き、部屋の中に入り敬礼をする、中には初老の上級士官が目の前に居る……グスタフ・クライツエン准将だ。

「忙しい所済まんな少佐。」

「いえ、所で、用件は何でしょう？ 閣下。」

閣下と我が一族とは長い付き合いだ、しかし今は作戦行動中だ、茶飲み話に呼んだのは無いだろ……

「さて、用件だが……これが司令部から届いた。」

閣下は、やつて一通の封筒を私に渡す。封を開けるとやはり

「異動命令ですか？」

「やつだ……と言つても畠違いだがな。」

畠違い？作戦情報部だろか、全く余計な事をする実家だ……

「……大聖堂騎士団にですか？」

ウムと頷く准将、しかし氣になる私は彼等の事は知つてゐるが……  
向こつは私の事は知らないはず……

「実は、この件は私が君を推薦した。」

「……！？」

正直驚いた……まさか閣下直々の推薦だとは、しかし何故私を？

「君の為だったが、少し余計だったかな？」

「私の為？」

その時、作戦開始のアラームが鳴り響く、無駄話は此処までのようだ、私は准将と共に艦橋に向かった。

\*\*\*\*\*

## 天空の玉座

アルゼリアスSide

ドラグニア帝国はやはり艦隊を繰り出して来た、ヨルムンガンド級を50隻にアーク・エンジエル級空中空母を20隻そして通常艦隊を500隻……妥当な判断だな。

「IJの、玉座を攻め落とすには数か少ないですか？」

「数より質と言つ事もある、まずは向こうの出方を見よう。」

さて、大陸最強の空中艦隊の実力を見せて貰おうか？

\* \* \*

ドラグニア帝国空中艦隊

総旗艦【バルバドス】

ブレフ提督Side

「全ヨルムンガンド級は全艦、紋章砲発射準備用意！」

「ヨルムンガンド級は全艦紋章砲の発射体制に移行……」

「全艦艦体固定」

「安全装置解除まで約15秒……カウントダウン継続」

「発射秒読み開始……5・4・3・2・1、今です！」

「全のヨルムンガンドは紋章砲を発射せよ！」

「全ヨルムンガンドは攻撃開始せよ！繰り返す、攻撃開始せよ！」

50隻のヨルムンガンド級から紋章砲が放たれる、しかし命中直前にシールドに阻まれ水面の波紋の様に、エネルギー弾が弾かれる。

＊＊＊

ミネルヴァ Side

馬鹿なつ……50隻のヨルムンガンド級なら、ちょっとした半島位軽く消し飛ばす事が出来るぞ……それを無力化……だと。

「司令部より入電へ直二、全艦ハ対要塞戦二移レ》以上です。」

「オペレーター司令部に返信了解したと伝える」

「ハツ、了解です」

全艦が雲に紛れて要塞に近づいた時、本隊日掛け敵要塞砲が放たれる！

瞬く間に100隻の艦艇が消滅する……まさに悪夢だ……

「敵艦隊接近！」

「各艦、各個に応戦せよ！」

一斉に敵味方共に砲撃を始める……前線勤務に志願した事に後悔はない……しかしこれ程凄まじい戦いに成るのは……正直思わなかつた。

「敵艦の主砲弾来ます！」

「シールド展開、急げっ！」

「ダメです、間に合いません！」

「各艦衝撃に備えよ！」

激しく艦橋が揺れ私は床に叩き付けられて氣を失つた……

\* \* \*

「うう……」

一体どの位気を失っていたのだろう。ブリッジ内を見渡すとグスタフ・クライツエン准将と艦長や副長が倒れている。三人とも即死だった。旗艦の中で私が最高責任者になった。

「全艦に連絡。反撃をしつつ空域を離脱せよ。」

今のうちに戦力の立て直しをしなければ、確実に袋だたきに合つ。牽制しながら後退命令を出す。

「オペレーター。各艦隊の状況は？」

ブリッジ内の混乱も終息し、なんとか体勢を立て直す。しかし敵の艦隊が圧倒的に優勢だ。

「指揮下の36艦の内健在なのは26隻です。」

戦況図からも敵の反応が圧倒的に多い。味方も、もはやこれまでと判断し各自撤退を開始している。

「敵艦隊、我が艦隊に向けて接近中！」

「牽制しながら退却を優先せよ！」

付け込まれない様に、全艦隊の速度を一定に保ち、タイミングを見計らい無事に撤退しようとしたら敵の航空機が迫つて来る。

「対空砲火、迎撃急げ！」

「了解、対空砲撃ち方始めつ。」

各艦から機銃の雨嵐が敵戦闘機に向かつて放たれる、「レッド・ドラグーン」に向かつて敵機が迫つて来る弾幕の雨嵐の中を三機が突つ込んで来るが一機が撃ち落とされ、一機がミサイルを放つた。

「敵のミサイルを撃墜してつ！」

「ありつたけ前に叩き込め！」

ブリッジの防弾シールドを下ろすその直後前方でミサイルが爆発した、衝撃で激しく船体が揺れる。

「被害は！？」

「被害は、ありません」

今のは雲の中からの伏兵だった……向こうにもかなりの将がいる様だ……やがて通信が回復した。

『レッド・ラグーンそちらは無事か？』

「ハツ、クライツエン准將閣下・バーゼル艦長・ルフト副長が戦死されました……今は私ミネルヴァ・・・・アースロイル少佐が臨時指揮官として指揮を取つております。」

今の状況を簡潔に臨時指揮官に説明する……この敗退で我が空中機動艦隊は、しばらく大規模な作戦は出来ない……この事を上に報告して今後の方針を決めなければ為らない。

＊＊＊＊

### ミネルヴァ Side

あの敗退から一ヶ月が経過した、あの敗退から一ヶ月が経過した、そして今私に異動命令が下された、人事部のカイト中将が本題を切り出す。

「さて、ミネルヴァ少佐、君には大聖堂騎士団の特務部隊に行つて貢う事になった。」

「はい……」

事実上の厄介払いか……と思わず顔に出る、しかし意外な答えが返ってきた。

「何か誤解があるようだな、少佐？」

「誤解……ですか？」

「大聖堂騎士団は現在慢性的な人手不足だ、そこで各同盟国から優秀な人材を出す事になった、サラ将軍については知っているな？」

サラ・フェンリル……半魔人の女將軍だ元は、旧ドラグニア帝国の四將軍の一角を努める魔族の將軍の名前だった……魔龍將軍・魔獸將軍・魔狼將軍・そして……飛天將軍しかし長い歴史の中でほとん

どの一族は廃れ今や形だけの存在だった。

「サラ将軍が現れるまで魔狼將軍の座は文字通り空席でした……」

「その通り……他の二将軍の席は永久に空席だな、まあ我が帝国には魔族の皇帝や將軍はもう必要としない……」

カイト中将が私を見据える、そして静かに言い放つ。

「君の意見に不満を漏らす者が多数居る……戦況は君のレポート通りなのにな。」

「……」

「名田は厄介払いだ、しかし騎士団なら話は別だ。」

「私のレポートの内容の正しさを証明せよ……ですか？」

「話しあは以上だ」

無言で敬礼をして人事部を後にする。

セドランス提督に別れの挨拶をしておくか……

私は提督の執務室に向かつ事にした。

\* \* \* \*

大聖堂騎士団内独房

リガティ Side

私は投降した後騎士団の治療を受け、この地上戦艦の割り当てられた個室に居る。

外の見張りが誰かと話しをしている……声からして女か無用心だな

「困ります、エレノア参謀殿。」

「ええやん、中の彼女に少し話しあしたいんや、書類は後日渡すさかい……」

エレノア……だとミコーラジュ・ウルフの女参謀か?しかし私の尋問だらうか?やがて扉が開く……

「うちは、エレノア・アリアドネ中尉や無礼を承知で聞くで、アンタが飛翔将軍リガティか?」

「そうだ……エレノア参謀」

「そこに座つてかまへんか?」

「勝手に座れ」

変わった女士官も居たものだな……普通ならもつと高压的に尋問す

るのだが、彼女は席に座り私に視線を向ける、しかしその視線は敵意とは違う物だった。

「アンタ喉渴いてへんか？」

「別に渴いていない。」

そつか……といつて彼女は隠していた水筒を出す。……毒？ 逸れとも白剤か？

部屋に用意されていたコップに……いや、自分のコップに先に注いで半分飲み干す……

「どうや? 变な物は入れとらんで」

「……その用だな」

私のコップに中身を入れる緑色の飲物だ、確かに東洋で【抹茶】と呼ばれていたな。

「先に呑つとくでかなづ苦いんやそれ」

「知つている」

確かに苦い……普通は【お茶菓子】を飲んだ後食べるのだが、生憎彼女は用意していなかつた。

「」の抹茶は、コレス少佐が、是非飲みたいと言つていた物んや

「変わつた男だつたんだな」

「レス……アンドリュー・レス少佐か……東洋の【将棋】やチヒスが得意だつたらし」

「エレノア……君は敵討ちに来たのか?」

戦死した者の名前を出す時は敵討ちか弔いの一つかない。

「そんな時代遅れの真似なんかせえへんよ」

「さうか……なら何故」

「アンタ等、国防軍と裏で繋がつてへん?」

敵と裏でつながるほど、それが聞きたいのだな。

「そうだ……確かに協力者は居る。」

「誰なん?」

彼女の目が鋭くなる。……そうか……さう言つた事か……なら答へば

「復讐の為だけに来たのなら帰れ!」

と言つてやる。……すると彼女は笑い出す。

「あははは、復讐やでせや、つあはレスの敵討ちがしたいんや

「その先にお前の未来は有るか?エレノア!」

つい毗り付けの口調に代わっていた……彼女の笑い声は明るいしかし……

「アンタも、うち等の隊長と同じ不器用な人やな」

「命を粗末にするよりマシだ」

すると今度は真顔になつて私を見据える。

「うちの復讐はコレスが怒るけど、哀しむ様な真似は絶対にせえへんー。」

バンと両手で机を抑えるその両手が僅かに震えてる……

「どんな内容だ、君の復讐は？」

「あの時ヘカトンケイルが陥没したな、そんな中途半端な爆破であれが止まる筈が無い！詰まり……そつ言つ事や」

「我々だって、あんなふざけた作戦は立てない」

詰まり内通者が小細工した事だ……しかし教える前に彼女の真意を聞く必要がある。

「その日は肯定やな、まずアンタ等に裏切った相手のリストをこちらで作る、それが終わったら連中が行動に出る前に全員を捕まえる……それがうちの敵討ちや、納得したか？」

「分かった、しかし私を責めないのか？」

「アンタは真っ直ぐな武人や、逸れにあの戦い、あれは一部の連中の独断やろ？違つか？」

「そりだ……と思つ、しかし詳しい事は……知らない」

「そりか……なら厭な話はこれで終いや、後は……」

「ヤリとエレノアが笑う少し彼女を買ひ被り過ぎたか……？」

「アンタの苦手なそうな話し……詰まり自分の事互いに詰さんか？」

「はあ？」

この後私は彼女に、彼女も私にそれぞれの生い立ちを話し合つた。

エレノア……よく分からん奴だ。

第16話～天空の玉座～（後書き）

次回頑張ります。

## 第17話～魔狼艦隊～（前書き）

更新が遅れて申し訳ござりませんでした。

これからも執筆を頑張ります。

本作品をこれからも宜しくお願ひいたします。

描写を修正しました。

## 第17話「魔狼艦隊」

カオス・フェンリルSide

さて俺は今辺境の警備に来ている、ミュラージュ・ウルフの艦隊からも一隻が訓練を兼ねて臨時編成されている。

「全艦配置について」

戦況図を見ると全艦の配置が完了した、今回の演習の目的は、【ミカ大尉】と【神薙綾人中尉】の指揮官能力のテストだ、さてミュラージュ・ウルフの実力を見せて貰おうか？

\* \* \*

神薙綾人Side

割り当てられた艦艇を編成して、指定ポイントに向かうエレノアさんの期待に応えるために頑張つて、カオス副将に勝たなくてはいけない。

「まずは機動性の高い艦艇から片付けて行くか。」

『綾人の意見に賛成』

ミカ大尉を始め全員が賛成してくれた。

『では作戦開始』

「了解」

しばらくして仮装敵艦隊の動きが変わる、陣形を変えているのだ。

『じゃあ、こいつも陣形を変更するよ』

「ああ、イリア隊長達は居ないけど頑張りつ」

やがて双方の陣形が完成した、向こうは槍の先に似た陣形を、こちらは三日月陣形だな……さて、カオスに負けない様に頑張らないと。

\* \* \*

カオス・フュンリルSide

向こうは三日月陣形か、しかし突破すれば脆い陣形だな……良し一点点突破するぞ。

「全艦一点突破だ！両翼は敵の両翼にぶつけるんだ」

「了解しました」

さて上手く行くと良いが……相手はあの一人だから油断出来ない。

先頭集団が敵と交戦開始可能な距離に近付く……

「今だつ、攻撃開始！」

「攻撃を開始します」

模擬戦の撃ち合いが始まる、今回の訓練は二人の評価試験も兼ねている、試験官としてはそう簡単に負けてやれないな。

＊＊＊

神薙綾人 Side

「ミ力大尉、今だぜ」

「りょーかーい」

素早く艦隊を一手に分け左右から両翼を押さえに掛かる、向こうは一点突破を狙っていたので直ぐには対応仕切れない。

『全艦一斉射撃用意……斉射！！』

「撃ちまくれーーっ！」

左右から一斉に攻撃を開始する、しかしカオス副将も素早く艦隊の体勢を立て直し中々勝負が着かない。

『よーし、下から攻める！旗艦に攻撃開始！』

火線が旗艦に集中しカオス艦隊旗艦の反応が消滅する演習終了だな。

その時緊急通信に入る、発信者は……【大和王朝国家】の王族専用儀礼艦「アマテラス」だつて！？

『演習は直ちに中止して救難信号のポイントに向かう！』

「了解です」

『了解』

でも誰が敵対国家に来るんだ？もしかしたら亡命者か……いや、とにかく現場に向かおう、そうすれば答えは解るはずだ。

\* \* \*

大和王朝国家王族専用儀礼艦「アマテラス」

海原宗一郎 Side

いきなり問答無用で砲を向けて来ると……非常識極まりない、横目で姫様に目をやる、不安な表情が浮かんでいる……しかしあのまま王朝国家に居ては身の安全は誰にも保証出来ない、だから姫様を説得して亡命をお勧めしたのだ。

俺は素早く姫様の方を向いて頭を下げる。

「IJのよつな、大変危険なお田に姫様を逢わせてしまつて申し訳ござこません……」

「海原司令官……詫びるのは、わたくしの方です……一族に相応しくない血を王族に混ぜてしましました。」

しかし……あれは姫様の責任ではない、あれは王の身勝手な行動で姫様の母君を妻に娶つたのでは無いか、しかもまだ産まれたばかりの姫様まで自らの側室に迎えた……

「自業自得……」

思わず口に出てしまつた……

「……紅姫」

彼女の蚊の鳴く様なつぶやきは誰にも聽こえなかつた。

「通信士、こちらからの呼び掛けの応答は?..」

「駄目です全く、ありません……」

敵は双胴爆撃機の「ヒュドラー」を改良した飛空挺「サラマンダー」四機で向かつた来た、本艦の武装の火力は低い……機動性だけが頼りになる。

高速で目標に接近して機関砲やミサイルの雨嵐を浴びせる防空戦闘艇……機動性で逃げの一手段だな。

その時通信士が別の反応の報告をする……

「大聖堂騎士団より入電！」

「降伏勧告か？」

「いえ、コレヨリ、貴艦ヲ支援スル……以上」

どういう事だ？ 欺瞞情報か？ しかし連中は同士討ちを始め……いや我々を取り囲む様に展開しながら退避行動をとっている。

\* \* \*

カオス・フェンリルSide

何とか間に合つたな、しかし……ブライド・フェンリルもとうとう本性を現わしたか……

「しかしこのままでは、外交問題に……」

「仮に彼等を見殺しにすれば世界中から批難の雨嵐だ、また保護すれば襲撃と誘拐犯だな……つまり」

「我が国との戦争の口実が欲しいと？」

「多分な、良し攻撃開始つ、追い払うだけでいい」

主砲がヒュドラーを捉え砲撃を開始する、四機の内一機が被弾して一機が森に不時着する。

「アマテラスに、コレヨリ当該空域ヲ離脱スルと云ふ」

「了解です」

その時ヒュドラーが一機アマテラスに突っ込んで行く……まづい体当たりか！－

\* \* \*

神羅綾人 S.i.d.e

まづい体当たりか！－なら全力を挙げて防ぐだけだつ。

「各員、衝撃に備えろ！－」

「は、はい」

アマテラスとヒュドラーの間に割つて入る、ヒュドラーと激しい撃ち合いになつた、そしてヒュドラーの「ツクピット」を撃ち抜く、ヒュドラーは湖に墜落し爆発炎上した。

「ふう、本艦の被害は？」

「装甲が何枚かやられた程度で済みました。」

アマテラスを空港に誘導する、さて厄介な事になりそうだな。

エレノア・アリアドネSide

アマテラスの亡命騒ぎから一週間が過ぎた、ブライド・フーンリルは雲隠れをして現在追跡中で、行方が全くわからん……リストにあつた下つ端を捕らえて、白状させたらコレスは、いよいよ利用されたらし……

アマテラスの方にはサクヤ姫がおられた、意外にも本人の意志で【亡命】したと言ひ事らしい……まあ、姫様ご本人に確認すれば解るやろ……

うちの一 番の難題は……

「「何や——、」こんな古文書解るか——、」「

「だから……漢字だつて行つてるでしょ!」「

「「力ク力クしてて……ぐあああつーあ、暗号や……」「

「漢字です……エレノアさん……」「

と、イリア隊長や皆……止めに……おかんがツッコム……おかんはうちの漢字を教えに来ている、こうなつたのは、サクヤ姫が『紅姫に逢いたい』と、うちの大和王朝時代の名前でつむを指名した……

からや。

だから……漢字の勉強中や……綾人は笑いながらも親切に教えてくれた、イリア隊長は大和王朝の国籍は無い……楓と清音とうちは永くに還れない国やでも、うちの国籍はまだ有るから…… じつ難儀している……

そして、あの武官の女装束……はつきり言つたら退魔師や……他の皆が見たら、大爆笑やつた……イリア隊長やフェリオ……は笑いをこらえていた、けど……爆笑やつた。

（うちかて、あんな清楚な装束は、全く・これっぽちも、に・あ・わ・へ・ん・で！）

まあ……サクヤ姫や局長の為やからなつ、でなかつたら……あんな服誰がきるかつ！――

そして、サクヤ姫との再会は一週間後に決まった。

第17話～魔狼艦隊～（後書き）

次回頑張ります。

## 1-8 話～再会～（前書き）

新キャラクターを発表させました。

やめつとけこの「仕様の」許可をレフタル様に頂きました。

エレノア・アリアドネS·J·e

アマテラスの艦内の謁見の間に向かう……それにしても、この船は軍艦とは違い静かな雰囲気やな、静寂の一文字しか浮かばへんな。

やがて女官のさゆりに案内されて、謁見の間に着いた。

やがて女官のさゆりに案内されて、謁見の間に着いた、まず、うちが驚いたのは護衛が全く居ない事とサクヤ姫が先につちを待つていた事や。

「お待たせ致しまして申し訳ありません姫様」

「いえ、私が早く来てしました、紅姫」

姫様の側に控えて居た、海原艦長がうちに手紙を渡す、内容は……

「……これは……本当ですか？姫様」

「はい、手紙の通りです」

手紙の内容は以下の通りや。

紅姫、お久しぶりです、この手紙を貴女が読まれると云ひ事は、無事サクヤは貴女に会えたと言つ事の証になりますね。

ついでに、我が国は西洋圏の諸国に戦を始めるつもりです、その前に

サクヤを利用する者達から、サクヤをこの国から逃がす事を私は決めました。

貴女の居るヴルゼリア公国に迷惑をおかけ致しますが、なにとぞ我が娘サクヤをお願いいたします。

紅姫もお元氣で

サクヤの母、シズカより

「紅姫、母の手紙には何と書かれて、いました？」

姫様の手は真っ直ぐに、そして穏やかだが、強い意志でうちを見据えてる。

「はい、姫様を私に頼みますと、書いてありました」

「母様……」

サクヤ姫が、お顔を伏せて、静かに泣いている、うちは、優しく姫に声をかける。

「（）安心下さい、う……いや私が全責任をもつて、姫様の意志を騎士団と国防軍上層部に、お伝えいたします」

それから、一週間は忙しい日が続いた、局長と副局長に相談して、警備隊の手配と亡命の受け入れ準備に、極東諸国連合軍との戦いの準備に追われた、うちの仕事は姫様のお相手が主になっていた。

そんなんある日の事、突然綾人が、とんでもない思いつきを言い出した。

＊＊＊＊

神薙綾人Side

「そうだ、エレノアさん、サクヤ姫に外出は進めてみた?」

「が、外出!? 綾人、アンタ正氣か?」

無論、綾人の目は、正氣やつた、綾人の理由はただ一つ、『年頃のお姫様が、軍艦に缶詰なんて不健康だつ、護衛は俺達が完璧にすれば大丈夫だつ、だからエレノアさん! 是非、姫様の外出を進めるんだつ!!』

ほとんど勢いのままにのノリやつた……もちろんうちは全力を挙げて反対した、しかし、副局長や　局長が『大丈夫、警備隊にはうつてつけの人物を付けるから、異国の町並みをサクヤ姫に楽しんでもらいなさい』の一言で、うちは敗北した。

そして、一つの問題が上がつた、サクヤ姫は洋服をもつていなかつた。

＊＊＊＊

ふう、困りました……私は【洋服】と言つ西洋圏の服は、着たことは無いのです……しかし侍女のさゆりとけいと綾人が『騎士団が、万全の警備体制で姫様をお守り致します』と、言つてますし……

それに、三人がせつかく選んでくれた『ドレス』と言つ装束も素敵ですが……海原艦長は少し不満そうでした、何でも『何処に賊が居るのか解らないのに街に出るのはどうかと……』言つてました。

「この、どれすと言つ衣装は、かなり薄いのですね？」

「姫様の十一単に比べれば、薄いですよ姫様」

「そうです、姫様には、着物もお洋服もお似合いです」

「一人とも何だか、嬉しそうです、でも何故私が、お洋服の『試着』をしなければいけないでしょ？私にも服を選ばせて欲しいです……」

綾人が選んでくれた服はどれも可愛いリボンや飾りがありました、着替え終わつてから、綾人が写真を綾人が泣きながらカメラで撮影をしていました……私が綾人に悪い事をしたのでしょうか？ならば後でお詫びをしなければいけないです。

さて、姫様の支度も整いました、後は私達もお供のご用意をしなく

さゆりSide

ては、ダメですね。

(ああ、姫様のドレス姿はレア物でした……流石モフモフの達人神羅綾人殿、サクヤ姫の尻尾がふあふあ揺れてますつ、極めつけは頭の耳が緊張氣味のせいで辺りに耳を動かしています)

「さゆり、サクヤ姫をお持ち帰りして良いか?」

「ダメですっ、綾人さん、姫様は私の物ですよ」

「あの……さゆりちゃん?」

綾人さんは姫様から私達の服まで、ご用意して頂きましたが、これだけは絶対に譲れませんね。

さあ、異国の街にお出かけです

ふふふつ、三日後が愉しみですね……

\* \* \*

三日後、空港へ

エレノア・アリアドネSide

さて、王族儀礼艦アマテラスの搭乗口の前で、姫様の一行をお待ちしてゐる、警備は、その殆どが騎士団の精銳で固めてゐる。

「なあ、綾人」

「どうかしたのか？エレノアさん」

綾人の首に腕を回して、ヘッドロックをかけて綾人を問い詰める、ラブリー・フューリオ君親衛隊の間で、『麗しのサクヤ姫』萌え萌えブロマイドが、無料で巡回していたから、直ぐに回収をして回った。

（ネタは上がつてのや、白状してや、神羅綾人君）

（あははつ、目が笑つて無いね……エレノアさん）

引き攣つた笑顔で誤魔化そうとしても、それは問屋は下さんで…？

「うふふ、相変わらず仲が良いのですね？紅姫」

一人で声のする方を見るとサクヤ姫が、笑顔でこちらを見ていた。

「姫様、そのドレスは、どうなさいました？」

クスクスと笑つてから、『はい、綾人に選んで頂きました』と、うちに告げる……反則や、可愛いフリフリとリボンが付いた子供向けのドレス姿に正直、圧倒された。

「／＼／＼＼＼、どう、似合っていますか？紅姫」

「／＼／＼＼＼ハイ、トッテモ、オニアイデス、ヒメサマ」

思わず言葉が口ボツトみたいに固まる……しかも上田遣いで、うちの方を見るから、危うく意識が陥落するところだった。

\* \* \*

### 神薙綾人Side

（……はつ、いかんいかん、危うくお持ち帰りしそうになってしまつた……）

「それでは、今日一日姫様の護衛を努める神薙綾人です」

「エレノア・アリアドネです、警備は全責任をもって当たります」

俺達は私服でサクヤ姫の護衛に当たる事になつてゐる、イリア隊長達はルートのチェックをしている、エレノアさんは……少し固まつていた……サクヤ姫のドレス姿は、恐るべき破壊力だな。

さて、予定通り街に車で出かける、さゆりとけいとサクヤ姫の三人はまるで姉妹みただな。

\* \* \*

### サクヤSide

これが、母様や他の方々が、おっしゃつていた西洋の町並みですね、まるでお城みたいな建物が、沢山あります。

「二の通りは、ヴァルゼラートの大通りです姫様」

紅姫が教えてくれた、通りに田を向けると、沢山の半獣人が行き来していた。

「そういえば、私達は耳や尻尾を隠さずに、しますが大丈夫なですか？」

東洋諸国なら、迫害の対象になる、純血・混血を問わずに、紅姫がその事を詳しく教えてくれた。

「そうですね、我が國は他種族を無意味に差別はしません、しかし中にはやはり差別を平氣でする者達もいますが、暖かく受け入れております、確かに十代前の王様が、半獣人のお妃様をお迎えした時に、『これからは、私は妻に素晴らしい者を迎えた、これからは種族を問わずに、誰もがこの国で暮らせるのだ』と宣言しました」

（我が國も、この国の様に、なれるのだろうか……）

私の想いが表情に出たのだろう、紅姫が優しく話しかけてくれる。

「必ず、姫様の願い通りになります」

「ヒレノアさんの言う通りです、サクヤ姫」

綾人の一言に忘れていた事を思い出した、紅姫は私が無理に父に頼んで処刑の代わりに、国外追放された事を……

「……」

急に私が黙つてしまつたので周りも静かになつてしまつた……

「姫様、気分転換に外を歩きませんか？運転手」の辺りで車止めてや

？？？車を止める？外、つまり町並みを歩く？

「Hレノアさんつ、正氣ですか？後でものすぐ怒られますよ」

「大丈夫や、この辺りにフェリオやサラ将軍の隊も警備してん、それに、もう連絡済みや」

紅姫は、まるで悪戯っ子みたいな無邪氣な顔をして笑っていた。

\* \* \*

## Hレノア・アリアドネSide

さて、安全は確認済みやけど、万が一があつたら姫様に申し訳がたたん、うちがトップバッターで車から降りる。

しばらくして再度安全が確認されて、サクヤ姫が車から降りる、うちが姫様を連れて行きたかつた場所に案内する。

目の前に、「この国一番の銘菓店『シャングリ・ラ』が見えてきた、フェリオはこの店に何時かのジャンボ・パフェ食べ尽くし事件のせいで出入りが禁止されてる、まあ、うちがフェリオにたまに、隊長に内緒でプリンを買って帰る、約束で勉強会をする、バレそうな時は綾人の野菜お菓子が効果てきめんやな。

「此処は、お菓子のお店ですか？紅姫様？」

「つあーっ、お菓子が沢山あります～」

さゆりさん……けいさん、アンタ等仕事忘れてへん？

「姫様、どのお菓子を、お食べになれますか？」

「はい、この大きなアイスクリームとか飾り付けが色々可愛いのが  
良いです」

姫様……それは、フェリオが食べ尽くした【挑戦メニュー】何  
ですけど……此処は絶対にダメと言わないと、後が色々な意味で恐  
ろしい……

「すみません、姫様、そのメニューは、今は置いて無いんです」

「どうなんですか？」

（あんな、巨大なジャンボ・パフェが姫様に完食出来へん……）

この店で一番美味しい、チョコパフェを進めておいた、しかし綾人  
が泣き声ながら、こちらを観ていた、理由は姫様の尻尾が子犬みたい  
に振っていたからや、気持ちは分かるけど、絶対にモフモフはさせへんで、綾人。

そして、シャングリ・ラを出ようとした時、遠くのビルの屋上が光  
つっていた。

(……スナイパー や)

しかし、つむら等より速くロープ姿の少年がうち等の前に立ちはだかり、片手を前に広げて、銃弾を砂に変える。

「ふう、間に合って良かったです」

「君は、誰や？」

「こんなお嬢さまや、高位の魔法使いにしか出来ない。

「どうあえず、【黒い賢者】と書つておきます」

「黒い……賢者やで」

多分……本人や……七千年前、正体不明の大魔法使いや、尊では【最強の龍王】と伝えられてる……

「まあ、元最強ですね、今は力の使い過ぎで、ヘカトンケイルを止める事がやつとですよ」

あの、ヘカトンケイルがやつとやで……どんなだけ凄いんや、この人は？

「アレスと書つ名前があります、エレノアさん」

おまけに、うちの心まで読んでるし……

「ア、アレス先生！？」

声のする方向を見ると、フェリオが、ガクガク、ぶるぶる震えてる  
……脅え方は……隊長より、脅えてる。

「そんな事より、姫様の安全を優先や、フェリオ此処は任せる、え  
えなつ！」

「は、はいエレノア参謀」

「フェリオ君、僕も居ますよ、後で色々話を聽かせて、下さい。」

二人に構わず、姫様を車に押し込む様に乗せると、空港に猛スピードで向かう。

\* \* \*

空港へ

エレノア・アリアドネSide

無事、空港に到着して、姫様をアマテラスにお連れする、しばらくして、姫様が口を開く。

「紅姫、できれば、私の所に還つて来て欲しかつた……」

「姫様？」

顔を伏せ泣きそうな声でうちに語りかける姫様……正直、つちは迷つてゐる姫様の所に居るか、皆の所に戻るかの一択が、正直苛立つ……

すると姫様は、顔を上げ笑顔で語りかけてる。

「いへ、……いえ、エレノア・アリアドネ様、どうかお元氣で、騎士団の皆様に今日は【ありがとうございます】とお伝えください」

「はい、姫様も身体にお氣をつけ下さい、姫様、無礼を承知で申し上げます」

「何でしょう、エレノア様？」

思い切つて姫様に伝えたい事があつた。

「姫様は、うちを憎んでいませんか？」

「いえ、あの時私が父に貴女の助命を頼みました、だから、貴女が無事に生きていて本当に良かった」

「／＼＼＼＼あの……エレノア様、私にも、私の【想い】を受け止めて下さる方はいますでしょうか？」

恥ずかしがつて、うちに聞く姫様に、笑顔で一言

「もちろん、姫様に相応しい方は必ず現れます」

と一言、言って臣下の礼をして謁見の間を後にした。

18話～再会～（後書き）

次回頑張ります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6777u/>

大聖堂騎士団員～イリア・キサラギの軌跡～

2011年11月24日13時46分発行